



ケニーD

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

囚

【Nコード】

N2870X

【作者名】

ケニード

【あらすじ】

我が娘を奴隷とすること、自身の幸福のために他者を殺めることの正義、そして人々の幸福の在処とは。 囚が第一部（2006年以前）、未掲載が第二部（2007年以前）、凶が第三部となります。

陽の昇りと小鳥の羽ばたき、そして草木の揺らぎが目の奥に浮かび、次第に色づいてゆく。どれも淡く、本物にはほど遠かった。その色彩は目覚めへの合図のようなもので、きつかけとなるのは小鳥のさえずりを聴かせる小さな目覚まし時計だ。頭で自然を感じて身体を起こし、いつも煙草を一本吸ってから店を開ける準備をした。外に出ると、朝の天気に応じていつも小菅の気分は左右され、今日はとても気持ちのよい、問いかけるような風と白む空が、頭にこびりついていた眠気をほじくるようにして奪いさつてくれた。こうやって自然が生き物の眠気をかき集めて、十分にたまったのなら、ようやく夜になるんじゃないかね、と小菅はなんとなしに考えた。

店のシャッターをあげ、夜中のうちに業者に搬入されている菓子や雑貨、飲料と伝票とを確認していると、家内が台所で昼の弁当を作る音が聞こえた。チキンカツや煮物といった簡単なものではないけれど、手作り弁当ということで客の評判はよかった。商売のうえで目玉商品はやっぱり必要で、一応はこれが目玉といえるのだと思う。

店の整理を済ませ、レジカウンターの裏側から居間に首だけをのぞかせてみると、眠たそうにする娘がパジャマ姿で口をもごもごさせながら歯をみがいていた。

「歯みがき粉が垂れて畳が汚れるじゃないか」というと、娘は言葉にならない返事をし、洗面所へと戻っていった。

「もうすぐ時間だから早くしなさい」

娘は高校二年生で、当然学業があるものの、小遣い稼ぎにアルバイトがしたいというものだから、登校前の早朝の一時間と夕方の三時間を小菅のもとで働かせていた。他でアルバイトをさせるよりよっぽど安心できる。しかしその分、時給は少しばかり高くしていたのだけれど――。娘の容姿的なかわいさというのはいつの間にか、

同じ風景を見続けているかのようにして麻痺し、わからなくなっていて、小さかった娘を両手で抱きかかえた頃のような幸せに満ちた感情もなかった。しかし、娘が、ふと若かりしときの家内を思い出させるような、遠くを憂いとともに眺めるような表情を見せたときには、小菅は家内をそつと見つめたり、昔を思い浮かべたりもした。そしてそんな娘には、どうやら色々な虫がつくようで、男子生徒にとつては少しばかり人気があるのだらうとも思えた。目の届く場所で働かせていても、ファンらしき客は今までに数人いたのだ。父親が店にいようと、堂々と近づいてくる者もいたのだから、遠くで働かせるのはほんとうに、夜道を歩かせるより恐ろしいことだ、と小菅は考えていた。

娘は、男の子に興味なんてない、油絵を描くので精一杯だ、といっているものの、いつ心がわりするかもしれず、小菅は最近では自分でも気づかぬうちに客をにらみつけていることもあった。そんなときは、なんて嫌な人間なのだらう、と自己嫌悪もしたのだけれど、結局は同じことのくり返しでしかなかった。しかし、看板娘、という点でいえば、娘はその任をよく果たしているようにも考えられた。娘がレジカウンターに立つ朝の一時間のあいだ、小菅は店内をのぞける居間に戻り、軽く朝食をとりながら新聞を煙草の煙で黄色く染まるかと思えるほど読み続ける。結局、新聞を読んだところで、小菅の生活になんらかの変化があったかという、なにもなかった。身内が殺されたとか、罪を犯したとか、そういう話もとくになく、今ではもう、選挙にも興味がなくなっていて、世の中の動きを知るといふことは大切なのだらうけれど、しかし、それを知ったところで意見を交わす相手も今はこれといっておらず、小菅はただの小さな商人だった。なのになぜ読むのか、それは、「世の中のこと、なにも知らないのね」と娘に馬鹿にされないようにする、ただそれだけのためだ。いつか娘に勉強を教えてくれといわれたときのために、高校時代以来あけていなかった教科書を、こつそりと何度か読みふけたこともある。そのおかげで威厳は失われることもなかった。

今まで——、いや、今も小菅は家族と平穩に過ごすこと以外になにも興味がない。オリンピックやマラソンやなにかしらの勝負を見て、人がなぜあれほど熱狂的になれるのか不思議でならなかった。そして、虚構のドラマを見てなぜ涙を流すのか、虚構だからこそ安心して涙を流せるのかもしれないのだけれど、それでも小菅にはそのことも理解ができなかったのだ。

ふと、小菅は考えた。私はいつ喜び、いつ涙を流しただろうか、と。そのことがさしあたって重要ではないということと、そして今、最も重要なのは、娘に蠅が近づいていることだ、ということ、娘になれなれしく話しかける男の声で判断した。その声の主は毎朝決まってこの時間帯にくる、娘と同じ高校に通う男で、小菅は名前を知りたいと思ったこともない。毎度、パンと紙パックの牛乳なんてものを購入しているらしく、まったく健康的に思えた。小菅はそつとのぞく。

「今日こそ一緒に登校したいんだけど」

ほんの少し髪を茶色に染めて、目をいっぱい輝かせている少年の口調はたどたどしいようでもあった。

「駄目よ。いつも来てくれて嬉しいけど、駄目なものは駄目。あたし、忙しいんだから」

「そんなつれないこといわないでさ、頼むよ」

「もうっ。こんなところで牛乳なんて買わずにさ、大人ぶってカクテルでも飲むほうがいいんじゃない」

「……それって、軟派ってこと？」

小菅は笑わずにはいらなかった。もちろん、声には出さずひっそりと。初めて詳しく話の内容まで聞いてしまったのだけれど、娘は以外としつかり者のようで、牛乳を飲み続けるような軟弱で不健全な男にはたぶらかされることもないような気がした。「今日こそ」という言葉から推察するに、なんだか娘にアタックしているのかもしれない、その点でいえば、彼は軟弱にあらず、なかなか熱い男なのかもしれない。

「あたしはね、だれとも付き合う気はないの。だから学校で好きとかいうのもやめてくれないかしら。遊んだりするのは嫌いじゃないから友達ならいいっていつてるでしょ？ 誤解されるから二人きりってというのが嫌なだけよ」

「じゃあ、こんど遊ぼうじゃないか。友達を誘うよ」

「今は忙しいからそういう話はまた学校でね。いつまでもここにいたらあたしの父さんが怒るかもしれないわよ。とっても怖いんだから」

「見たことあるよ、ちつとも怖くなんてないね」

「あら、いうのね。でも案外そのとおりかもね」

小菅はそばに置いてあった娘用の手鏡を唸るように見た。少しばかり目つきを強張らせてみたものの、とくに恐ろしさもなく、なんとなく、そんなことをしてしまった自分に照れた。お客を怖がらせるような顔じゃなくてよかったよ、自分をそうやって納得させ、少年が帰ると、「今日はやけに話したようだな」と、居間から足を伸ばし、サンダルを履きながら娘にいった。

「席替えて席が離れたからかしら」

「授業中にも喋っているのか？」

「そんなわけないでしょ。彼なりに、遠くにいった感覚でもあったんじゃないかしら」

「若い者の心はよくわからんね」

「あら、まるでいきなり歳をとって生まれたかのようないいかたじやない」

「そうかもしれないな。さあ、もう学校の準備の時間だぞ」

そういつて店番を交代し、のんびりと客の相手をするのだった。しばらくもすると着替えを済ませた娘がブレザーの制服姿で私のもとはやってき、「どう？ おかしいところはない？」とふわりと舞って見せる。「いつもと同じさ。べつにおかしくもなんともない」というと、「もうっ」と少しだけふくれて今度は家内のもとへ行き、同じようにたずねる。これは毎日のことで、感覚の麻痺している小

菅には、やはり答えようもなく、それに、「綺麗だよ」などと恥ずかしいことを嘘でもいえるわけもなかった。「嘘でも嬉しい」などと女は喜んでみせることがあるけれど、そんな心はまったくいい加減で、もしかすると、「嘘でも嬉しい」という胡散臭い言葉自体が嘘そのもので、手玉にとられているのは逆に男のほうではないのだろうか、とも思える。したたかな女は、嘘の喜びをみせ、男になにかとねだっているのかもしれない。女の笑顔は強力な武器だ。小菅はそう思い、過去をなんとかしに振り返ってみた。幸い、家内はしたたかではなく、それは喜ぶべきなのはわからなかったけれど、こうやって今も丹精こめて弁当を作っていることに關しては、素直に喜ぶことができた。

店の客層は、にぎやかすぎずしかし寂れすぎてもいない住宅街という立地のせいもあってか、ほとんどが常連で、大抵は見た顔ばかり。なんの新鮮さもなく、いつものように感覚は麻痺していた。たまに、車を店のまん前に停めて、あわてて店内に駆け込み、トイレを貸してくれと頼む客もいて、そういうときは金魚をすくったときのように少しのあいだ楽しい気分になる。用を済ませた後は、金魚が「ポイ」を破り仲間のいるプールに戻るかのごとく、車に駆け戻りさよならをされることがほとんどなのだけれど……。ああ、なんと愛想のない人間の多いことか。そう考えた小菅自身も、愛想は決していいとはいえず、そのマイナス面は家内が近所付きあいをすることで補ってくれている。二人はそれぞれの役目をいつの間にか自覚し、バランスよくこなしていて、だから今の生活も成り立っているのだろうと思うことができた。

しばらくすると、家内が作り終えた弁当を店内に持ちこみ、陳列した。そのときに居あわせた老人客の一人が、家内の後ろから、並べられる弁当をもの欲しそうな表情で見つめていた。並べ終わると、今度はそれぞれの弁当を一つ一つ手にとり、物色するように見入った。小菅は、この老人がこれからこの弁当のどれかを食べるのだろうということが可笑しくてたまらなかった。自ら選んだなにかを食べてこの老人は生きる、ということが無性に可笑しかったのだ。当然、生きるために食べるこういうのは当たり前のことで、しかし、ほとんどの老人はそこに執着を思わせる。いや、老人でなくともいい、温かな家族の食事の団らんだってそうなのだ。人々が幸せに満ちて好みの食事をするどの姿も滑稽なのだ。小菅は思った。私も笑われるべきなのだ、と。そして、人の目を盗んでなにかを食べるということとはとても利口で、マナーを学んでフランス料理を食べることよりもよっぽど気高いのだ、とも思った。幸福を笑っているので

はなく、無警戒をいつているのだ。必死さは時として嘲笑を生むことがあるものの、やはり、無用心のほうこそ笑われるべきだ。とくに、生きるうえでは。

老人はぶつくさいいながら手にとった弁当とペットボトルのお茶をゆつくりとレジカウンターまで持ってきた。焼いた鯖の弁当だった。小菅は「温めますか？」と聞かず、代金を伝えた。すると、「温めてはくれんのか、最近はだれもが冷たいのう」と老人は小さく呟いた。小菅は聞こえない振りをし、会計を済ませた。できたての温かい弁当をなぜ温める必要があるのか、小菅は老人の皺だらけになっている砂漠から生まれたような手をじつと見ていた。冷めていない弁当だったということもあり、小菅の真意はきつと伝わらなかったに違いなく、少し、弁当も老人もいまいましく思えた。

一段落終えた家内はせわしなく、弁当を作り終えたあとは続いて家事にとりかかる。洗濯や掃除、買い物とあくせく働き、昼過ぎの休憩までまともに会話する暇もなくて、だれよりよっぽど働いているように思えることもあった。しかし小菅は、それが家内たるものの有りようだ、と考えていて、手伝うことはせず、客のない暇を見つけては居間との境で煙草をふかし、外の通りをのんびりと眺めた。もちろん、怠けているように見えても、店内のことはほとんど小菅がやっていて、店を閉め、最後に寝るのも、だれより早く起きるのも小菅なのだ。

店のある場所は住宅街にもかかわらず、昼を回った直後から弁当を買いに客がどつと押し寄せてくる。常連以外ではスーツ姿や白衣姿（なぜか彼らはいつも堂々としている）の者も多く、一瞬にして店の奥が人で見えなくなるほどごった返すものの、それでも小菅は一人でレジスターを打った。そして、その時間を刺激のあるものとして一応は楽しんでいた。その時間帯こそがあとになって働いたと実感できるもので、その時間以外はただの、老後を暮らす父の顔と同じような表情になっているに違いなく感じていた。昼以外の退屈しているとき、ふらつと外に出ると、雲が夜空をこするような

動きも十分に確認できたし、影の微妙な傾きだつて把握することができた。近所の猫が鳴いた回数も数えることができるのだ。近隣の住人が通れば、軽く、会釈だけはし、よく晴れた日には皆一様に、表情がとても穏やかだった。

近所には早口で界限に有名な畑中という五十を超えた婦人がいて、いつも白を基調としたシンプルで、そして清潔感のある格好をしていて、一見すると、教養もありそうなだけけど、話すと畑中さん自身の口の動きが追いつかないほどぺらぺらと言葉を放つものだから、一瞬にして清らかそうだったイメージが破壊されたのを、小菅がここに新店舗を構えるために引越してきた当初の衝撃として覚えている。畑中さんも近所の住人ということで、今では一応はこの常連で、小物や食料品以外には女性週刊誌を何冊か、定期的に購読してくれている。きつと、一流の声優だつて苦労しそうなあのとてもない動きをする口から、近所の婦人連中と芸能人の話やくだらない噂といったあたりとあらゆる低俗な話題を飛び出させ、ちよつとした人気と、精神的主導権を握っているのだろう。しかし、そんな畑中さんは、近所の一部の住人から、壊れて早送りにしかないビデオデッキのようだと、陰口を叩かれているらしい。店の界限には住宅がマンションを含めて六十棟ほどあり、車通りの少ない車道をはさんで数えれば、もつとあるのだけれど、とりあえず、よく見る連中はたぶんこの六十棟の住人で、そして、その界限ではだれが作ったのか、いつのまにやら大きい派閥が二つできていた（簡単な集まりというのは気づけばできているようなものなのだろうけれど）。一つはあの早口の畑中さんが率いるもので、もう一つはいつもエプロンを着て頭も白髪混じりという、まったくお洒落に興味のなさそうな、女性としての魅力の消えうせた、草しか生えていないような田舎から出てきた古田というこれまた五十代の婦人が擁するものだ。小菅はあまりそういった女同士のどろどろとした話に興味がなく、以前、家内がどちらの派閥に属するか畑中さんに詰め寄られたことがあったのだけれど、そのときは小菅が表に出て、

無益で醜い争いに家内を巻き込まないでくれ」と一喝した。すると、婦人は顔を紅潮させ、「なんっ人、二度っ店っ行くもっでか。こっ町で商売できなっしてやっわ」といつも以上の早口でまくしたてただけけれど、商売を妨害するような感じの意味だということはなんとなく理解でき、「人のささやかな幸せのある生活を奪おうというのでしたら、あなた自身もそれなりの覚悟が必要ですよ」といつてやった。すると、次の日からほぼ毎日、あわせてけっこうな金額になる商品を媚びるような笑みを浮かべて購入してくれるようになったのだ。

一方、古田さんのほうはといえば、真面目という文字が一面に書かれた服を着て、同じように真面目の旗を掲げてもなんら違和感がないと思えるくらいの生真面目ぶりで、二人の息子は一流大学に在学中、娘は弁護士になっている。婦人は町内会の役員もしているようで、肩書的には古田さんのほうが畑中さんよりうえだ。小菅が知っていることはその程度のことで、それ以上あまり深いことは家内に聞かないようにしている。婦人たちは婦人たちの社会でそれぞれ苦労のあるいがみ合いをしているのだろう。それをわざわざ知って、こちらまで精神的な苦労はしたくない、と思っただからだ。

面白いのは、畑中さんと古田さんが店内で鉢合わせたときで、そうやって人をあまり笑いたくはないのだけれど、それでも、彼らが店内のガラスや鏡越しに、お互いの姿を意識して避けあっているあからさまな姿は、ひねくれた子供のようでもあり、警戒する猫のようでもあり、馬鹿らしくて苦笑せずにはいられない。しかし結局、小菅にとつては二人ともいいお客であつた。

昼の客に畑中さんがまじっていた。とくに会釈以外の挨拶という挨拶は店内ではせず、ただ購入される品物からなにかと想像を巡らせるだけだ。今日は、どうやら弁当やお茶などを買って、珍しく昼食を作る手を抜いたようだった。会計を済ませると、いそいそと肩を他の客にぶつけるような勢いで出ていった。あの婦人は口だけでなく、行動もせわしなかった。まったく落ち着きがないのだから、

いったい家庭でどのような暮らしをしているのか、洗濯機の回転や、扇風機の羽の回転さえ不満に思っているようで、なかなか楽しいであろう生活をしているような気がした。

昼もすぎると、陳列されてあった商品が所々抜けているのが目がつく。簡単に補充し、それから家内が弁当の残り物で彩ってくれた卓袱台につき、遅めの昼食をほとんどは二人でとっている。砂浜のすべての砂をぎゅうぎゅうに詰めた砂時計を見続けるような一日の中で、ようやく家内とまともに話をすることができ、小菅は多少、この時間を待ち遠しくも思っていた。

「裏のおじいさん、もうそろそろ危ないんですって」

家内が玉子焼きの切れ端をつまみながらいった。ほんとうに何気ない、小菅の嫌う陰口ではない、近所の話題が昼の主な内容だった。

「そろそろ？　じゃあ最近亡くなったのはだれだったかな？　てつきり裏のじいさんかと思っていたよ」

「先週亡くなったのは、吉山さんのおじいさんですよ」

「ああそうか。裏のじいさんが亡くなると、きつと静かになってしまうなあ。多少、界限にも子供が増えて、しつかりと叱ってくれる頼もしい人だと感謝もしていたのに」

「叱ってくれたのは吉山さんでしょ」

「ああそうだったか？」

家内は少し呆れた表情を見せた。

食事も終盤になると、並べられていたおかずはほとんど平らげられて、最後には消しゴムのような玉子焼きだけが一切れ残っていた。小菅は家内よりも多く口に使っていたので、ごちそうさまというとしていたのだけれど、ふと、店内の様子を気にしてまた目をちやぶ台にやると、玉子焼きは半分に分けられていて、瞬間に、少しの憤りと、いじらしさと、涙の予感とで複雑な気分になった。小菅は、それほど食べるのに苦労するような生活の日々ではない、家族にひもじい思いをさせているはずはない、と思っただけ、それは間

違いではなかった。目の前の玉子焼きが、無造作に分断され、波に流され離れていくだけになってしまった島のように見え、少し、やるせなかった。せめて、向かい合う二人に対して垂直ではなく、水平に分けられていたのなら……、きっとこの思いはなかったに違いない。

「なぜ、今日に限って、お前はこんなことをするんだ」
できる限り感情を押し殺してたずねた。

「こんなこと？ 玉子のことをいつてるのかしら？ いらないのならいただくわよ」

家内はぺろりと二切れとも口に放り込んだ。あつ、と思わず言葉が飛び出た。なんということだろう、家内の行為は、理由なき厚意だったのか。くだらないことを深く考えて、みすみす最後の玉子焼きを逃してしまった。いや、分けられる前は家内にあげるつもりではあったのだけれど。たかが玉子焼きと人はいうかもしれない。しかしどの家庭でも、好物の取り合いと、その隙をはかる攻防が内心でも繰り広げられているはずではないのか。貴族であろうと、おいしいものは人より多く食べたい、本音はそうであるはずだ。きつとそうなのだから、「たかが玉子焼きで」と笑ってはいけないのだ。玉子焼きが日曜日の平和な昼を思わせるのなら、さくらんぼの甘い果実でもかまわない。一つだけ残されているのを見れば、きつと、少しくらいは卑しい思いが生まれるはずだ。小菅は、まんまと家内の気まぐれにしてやられたという気分になり、かといって、恨んだりはずせず、この経験を次に活かせばいいじゃないかと考えた。

昼食の時間には幸い客はなく、小菅は店に戻るとふくれた腹を軽くさすりながらまどろみに似たものを、カップに注がれたコーヒーのその香りだけを楽しむような感じで味わった。瞼の中を、赤い虫が円を描いたり波打たせたりして踊っている。小菅はたまに、不思議な感覚を味わうことがあった。それは、睡眠中、ふと目を覚まし、確実に目が開いているにもかかわらず自分の寝ている部屋と違う見たこともない場所が視界に映っているというもので、そして

なんだか瞼をまたたかせると、それぞれの瞬間に、自分の部屋と、知らない部屋とが交互に映るのだった。やがて力をいれて瞼を閉じると、知らない空間が圧縮されるように脳内に入りこみ、瞬間には小菅のすぐそばに、だれかがいるような気配を感じるのだ。しかし、不思議と、その一瞬に目を覚ますことはできず、朝になって、不思議な体験をした、と思い出す。もちろん、夢だろうと思っている。そう思っていたほうが混乱しなくて済むし、なにより、夢でないとして、家内や娘に話したところできつと、夢でもなければ狂ったのよ、といわれるに違いがないのだから――。

空に浮かぶ充血した碧眼が、辺りの雲まで紅く染めた。じきに、娘が帰ってくる。通りの先にある、自転車でのぼるにはかなりの苦労を強いられるあの坂から。

小菅は、娘がその坂の頂上に徐々に姿を表す瞬間が好きだった。紅く揺れる太陽を背に、黒く長い髪をふわりと風になびかせ、少女は歩く。アスファルトに細い影が伸び、その影が少しだけ小菅のほうに早くつく。ほぼ毎日店の前に出て、お帰りという瞬間が好きだった。ただいまといわれるその瞬間だけには恋をしていた。それは、坂と太陽の生み出した幻想的な世界だからで、とくに枯れ葉の舞い散る秋は芸術作品を思わせるほど素晴らしかった。まあ、そのとき以外で、娘がどうというわけでもなく、そして、それが健全だし、そうでなければいけないとも思った。考えると、坂に登場するのは娘でなくともいいのかもしれないのだけれど、今まで見た中では、やはり娘が最高の画だった。なぜなら、あの坂をのぼるのはこの時間、ほとんどが買い物帰りの婦人連中で、息急ききらしながら買い物袋をぶら下げた自転車を押しての登場は、どこにも美がなく、さすがに目を覆いたくなるものがあつた。

店の前で小さく一服していると、やがて娘がゆっくりと登場し、小菅は客が来ないことを祈った。今日も一人で帰宅したようだったけれど、女の子の友人と二人で帰ってきたときは、いつもと違った輝きがあつた。それも小菅が好きな瞬間だったのだけれど、じつと二人に見とれていたりとすると、なんとなく、近所の住人に訝しがるような気もして、すぐに店内に戻ることにしていた。いつの間にか近くにいた娘がカバンを小さく小菅の腰にあてた。

「なにぼうつとしてるの？　ただいまっ」

「あ、ああおかえり」

「また、カメラで撮りたいとか考えてたんでしょ？」

「ん？ いや、もう思ってないよ。毎日写真を眺めて、素敵な瞬間を見飽きたくはないからね。それに、インスタントカメラじゃため息の連続になるだけだろうしな」

「親バカもほどほどにね」

娘はそういつて部屋に駆けていった。親バカとは少し違うのだけれどね、と思いつながら手に持っていた空き缶に煙草をつぶし、娘が交代にくるまで雑務をこなした。

娘は髪を結び、前掛けをして少し気合をいれ、それから店内のそれぞれの商品を指差し確認で注視しながら歩いて回った。夕方の働き始めはこうやっていつも張り切っていて頼もしく思えるものの、アルバイトも終了間際になると、お客が途切れるたびに時計ばかり見て、ほんとうに退屈そうにもしていた。

小菅はというと、居間と店内を頻繁に往復した。というのは、夕方の場合、娘のファンらしき客が次から次へとよくくるからで、そのたびに居間から飛び出し店内で監視をしたのだった。娘は呆れて「ただのお客さんじゃない……」ということもあった。朝のクラスメイトのような会話こそあまり聞かなかったけれど、店内で見ると、男たちの視線が娘にばかりいつているのがすぐわかる。なんとわかりやすく単純なのだろう、と嘆きたくなることもあって、だれにも悟られない想いのほうがよっぽど楽しいということを一人の男として教えてやりたくなることもあった。だれにも悟られない想いの楽しさというのはもちろん、死ぬまで思慕し続けて結局、相手に悟られないなんてことになれば意味がないのだけれど、そつと見守るような、いつもふと見かけるような、それでいて相手が気づいていないというのがよくて、だからこそ、なにげに目が合ったときに喜べる。相手が思われていると感づいたなら、喜んでくれればいいのだけれど、調子に乗る場合や、逆に避けられる危険もあって、その場合、やはり、悟られるのが早すぎたということだと思う。だからじっくりと攻めたほうがいいのだ――。と、若々しく恋愛談義を一人催してみたことに対し、小菅は意外な気分になった。そして、

彼らの恋の消失を祈るために、娘に対しては絶対に、早々に悟られたほうがいいのだ、と思いなおした。男として男の味方になるより、一人の父として娘の看守になることをいつも以上に強く決意した。と、まるで小菅が、「娘を嫁にやらん」と頑なにいい続ける偏屈親父のようにも思えるかもしれないのだけれど、当然、いつかは娘を嫁にやらなければいけないのだということは理解していて、今はたんに、若さゆえの過ちを犯さないかという心配をしているだけなのだ。きつと、どの父親だってそうに違いはずなのだ。そこには責任という言葉が背中につなげた風船のようにちらちらと付きまとっているのだから。

以前、万引きした中学生の少年がいて、どうもわざと見つかるようにくすねたふうだった。あとになってなんとなく気づいたのだけれど、彼もどうやら娘を気にいつてしまったようで、気にしてもらいたくて、だからあえて見つかるようにしたらしかったのだ。いじらしいというか浅はかというか、とにかく、そのときは見逃してやったものの、商品ではなく娘を狙う餓鬼だということがわかった今は、たとえ若い少年が娘の眼中になくとも、小菅は監視した。しかし、「まったく呆れちゃう」などと娘にいわれ、考えてみるとなるほど少し大人気ないような気がして、とりあえずその少年に対してだけは監視の目をゆるめたのだった。

「ねえ、このお菓子、買うね」

とチヨコレートクッキーの箱を手にとって見せた。

「仕事中に店内の商品を物色するのはやめなさいっていつてるだろっ」

「だって、お腹が空きやすい年頃なんだもん」

小菅は嘆息をし、半ば呆れながら会計する。

「あまり甘い物ばかり食べると小次郎みたいにぶくぶく太るぞ。それに、もうそろそろ夕食だろうっ」

「いいのいいの、心配無用よ。それと、もう仕事終わっていいで

しょ？」

返事も待たず、そのまま気まぐれに仕事を切り上げ、部屋に戻っていった。

ところで、小次郎というのは近所で飼われている雑種の犬のことで、性格は人懐っこいものの、水を詰めたような贅肉が中型の身体を大型にまでふくれあがらせ、その肉は歩くたびにちやぷんと波打ち、最近では暑い天候もあってか散歩も嫌がりだしたようで、ずいぶんとぐうたらにもなったそうだ。飼い主がリードを強引に引っ張る姿をよく見かける。まるで、石で作られた狒犬を必死に（しかし実際、飼い主は無表情だった）引っ張っているようにもとれて、滑稽だった。それに小次郎はよくよだれを下品に垂らした。犬はそういうものだ、と考えても違和感はないのだけれど、道路できらめく小次郎のよだれは赤や緑の気色の悪い虫を大量に引きつけた。昆虫は花の香りに引き寄せられると聞いたことはあったものの、よだれに集うなんて、それに、集まるのが蝶やミツバチならまだいいのだけれど、いざくるのは人の嫌う蛾や蠅といった類で、小次郎を呪術師のように恐ろしくも思ったりしたものだ。しかし、結果、害虫はそのよだれで溺れ死ぬのだから、逆に駆除の恩恵にあずかっているということ感謝すべきなのかもしれない。まあ、死骸だらけでテカテカしている道路を歩くのは気分のいいものじゃないのだけれど。

居間からテレビの音が漏れ、笑い声が届いた。そうやって楽しそうな音を聞くと小菅は、「この店をたたんで、煙草屋でもするか」と考えることがある。それは、少し離れた場所にあるタバコ屋の老婆がいつもテレビを見ながら接客しているからで、もちろん、煙草だけで家族を養っていけると考えてはおらず、すべてはほんの少しの寂しさのせいだった。

「なあ、次の休みくらい家にいたらどうだ、たまには家族で落ち着いて食事でもとらないか？」

小菅はつい、娘に声が届くように問いかけた。

「だめよ、絵の勉強があるから」

本格的に勉強がしたいといって娘は高校の美術部を辞め、ここで働き、絵をどこかへ習いにいつている。この、「どこか」ということを知らないというのは、親として恥ずかしいことなのかもしれないのだけれど、娘はなぜかたくなに口を閉ざすのだから、どうすることもできない。しかし、確実に絵を学んではいるようで、不安はあるものの、今までなにこともないのだから親としてはもう信じるしかなかった。今、小菅にできることといえば、必死に勉強している娘を美術大学へ金銭的な心配をさせずに行かせてやることくらいだろうか。そのためにも働いているわけで、だから無理にビールの美味しい夜の食事を家族とすることもしないのだ。日々に小さな幸せはあるのだし、寂しさを感じるなどと女々しい気持ちは棄てようではないか、小菅はそう考えた。

辺りはもう十分に暗く、ときおり走る車が放つヘッドライトの黄色い粒子が帯のように流れ、ガラスににじむ。店内には一人、立ち読み客だけがいて、風貌から人物像を推理するのを小菅は、退屈なときは楽しみの一つとしていた。見ると、漫画雑誌を読んで、ただの若いサラリーマンのようであるけれど、ページをめくる様は参考書を吟味して読むかのように静かで落ち着いていて、そこには教養が滲みでているようでもあり、しかし、読まれている漫画は子供向けのものだった。そのとき、小菅の視線に気づいたのか、青年ははつと振り返った。急な動作に驚いた小菅は反射的に目をそらしたのだけれど、青年はどうも不機嫌を顔に表しているようだった。どういうふうにもこの空気を取り繕うか考えていると、青年は踵を返し、なにも商品を持たずレジカウンターに向かって歩いてきた。ああ、なにか文句をたれるに違いない。放たれる言葉はきつと、彼のかけている辞書のように分厚い眼鏡をわざわざ介すようにして難解化されるのだろう。

「失礼ですが、最初から万引きをするものとして決めてかかり監

視されているようで、こちらとしてはあまり気分のいいものではありませんね。いずれ客をなくしますよ」

まったく見当違いの思い込みをしているようで、毅然とした態度が、青年が自分の正当性を確信しているようにすら思えた。小菅は、こういつたくだらない自分の中の正義にとらわれさらに、たとえ正当性を得ていたとしても、講釈までたれるという性格の人間が嫌いだった。お客といえど、青年のちっぽけな正義にうぬぼれた自尊心を折ってやろうか、と少々意地悪な気持ちになった。

「万引きを警戒して見られたように思える、というのは、それはお客さんの思い込みなんじゃないですかね？ 私は事実、お客さんが万引きするなんてこれっぽっちも、石の欠片ほどにも思ってませんでしたよ。見たところ、利発そうだし、健康的でとても若々しく、まさか、お客さんがそんな被害妄想じみた思考をなさるなんてね。人は見かけによらないもんですね」

すると、青年の頬は少し痙攣したかのようだった。

「僕が被害妄想じみています？ 客に対してあまりに失礼な言葉ですね。あなたの視線から警戒心が伝わったんですよ！ 『盗れるもんなら盗ってみやがれ、すぐに警察に突き出して社会から抹殺してやる』という殺気じみたね！ おだててから落とすようなそんな陳腐な論法では僕に屈辱を与えることなんてできませんよ。もっとも、万引きの疑いをかけられたというのは屈辱的なことですけどね！」

「お客さん、あなたはやはり思い込みが強い性格なんですよ。だってね、私はただだんに、お客さんがどういった仕事をしてどういう生活を送っているのか、あなたの格好を見て、その毎日を想像していただけなんですからね。気持ち悪いと思うかどうかはともかく、万引きを警戒されたというのは、やはり、あなたの心のどこかに万引きをしようという気持ちがあったんじゃないですか？ それとも、すでに私が気づかないうちになにかくすねたんですかね？ いわれるまえにいつておきますが、これは侮辱ではなく、あなたの言動か

らきた当然の帰結ですよ」

しかし、店主に見られれば、万引きしようなどという気持ちの有無にかかわらず不快な気分になるということは、小菅自身も他の店で体験していることではあった。青年は小菅の言葉に、心外だといわんばかりに顔を紅潮させ、拳を握りしめ、今にも殴りかかるうとしているようにすら捉えることができた。

「な、なんて店だ！ 許せない……」

青年はそれ以上言葉を発することはなかった。小菅もさすがにいいすぎたのかもしれないと思い、ひとこと謝ろうとしたのだけれど、ちょうどそのときに別の客が入ってき、どうやらそれは青年の恋人だったようで、それを確認した彼の態度ががらりと、しかも、軟弱な甘えん坊のように変わったものだからそれ以上ににごにも発展せず、そればかりか少しの買いものまでして去って行ってくれた。女のなかには男の前でぶりっ子する者もいると聞いたことがあったけれど、まさか男にも似たような人種があるとは知らなかった。変貌ぶりは他人の前であまりにも露骨で、少し彼を憐れにも思ったものの、見覚えのない一見の客ということもあって、この先の経営になんの懸念もないだろうし、そんなことよりも、初めて見るタイプの人間に感動と興味すら覚えていた。

居間のすぐそこで家内と娘の二人が聞き耳を立てていて、客が帰るとすぐに「お客さんになんて態度ですか。でも、へんな男だったわねえ」と家内がいった。

「利口そうだったのにな。ありゃきつと結婚してから女は苦労するんじゃないか。今は楽しくてもね。でもまあ、笑うのはよそうじゃないか」

「はいはい、じゃあお仕事頑張ってくださいよ」

それから入ってきた客に対して小菅は、なるべく観察しないように心がけ、淡々と接客をこなした。それでも、どうしても自然と視線はちょこまかと動くお客のほうに行っているようで、これはきつと動体視力のせいなのだろうと考えた。それに、動くなにかを見

るということは脳に刺激になっていいのだとも思える。しかし、また面倒なことになるのは御免で、客を見ることはなるべくやめて、小菅は期限の切れそうな商品の回収や陳列に勤しんだ。

深夜十二時すぎ、最後の客が買い物を済ませたあと、小菅はシャッターを閉める。長く、退屈の多い一日のようやく終わりだった。外に出てシャッターを静かに下ろすと、夜の、ほんのりと冷たい沈んだ空気を胸に少しだけ収め、明かりのついている近所の家々の窓を眺める。黄色や白のその明かりがいつも眩しくて、でも、やがて見上げる夜空の星とすぐに比べてしまい、星の輝く日は電灯に照らされている人々に対しての優越感もあった。「明日も晴れかな……」小菅はそう呟き、家内のいる居間へと戻った。食卓には湯気立つお茶漬けときゅうりの浅漬けが三枚小皿に添えられてあって、「お疲れ様」と家内の言葉もあった。「ああ」と返事をし家内に伝票を渡す。テレビで適当に二ユー・ス番組を探し、お茶漬けをすすりながら、しかし小菅の気はまだ完全に休まっていなかった。

「今日はやけに疲れたよ」

「大丈夫ですか？　なんでしたら、あとの作業手伝いますけど」

「いや、ありがとう。それには及ばないよ。無理しなくていいさ」

さらさらと流し込んだあと茶碗を置き、冷たい麦茶を飲んだ。

「あなたも、あまり無理はしないでくださいよ」

「ああ。ところで、あいつはもう寝たのかな？」

「さあ、どうでしょうね」

「ごちそうさまと言って箸をおき、それから小菅は静まり返った店内に戻り、独り作業を続けた。清掃の途中に雑誌の見出しが気になり、つい十分ほど立ち読みをし、見出しと内容のギャップに少しだけうんざりとした。しばらくして家内から先に寝るという挨拶があり、軽く返事をした。店内の明かりを消すと、冷蔵システムの唸る音が暗い中に顕著に響く。小菅は居間との境に腰を下ろしたまま店内の闇に取り込まれるようにして肩を下ろしぐったりとした。そうして不意に顔をあげ、「よし」、と気をいれなおすと居間に戻り、

冷蔵庫から瓶ビールを一本。テレビの明かりだけで寝酒をたしなむのだった。なぜ、このときに飲む酒は疲れを忘れさせてくれるのだろう。小菅は少しの幸せを感じながらそう考えた。

テレビには、七十年代の映画だろうか、アメリカの若者たちが騒ぎながら夜の街を車で走らせているシーンが流れていて、日本語テロップにはしきりに、ドラッグやセックスという文字が並んだ。

それをばかばかしく思いながら、ビールの残りをコップに注ぎ一気に飲み干し、ほんの少しの酔い心地を楽しみつつ二階へとあがり、家内の寝顔を少し見たあと、布団へ静かに潜った。掛け布団の柔らかさが酔いの心地よさに似ているような気がした。

眠ってからしばらく、小さなうめき声が夢の中に入り込んできた。そうしてそれは映像をかき消すほどに大きくなり、頭の中を暴れ狂った。そしてすぐに家内が隣で苦しんでいるのだということを理解した。はっと飛び起きると、家内は薄暗い中、胸を押さえるようにして苦しみ、目を強く閉じたまま表情を歪ませていた。

「おい、どうした。おい」

小菅はこんなとき、どうすればいいのかわからなかった。咄嗟に救急車を呼ぼうとし、しかしそれにはなぜか家内の同意が必要な気がして、「き、救急車を呼ぶか？」となんとも情けない口調で聞いてしまったのだけれど、苦しみながらも「大丈夫よ」という返事に小菅はもう動くことができなくなった。だけでも、やがて家内は落ち着きを取り戻し、「ごめんなさいね」と一言いい、水を飲みにおりていったのでほんの少し胸をなでおろすこともできた。小菅は自分の鼓動が速くなっていることに気づき、妙な不安に包まれる感覚を感じ、娘を起こさないように静かに階段をおり、「なあ、なにか悪い病気じゃないのか？ 心臓病じゃないのか？ 朝になったら病院に行ったほうがいい」と心配すると、コップをおいたあと「仕事を、ほら、やらなくちゃいけないでしょう」と無理に笑顔を見せて気丈に振る舞って見せるものだからつい、「なにをいつてるんだ

！　こんなこと初めてじゃないか。体のほうが大切に決まってるだろう！」と叫んでしまったのだ。今の声できつと娘は目を覚ましたと思う。

「いいか、絶対だ。絶対に病院にいくんだ。どんなことをしてでもお前を働かせないからな」

「わかりました。病院にはいくわ。お弁当は……そうねえ、香奈子に作らせようかしら」

「ああ、そうするといい。嫌とはいわないだろう」

家内を布団まで見守り、静かに眠るのを見届けると小菅はまた居間へ戻った。また苦しみはしないかという不安があつて、そのときはもう救急車を呼ぼうと決めた。

なにがあつてもあわてず、冷静にならなきゃいけない、と何度も自分にいい聴かせる。

ふと時計を見ると時刻は四時すぎで、もうすぐ業者が搬入にやってくるな、と考えた。たまには挨拶でもしようと思い、娘の鏡で顔と髪の状態を確認し、頭を手で数度といた。

家内の体の不安に苛まれながらも、病院にいくのだからきつと大丈夫だと考え、小菅は気を紛らわすなにかを探すことに勤めた。煙草に火をつけ新聞配達のバイクの音がしないか耳を傾ける。家内がもしも――、ということすら考えなくなかった。嘆息し、冷蔵庫を探り冷たいお茶を飲んだ。

テレビをつけると、筋骨隆々の肉体美を、てかるオイルで一層強調したアメリカ人が白い歯をむき出しながら健康器具の説明をしていて、ひどく滑稽に思えた。それは、新発売だと謳っているのにすでに身体ができ上がっていることへの矛盾もあつたからだ。まったくテレビとはいいい加減だ。他のチャンネルにいたっては夜の高速道路を映しているだけなのだから。そこに対して、事故でもおきないかな、と思うのは私だけだろうか、と小菅はふと考えた。なぜそいつた恐ろしいことを望んだのか深く理解はできなかったけれど、なんとなしに、感覚的にはやっぱり刺激を欲しているような

気がしていた。灰を落としそうになりあわてて灰皿へ火種をつぶす。なにも考えずにいると家内への不安がすぐに沸きおこり、そのたびに小菅は頭をかきむしった。

「ねえ、なにがあつたの？」

娘だつた。音もなく現れたそのこと自体が家内への娘の不安を思わせる。

「なにもないさ。ただちょっと疲れたらしくてね、母さんは病院へいくんだ。だから今日は代わりに弁当を作ってくれないか」

「悪い病気なの？」

娘の表情は心を悟られまいとするかのように凜としていたのだけれど、目には不安と悲哀のようなものがゆらゆらと漂っていた。

「わからない、だから病院にいくんだよ。だけどきつと大丈夫さ。あまり心配するな」

「うん……じゃあ今日はお弁当を作ればいいのね」

「とびきりうまいのを頼むよ」

「わかった。今から作るね。早すぎかもしれないけど久しぶりだから余裕をもつて」

なにかを食べたり、居間に腰をおろしたり、そういうことができる気分ではないのだと思えた。

「……そうするといい。母さんを起こさないようにな。それと、ちゃんと昼の分まで多めに作るんだぞ」

うん、と返事をし、振り返りざまにほんの少し憂えた横顔を見せて娘は台所の明かりをつけた。同時に表からトラックのとまる音がし、やがてシャッターの開く音も届いた。小菅はまた煙草に火をつけ、さして表情は作らずに挨拶をした。

「やあご苦労様」

「ああ、おはようございます。今日は早いですね」

運送業で鍛えられたようにも見える頑強な体格からは想像のできない透き通った声と、子供のように無垢な笑顔で彼はいった。

「どうだい景気は？」

顔を合わせたものの、やはり大した話題もなく、ほとんどはこのようなありきたりな質問になるのだろう。

「ええ、小菅さんとこのおかげでずいぶんいいですよ」

「ん、きみはそんなお世辞をいうタイプだったかな」

「嫌だなあ、お世辞じゃないからいえるんですよ」

商品を床に積み重ねながら彼は笑った。

「なるほど。しかしもともと、たいして儲かっていないんだからね」

「あ、そうでした？」

朝から疲れるような元気な笑顔を見せてくれたあと「それじゃあ次がありますんで」と頭をさげて外に出、車を走らせていった。

白んできた町にトラックのテールランプの薄い赤が滲み、あの光もやがて消える、と考えた瞬間、小菅は少しの不安と愁然にとらわれた。

「ちくしょう、悪いほうへ悪いほうへと考えてしまう。結果だ。早く検査をして結果が出ればいいんだ」

青白い雲の合間に取り残された、足の小指のように不恰好な月がほんの一瞬だけ視界に入った。

煙草を缶にこすりつけ、なにげに見た郵便受けにはいつの間にか新聞が入っていて、それをテーブルに放り投げ、弁当作りに勤しむ娘の後ろ姿を見ながらほんの少しの笑みを浮かべ、ほんの少し早めの朝の準備にとりかかった。――結婚して十八年、今までなかった不安を抱えたままの朝の作業は、普段に増して単調で、気づけば目の焦点は定まらず、しかしふとした瞬間にはポジティブに思い直すこともでき、まったくこの感情は無意味で実に空虚だと知った。思えば小菅自身、今朝見た家内の苦しみ以上の大病を患ったことがあった。あの瞬間は、内臓を錆びたスプーンですくわれるような痛み、吐き気、めまい、それにいいしれぬ不安があつて、薄れる意識の中で死の覚悟をするほどだったのだ。気がついたとき、そこは病

院のベッドの上で、いつの間にか手術も終わっていた。隣には父がいて、その隣には母がいた。目を覚ましたあのときの母の表情——それは純粹に息子の無事を喜ぶものだった。今の私にはきつとあの表情は出来ない——、と小菅は思った。なぜなら、家内はきつと手術の必要もないくらい軽い症状に達しないのだから——。しかし、あの安堵の表情を生むに至った母の不安と同じものは、娘のいる今、きつと感じることが出来るのだろう。いや、母の心は父にはわからないのかもしれないのだけれど。

ふと、両親に会いに実家へ帰りたくなつた。田舎を思うとき、心の中にはいつも厳しかった父がいて、その隣にそつと見守る母がいる。しかし現実にはもう、もうろくしている父とそれを嘆く母しかない。父には、感情すらないのではないかと思うこともあつて、人形のように見えたこともあつた。父を見れば自分の老い先を考えて、きつと切なくなるだろう。それなのに帰りたいなんて、自分がなんとなく軟弱に思えた。

そういつた様々な考えも、単調作業の真髓に入り込むとすべて消え、ただロボットのようになる。外を見ると、もう太陽も十分に顔を出していた。さあ、朝だ！ 小菅は、私は商売をしなければいけないのだ、と頬を両手で叩いた。

朝に、ほぼ毎日やってくる娘の友達が当然のように今日も顔を出し、小菅が店番をしていることに虚を衝かれたのか、店内に入るなり足をとめた。不意に小菅はほくそえんでしまい、見ると、少年はなにかいわれるのではないかというような不安があつたのか、どぎまぎしていたけれど、やがて小菅の顔を強い眼差しでちらと確認すると娘が出てくるまで待つてやるといわんばかりに頷き、立ち読みを始めた。小菅は彼に対し、なんとなく苛々とした気分を覚えた。それは、小菅の顔つきを見てちつとも怖くないと改めて思ったはずで、なんとなく娘の父という存在を軽視されたような気がしたからだ。このままでは、今後さらに娘に強烈にアタックするに違いない、と小菅は考え、娘の看守としての威厳を見せておく必要がある、とまずは咳払いを二度して彼の注意をこちらに引こうとした。おまけに小菅自身初めてのことだったのだけれど、店内で煙草をふかすという愚拳にも出てしまったのだ。睨みながらした咳払いを彼は一向に意に介する様子を見せず、そればかりか彼の口元が緩んだようにすら見えた。読んでいる雑誌のせいなのか、小馬鹿にしているのかはわからなかったけれど、あまりのタイミングのよさに、内に着ているだろうTシャツの色まで見透かせそうな、鋭く送り続けている視線をはずすわけにはいかなかった。煙草は早くも半分以上灰に変わっていた。

「おい！」

小菅はとうとう声を放った。しかし、いったいなにをいえばいいのか瞬間に戸惑い、それに娘にあとで怒られはしないかという不安も沸き、驚いた表情で振り返った彼の顔をなんどもまばたきをして見ることでできなかつた。だけれどそれで十分だった。なぜなら、彼は確かに戦慄の表情を浮かべていたからだ。まあ、蛇に睨まれた蛙でないのは確かで、娘ならパンダに睨まれた高校生と冗談を

いうかもしれない。見た目が怖くないというのはあながち間違つてもおらず、しかしなかなか渋い感じはあると思うのだけれどねえ、と小菅は内心あつた。そして、そんな威圧感のない小菅に対し多少の恐怖をいだいたらしい彼は、雑誌を置きそそくさと店をあとにしようとしたものだから、「おいおい待ちなさい。毎日牛乳とパンを買つてくれるんだろう？ 今日はずえなにも買つてくれないんだね？ 立ち読みだけして、きみはお客さんなんだろう？」とほんの少しの皮肉を混ぜていった。すると、彼ははつとして立ち止まり、なにかいいたそうにして体をもじもじさせ、下を見ていた。サッカーでもやっていそうな爽やかさのある彼だったけれど、今は消極的な子供でしかなかった。こんなときどうすべきかを学期末テストを解くかのように脳をフル回転させて考えているのかもしれない、小菅は指を焼くほど短くなつた煙草をくわえ、ふうつと一息すると他の客がくる前に後ろにおいてある灰皿に消した。すると、彼は足早に店内を回り、いつものようにパンと牛乳とをレジカウンターにどんと置いた。

「これで、いいですよね？」

「なにが？」としかいいようがなく、続けて「まるで、買うのを強制したみたいじゃないか」と返した。

「え……あ、違います。これください」

「はいまいど」

「毎日くるのでよろしくお願いします」

彼には、小菅がお義父さんにでもなるような感覚があつたのだろうか。そう思わせるような態度に小菅は少し複雑な気分になる。弁当を長い時間かけて作り、家内を心配して学校へいく気配を見せない娘と店番を変わりたくなるような衝動に駆られた。しかしあまり二人を近づけたくはなく、だから、「もう来なくていいよ」と、彼の去つたあとのドアに言葉をぶつけた。

昼前に家内が病院から戻って来、見ると、とくに表情にはいつもと違ったところはなかった。医者がいうには「精密検査をしなければ、なんともいいかねる。しかしまあ大丈夫でしょう」ということらしい。その一言を聞き、また、検査を予約するために待合の椅子で数時間も費やす必要が病院にはあるのだろう。苦しみ大きな者からの先着順なのだ。家内は後日、正確には一週間後に検査を受けるそう、また苦しみはしないかという不安が込み上げたのだけれど、不思議と医者 of 適当なちよつとした言葉でも気は楽になるものなのだということを改めて知り、心が幾分落ち着いたように思った。

「ねえ、今日学校休んでもいい？ もうすぐテスト前だけど午後の授業だけいっても意味ないし、それにお父さんもお母さんの傍にだれかいたほうが安心でしょ？」と、そつと小菅の元へやってきた。「まあそうだが……。そうだな、外に出て行かないのなら休んでもかまわない。母さんを看るといふのならね」

「もちろんよ、家事もやるわ。じゃあお母さんに寝てるようにいつてくるね。お弁当並べなきゃ」

娘はとたと足音を立て、台所へと戻っていった。我が子ながら立派じゃないか、と小菅は少し嬉しく思った。

できたての弁当を世間の昼休みまえにはなんとか並べ終え、娘は頭にタオルなんてまいて髪をまとめ、せわしなく洗濯や掃除にとりかかっていた。家内が暇をもてあましているのか店内に顔を出し、商品のチェックをするものだから「今日はゆつくり寝ていなさい」と優しさと厳しさを込めていった。居間への去り際に見せた表情にどこことなく影が含まれているように見え、小菅は心臓をだれかに触れられたような気分になった。医者は本当に大丈夫といったのか、触診や採血と、ちよつとした検査ですぐに重病だと見抜いたのではないか、とえもいわれぬ不安がわきおこったけれど、重病ならすでに入院しているだろう、とひとりごち、自分を納得させた。

日が沈んだ頃、毎朝やってくる彼がまた店に顔を出した。娘と学校でも店でも会えなかったということが彼に様々な憶測を生ませているのだろう、ことの詳細を小菅に聞いたそうなそぶりをなんとも見せ、決断できないまま店内をひよこのようにちよろちよると回っている。小菅はなんとなくそんな彼を滑稽に思い、しかし恋に懊悩する様には男として同情した。そうして彼を手招きし、少しの警戒を見せられながらも「明後日は朝から働くから、今日はもう帰つたらどうだ」といつてやった。その言葉を意外に思ったのか、ほんの一瞬だけ目をぱちくりとさせ、「あ、そうなんですか、ありがとうございます」と頭をさげ、笑顔すら見せて去っていった。小菅は少し、頭を片手で抱えてうつむき、敵に塩を送ってどうするんだまつたく、しかしきつと彼には甘い塩だったろうな――。ばかばかしい、甘いだなんて、と複雑な気分だった。感動を忘れたわけではなかったのだけれど、すでに中年時代を何年も生きている小菅には、「甘い」などと全身がムズかゆくなるだけの言葉だった。

一人の女を愛したあとは、ふとした瞬間の自然との調和のある情景にのみ恋をすればいいのさ、と独り目を閉じる。そのちよつとした時間も、外を右折するヘッドライトの強烈な白にかき消された。音のない静かな店内と、すぐに消える、車が道路を走る音。都会の喧騒とは違う世界、この静かな土深くに眠る生命の安らぎのよくな抱擁感、充足――。退屈も多いけれど、いまさらながらにいい場所に越してきたものだ、と思った。そのもの思いもつかの間、一人の客が入ると続くようにして二人、三人と来、すぐに余裕がなくなる。客がくれば、ただいつものように接客し、なにも考えず時の経つのを待てばよく、案外、人は仕事に終われているほうが幸せなのかもしれないと考えた。

仕事を終えシャッターをおろし、おとなしく漂う空気を胸にいられた。居間に娘がいて、「お疲れさま」と久しぶりの挨拶があった。「まだ寝ないのか？」

「うん、ちよつと眠れなくて」

「母さんなら大丈夫さ」

「わかつてるけど……。いろいろ考えて、手がね、母さんのことを考えると、手が冷たくなるの」

「結果は出てないけれど、大丈夫と医者がいうんだから大丈夫さ。心配しすぎだよ、なんともないんだから」

娘はうつむいたまま両手の指をなでるようにくつつけたり離したりしていた。

「明日は学校があるんだから早く寝なさい。それと、いつもの彼がすごく寂しそうにしてたぞ」

そういうと、ほんの少し娘の表情が緩んだように見えた。それは吐息とともにすぐに消えたのだけれど、娘から不安な気持ちを取り除いてはくれたようだった。お休み、と小さな声で呟き娘が二階へいくと、家内がおりてくるかと少し待ってみたけれど、どうやら静かに眠っているらしかった。なんとなしに横になり、暗くした部屋に映る下手な花火のような明かりをぼんやりと眺めると、やがて小さな喧騒が子守唄のように耳の奥に響き、外の音と内の意識が次第に次第に耳を通して入れ替わっていくような感覚にとらわれた。きつとこのままここで眠るのだろう、と小菅は思った。

目を覚ましたのは不覚にも身体が覚えているいつもの仕事を始める時刻だった。店休日にもかかわらず早く起きてしまったせいで少しもつたいたないような気分になり、しかし、だからといって二度寝する気にはならなかった。カレンダーを見るとあと一週間ほど先の日付に「終業式」とピンク色の文字でつけたされていた。もうすぐ世間は夏休みなのか、と本格的にやってくる夏を思い、毎年家族をどこにも連れて行ってやれないことを、それは不幸になるのかと少し考えたのだけれど、娘も高校生なのだから家族と遊ぶよりも友人と遊んだほうが楽しいのかもしれないな、と考えながら煙草に火をつけて煙をもてあそんだ。ふと、すりガラスに映える群青の色を

見た。太陽はまだ昇り始めたばかりのようで、いつもは仕事をしているか、休みならば寝ているこの時刻、なぜだか外を歩きたくなかった。それはべつに太陽のせいではなく、気分的なものというだけで、やはりそれ以外ではなかった。外でよくよく空を見上げると、彼方に少しだけある、青白く細長い爪の先のような薄い形の空が、朝日を背に受け、黒い皮をはぐようにその爪の白さで徐々に空を覆っていた。小菅はなにも考えず、足の向くほうに従いのんびりと歩く。とくに感慨という感慨はなくて、いつもと同じだった。そうしてしばらくいくと救急車のサイレンとカブのエンジン音があつてすぐに遠くに消えた。川にかかるちよつとした橋のたもとでは、水面に映る太陽の激しい反射に目を奪われ、その瞬間にようやくはつきりと目をさまし、すぐに歩いた距離の分だけ疲労感に襲われた。ああまったくなんで歩いているのだらう、というものが思考の断片にあつただけけれど、深呼吸をして体を伸ばすとまだまだ歩こうという気分が変わり、とりあえずは朝の世界を満喫するために駅前公園へと向かった。通りには早くも、パン屋と洋風の店名がついているお洒落なカフェが開いていて、カフェにはコーヒーの香りに釣られて数人が入っているようだった。四方から確認できるように三面に時計の貼り付けられている時計台は六時前を知らせ、その円形の時計の向こうはもうはつきりと明るく、同じような形の雲がちらほらとあつた。そこからまたしばらく歩いていると、近所に住む木田原さんの旦那が煙草片手に犬の散歩をしているのが見えた。青のジャージ姿で腹が出ているのがよくわかる。彼とは歳の差がずいぶんありそうで、いつか私もあんな腹になってしまうのか、と小菅は思い、じつと見ると、犬の散歩をしているというのに彼の手には袋類がなく、きつと犬のフンの始末はしないのだらう、しかしそれをどうこういうわけではなくて、自分が踏んでしまったら嫌だな、ということだけ考えた。人は見られていると視線に気づくものなのか、彼はこちらを振り向き、顔をほころばせ近づくと、頭をさげて「ライターがないんですかね？」とポケットから出して見せた。きつと、そ

れが彼の考えたきつかけなのだろう。小菅はあれこれいろいろがめんどつくさく、素直に甘え、煙を吐いた。

「景気はどうですか？」などと彼は聞いた。穏やかな休日の朝だというのに！　と小菅は内心あり、ブラッシングされていないせいで抜けた毛がそのまま絡みついている薄汚れた犬を、よしよし、となでながら「犬を飼う余裕はありませんねえ」と答えた。

「ペットがいると心がずいぶん落ち着きますよ」

「それはよく聞きますね、でもまあ、私は家族といえることで満足してますから」

「いいことですね。うちの嫁はいつもふてくされて、私なんか邪魔者扱いですよ」とふつくらとした顔で笑顔を作り、頭をかいた。

「だったら犬はともかわいいんじゃないですか？」

「こいつだけが理解者ですよ、はは」

「ならトリミングはしてあげたほうがいい、皮膚病になりますよ。テレビで確かそういつてました」

「こいつにですか？　無駄な金ですね。まあブラシくらいは通してやりますよ。ブラシくらいはね」

小菅には、彼がどうもほんとうの愛犬家のようには見えず、今日のすべてが無責任に映り、苛々とした。なにか一言いつてやりたかったのだけれど、こういう無責任と利己主義を併せ持ったタイプの人間はいろいろと根に持つのだろうと考えてやめた。犬が、吐く煙草の煙を吸いたがったので、小菅はゆっくりと立ち上がった。

「それじゃあごきげんよう。たまには寄り合いに顔を出してくださいよ、婦人連中が怖かったりしますけどね。まあ美味しい酒がありますから、男性陣はそちらで盛り上がってますよ」と彼のほうが先に、そして少し気取ったような態度で犬を引っ張っていった。彼の向かう方向からは次第にサラリーマンの姿がちらほらうかがえ、皆表情が一緒のように見える。一人、背が高く鋭い眼光の男がいたけれど、そういうのはきつと刑事なのだろうと勝手に思った。設置されている灰皿の元へ煙草を捨てに行き、それから娘と家内のことを

生涯ほつたらかしたまま歩き続けなくなった。それは暖かさのせいで、陽を受けた血が身体から疲労を取り除いてくれたような感覚もあったからだ。しかしどうにも腹が減ったようで、それに、やはりそろそろ目を覚ますであろう家族を心配させるわけにもいかず、「今は家内の健康がなにより大切なんじゃないのか」と帰り際に店で卵とベーコンだけ買って、起きたら二人に食わせてやろうと考えた。

家に着くと部屋は静かだった。すぐに家内がおりてきて眠そうだったものの、もう体はなんともないのだろうと思える明るさもあり、すべては杞憂だったと考えられるようになった。

「顔を洗ったらそこに座ってテレビでも見てるといいよ。久しぶりにね、今日の朝は作ってあげよう。ベーコンエッグと、トーストは苺ジャムでよかったかな？」

「あら、ありがとう。それでけっこうですよ。でもコーヒーを忘れないでね」

「いいね、とても元気だ。そうやっていまは甘えてのんびりしているといいよ」

小菅はそういつて台所に立ち、さつと料理を始めた。湯気と心地のよい油のはじける音が窓に差し込む光とあいまって、優雅さがあふれた。コーヒーはインスタントだったけれど、皿を置いた背後のテーブルの上だけは一流ホテルのモーニングのような雰囲気があるように小菅には見え、娘にも早く作ってやりたくなった。

「こうやって優しくしてくれるんでしたら、一生病気でいようかしら？」唐突に家内はいった。

「おいおい、冗談はやめないか。いつだってお互い差さえあってるんだから、みんな苦労しているんだからさ」

「わかってますよ、ちよつとね、やっぱり心も疲れてたのかもしれないわね。でももう大丈夫ですよ、この玉子の味だってしっかりわかりますから」

しかし家内は深い嘆息を漏らしたようだった。

「そうか、それはよかったよ。しかし……普通に暮らしていて突

然痛みや恐怖はやってくるんだな。前置きもなしにさ」

暗然とではなく、テレビを見ながら番組の感想でも述べるようにさりりといった。

「そうねえ、これからはちょっとは健康に気を使って健康食品でも摂ろうかしら」

「どこの人でも、なにかあつてからそうやって行動に移すんだろ。うな。べつに悪いことじゃないけどね」

ゆつくりと平らげる家内の顔を見ながら、「さて、少し早いかもしれないけど娘を起こすかな」と腰をあげた。

「怒らない？」

「ドアはあけないさ。もうすぐテストなんだろう？ 早めに頭を回転させておいて、学校の授業内容をぎっしり詰め込んで、絵のほうをしっかりとやれるような環境を作らなきゃね」

階段をのぼると「すぐに下にいくから」と娘は起こされる前に目を覚ましたようだった。すぐに起きあがるような音が聞こえたので、「今日は父さんが朝食を作るから、早くおりておいで」と一言残した。

テレビをつけて朝のニュースを退屈しのぎ程度に見ていると、昨日の夜の心配からとき放たれたらしい表情をした娘が「おはよう」と快活にいった。それでも体調を心配してか家内の顔をじつと見続けているものだから、「どうだ、手は冷たくなるか？ ならないだろう？ もうなんともないんだよ、いつもと変わらない日々の再開さ」といつてやった。家内も「もう大丈夫よ、香奈子が一番心配してくれたのね。ありがとう、おかげで元気になったわよ」と娘の顔を見て笑った。

「しかし、女つてのは正直だな。じつと顔なんて見つめ合つて、照れないのかねえ」

「なによ、お父さんだつて珍しく朝食なんて作つてさ、いいじゃない大切な家族なんだから」

「そうかそうか、そうだな。じゃあその大切な娘のためにベーコ

ンエッグを焼いてやろう。飲みものはコーヒーでいいのか？」

「うん。たまご食べるから今日はパンはいらないよ」

「だめよ、ちゃんと食べなきゃ。朝食は一日のエネルギーなんですからね」と家内がいうと、「じゃあそうする」と今日はやけに素直に従ってみせた。小菅が台所に立つとすぐにテレビのチャンネルは変えられたようで、居間からは明るい音楽も聴こえた。だれに自慢のできるような料理をしているわけでもなく、ほんとうに簡単で火を通すだけのものなのだけれど、それでも、そんな簡単なことであろうとも、普段なにも作らない者が作るということは、それだけで家族の絆を深めるのだと実感した。しかし絆なんてものは、結ばれた者同士を盲目に縛り付ける手錠でもある。強ければ強いほど閉鎖的に排他的になり、観念はずれ、自身と社会とのあいだに歪をもたらせる。その世界は狭く、例えば家族の場合、やがて世間から孤立し、なにかにつけて白眼視されるだろう。それはたんに、人の幸福が嫌いというものであったりもするのだけれど、絆が外に敵を作るということには間違いはない。小菅はそんなことを考えながら、できたベーコンエッグを皿に盛り付け、娘の前に置いた。すぐに口に運び出したのであわててコーヒーを作るハメになった。

「落ちていて食べないと喉に詰まらせるぞ」

「うん、でもお腹空いてたから」

「今日も絵の勉強で遅くなるの？」

「えとね、今日は絵を休もうと思ってるの。テストもあるし、夕食と一緒に食べたいから」

「珍しいのね。じゃあなにが食べたい？ なんでもいってちょうだい」

「あまり無理はしなくていいぞ」

台所でコーヒーをかきまぜながらいう。

「んとね、ハヤシライスとトマトが食べたいな」

「あら簡単なのね、それだけ？」

うん、と返事をし「ただ一緒に食べただけだから」とつけた

した。

べつに今まで家族でいがみ合っているとか会話のない生活とかがあったわけではないのだけれど、娘のちょっとした心変わりというか家族と過ごそうという気持ちを手にとるようにわかり、小菅は少し優しい顔になった気がした。

平穏と少しの幸福感、私の求めていた家族とはこういうものだった、思いやりがあつてみんなが安心できるそういう生活だ、と小菅は二人を抱きしめたい気持ちでいっぱいになった。家族で食事をとることがいかに重要なのかを今また気づかされ、晴れ晴れとした感情が心を満たした。いつしか世の中は利便に酔うようになり、いや、それは人間としての欲求なのかもしれないのだけれど、小菅はふと考え、「弁当を作るのをやめないか？」といつてすぐにそれを撤回した。というのも、小菅の心に一瞬だけ他人の幸せを破壊しているような感覚が生まれたのだけれど、弁当を買うのは大抵、昼休みの社会人で、他人の家庭にまでは入り込んでいないと思いなおし、そしてなにより傲慢に感じた。それぞれにそれぞれの幸せがあるのだから介入する余地なんてものはないように思えた。

「ところで、テストはいつからだ？」

「もうすぐ」と口をもごもごさせながら適当に答えたようだ。

「今の学生は大変だな。父さんの時代なんてのはね、田舎だったせいもあるかもしれないが、中学を卒業したら働く友達が多かったんだ。まあ、父さんは大学へなんとなくいったけれど、ご覧のとおりなんの役にもたつちやいない。経営学を多少習えばよかったのかもしれないが、歴史が好きだから文学部だったしね。商売のことはあとから学んでも遅くなかったね。その点でいえば大学は無意味だったかもしれないな。つまり思うんだよ、進むべき道を決めて、そのために勉強し、それを生かすことができなければまったくの無意味だと。そう思わないか。父さんの学んだ西洋史がいったいなんの役に立っている？ お前の宿題の手伝いか？ 笑っているけれど、私はお前に教えるために歴史を学んだと思えるかい。いいたいこと、

わかるだろう。例えば、人生経験や社会の仕組みを知るという点で得るものは多いとか、卒業論文を書くことによって論理的な思考と会話ができるだとかいう人がいるかもしれない。だけどそれはだれにでも当てはまることじゃないし、学業を生かしている人より無駄な時間だったと思える人のほうが何倍もいるはずだと思う。今は専門学校が様々にあつて道を選べるけれどね」

「でも、ほんとうに大切なことつてあんがい気づかないものじゃないかしら。学んだことなんてずいぶんあとになって、役に立ったな、と思えるものなんじゃないかなつて」

「なるほどね」

小菅は頷く。

「にじみでる教養は自覚のないものほど磨かれているけれど、しかし、大切だったとあとになって気づくということは、その瞬間に大切だと認識できたということ、過去、その当時には大切じゃなかったということだろう？　のちに生かされるまでは土の下で何年も眠っている幼虫みたいなものだよ。自分の足はなにも考えずに土を踏み固めていく。成虫しようがしまいがどちらでもいいんだ、そのときはね。四年で学んだことのほんの少ししか生かせないというのなら、それは無駄なことなんだよ。無駄だったな、とあとになつて気づく」

「ううん」と娘は頭をひねらせた。

「わたしは大学へいつてませんけど、青春とか、大学は遊ぶ場所とかいうでしょう。そのとおりじゃなかったの？」

「青春ねえ……。小さいな、四年の中にある青春とはなんて小さいんだろう。しかし遊んだことは確かだったよ。でも、どこかみんなから一歩引いている自分がいて、心底楽しんだという記憶はないな。なりたいたいものもなかった。なぜ大学にいつているのか不思議だったよ。今でこそ無駄だと思えるけれど、当時はもしかするとそれなりに楽しんでいたのかもしれない。いや、違う。自分を探していたんだと思う。なにがしたいのか、なにをすべきなのか、それを探

していた。もしかすると大学は時間稼ぎのための世間体だったのかもしれない。やがてお前と出会って店を引き継ぐことになったけれど、それも成り行きだったからなあ。未だにやりたいことは見つからないままさ」

「目的もなく大人になるのって辛いことよね」と娘が達観したようにいった。「あたしはなんとしてでも絵で生活していけるようになりたいし、っていうか、なるわ。絶対に。あたしにはそれしかないもの」

「はは、頼もしいかぎりだよ。立派、立派」

「ねえお母さん、そこでお願いなんだけど、もうちょっとだけお小遣い増やしてくれない？」

「あら、唐突になによ。足りないの？ もう十分にあげてるでしょ、アルバイトだってしてるのに」

「それでも足りなくて。これ以上バイトは増やせないし、画材だって安くないし、節約だって目いっぱいしてるし、ケータイだって欲しいけど我慢してるし、だからお願いっ」

両手を顔の前で合わせ、実に女の子らしい仕草と目配せで懇願した。

「まあいいじゃないか、これもさっきの話を聞いて将来のことを考えた上での結果なんだろうよ」

家内の目を見て小さく二度頷いた。

「もう」

そのふくれた顔が少し、娘に似ているように見えた。

「あ、もうこんな時間！」と前言を撤回されないようにするためか、了承を得るとすぐに慌ただしく登校の準備を شدした。

「お母さんありがとうね」

娘が登校し、少し静かになると、ただのんびりしているだけのいつもと同じ休日の過ごし方がなんとなくもったいないような気になり、とくに趣味という趣味もないのだから、たまには家内と出

かけるのもいいかもしれないと言誘ってみると、「わたしはけっこうですよ」とつれない返事があった。出かけるといっても、とくにいくあてもなかったので内心ほっとし、それならのんびりとテレビに耳を傾けながら怠惰に過ごそうと考えた。家内はときたま友人らと食事に出かけたり、映画を観にいたりすることもあって、しかし小菅には友人と呼べる友人はいなかった。いつ友人を失ったのか、高校を出てすぐだと思い出し、記憶に生きている過去のクラスメイトたちや、自分の人生を思うとなんともいえない気分になり、孤独は嫌いではなかったものの、それでも一人くらいはどんなことでも語り合える友人を欲していたようにも思う。しかしこの歳になり、家族を抱え、そこに安閑がある今は、強烈な悩みという悩みもなく、生きがいがだけがあつて、やはりそうなのだから家族に囲まれているということに幸せに思ふべきだ、といった。そもそも友人とはいったいなんなのか、気分転換の道具？ 知識や快楽といった刺激を与えてくれる存在？ それとも助け合いお互いを成長させる仲間か――。私は過去、友人になにを求めた？ 小菅は考え、独り、沈黙の世界へと入っていった。

きつと皆、友人になにかを求めている。希望であつたり安心であつたり。他には金銭的なことがあつたとしても、それは結局精神的なものへとつながる。ある程度得られるものがあれば友人で、なくなればいずれ友人でなくなるような気がして、そうなるとやがて疎遠になっていくのだと思う。私は友人の大切さやかけがえのなさというものに気がついたことがない。いや――、もとより、人と人との関係は、だれしもが希薄なはずだ。友人とは所詮、時間つぶしの道具ではなからうか。なぜなら、私も少し前までは、休日になると前の土地に戻って親しかった電気屋の主人とたあいのない話でもしようか、などと考えていたのだから――。

よく、友人になんでも相談してしまうという話を聞く。家内もその一人だ。しかしカウンセラーでも家族でもないただの人間が、ほんとうに親身になって答えてくれるのか、といえば、あたかも真

剣を装って知った風な口をきき、適当な返事とくだらないアドバイスをするだけの陳腐な三文役者ではないか。そこに責任や経験はなく、そして心の奥底では甘い蜜を期待しているのだ。その点、相談されるのを職業にしているカウンセラーは立派な花形だ。相談に乗ることでおひねりだってもらえるのだから。

小菅はそう考えているものの、それを娘や家内にいうことは絶対になかった。それは世の中には友人の多いタイプの人間と少ないタイプの人間がいて、それぞれにはそれぞれの考えがあるだろうし、なにより、友人がいらないということはなんの自慢にもならなくて、ときにはバカにされたり哀れみの対象になってしまったりもする少し悲しい存在でもあるように思ったからだ。しかしそのことに関して本気で悩んだこともなく、流されるがままだった。

家族のある今、ここに安息のある今、小菅に友人は必要なく、これが小さな一人の男のあるべき姿なのだ、と理解した。主義や理想などという大層なものはないのだ。今ある小さな幸せに満ちた生活という現実をただ続けるのみだった。平凡こそが最大の幸福なのだ、そう考えたあと、店をのぞき、簡単な整理をした。外では今夏、ようやく蝉が鳴き始め、次第に呼応されるかのように騒がしさは増した。年々、鳴く時期が遅くなっているような気がして、自然がこの街からもなくなっていくのだろう、と考えたのだけれど、安易な発想だな、と自嘲した。

家内はどうやら部屋に掃除機をかけはじめたようで、少しの憂いはあったものの、とても力をいれて掃除機を唸らせているようだったので、一度だけ微笑し、気分転換のためにした作業を終わらせ、煙草を続けて二本吸った。漂う煙の穏やかさが今の小菅に安心とともに沁みこんで来、この紫色の煙がなぜ壁や天井を黄ばませるのかと思ってしまうほどだった。

昼前に郵便配達バイクが来て、ポストに何通か届けてくれた。見ると、保険の案内や娘あての葉書、それに、母からの手紙もあった。一週間に一度のペースでこうして送られてくるのだけれど、電

話でなく手紙ということで、不幸の報せではないのだからいつも安心して読むことができた。内容は日記を他人向けに書き変えたような簡単なもので、無事ということと、父の耄碌の度合いのみが書かれ、最後に挨拶と返事はいらないうつものようにあった。だから小菅は今まで返事を出したこともなく、ただ綴られている内容に納得だけをしていた。なにもしたためずとも盆と正月には帰省するのだから、それで十分だと考えていた。それに、実家の近くには世話好きの医者が住んでいて、安心だとしていたのだから。この歳になり、子を持つ親の気持ちは十分に理解したのだけれど、老後を二人静に暮らす者の気持ちはやはりわからなかった。ただ、衰えたな、という感想だけがいつも、冷静に送られた視線の先に映ってあるだけだった。それはもちろん、子としては見たくない親の姿で、最初にそれを感じたときは、人の生きる意味、老いて尚生きる意味というものを考えさせられた。小菅は若かった頃に、自分はきつと歳をとる前に自殺するのだらう、となんとなしに考えていた。それは、老いに対する不安や恐怖からきたものではなく、単純に愚かだったというだけのことで、しかし今はそんな気持ちは微塵もなく、代わりに、ほんの少しの恐怖と不安がたまに押し寄せてくるのだった。それは決まって母から手紙が送られてきたときだ。

小菅は恐怖を克服する術を知っている。何十年も先のことに對しては考えずにいれば済むことで、それ以外に、身を包み震え上がらせる恐怖を克服するためには、その恐怖の先を知ることだということだと考えている。人は恐怖を拒絶するからいけない。好感を持つて接するべきだ。その後にとこへいざなわれるのかと期待するべきだ。しかし、先をしなければいいといっても、先のない完全な終末である死の恐怖というものからは逃れられないのだらうとは考えていた。死の恐怖の克服は、もしかすると受け入れることや諦めることでも可能なかもしれないけれど、やはりそれは克服ではなく、一種、仏教的な諦観かもしれない。そうやっていろいろと考えている最中は人の動きがやたらと気になり、あくせく動く家内にほんの少

しだけ苛々とした。もちろん、体調のことは心配で、だからとやかくいうことはしなかったのだけれど、小菅は独りになりたい気持ちに駆られていた。独りになるといろいろと考えすぎ、だれといえるよりも精神的に疲労するということはよくわかつていることで、ゆえに人は友でなくとも人を求めるのだろうということもわかる。だから私は家族を得たのだ。すると、独りになるということに幾許の不安を覚え、目に映るものすべてが少し歪んで見えた。まったく自分の心は複雑で曖昧だ。自分にすらわからないのだから、自己というものはおそらく、もろい船に乗せられ、最下流まで周りの景色を嫌でも見せられ続けていくだけのものなのだろう。ただ、左を見るか右を見るか、もしくは空を見るかという小さな選択ができるだけだ。見えるのは醜いものばかり。目をえぐればどれだけ幸せか。流す血はきつとだれもが黒に違いない。私はただ、小さな幸せと正しさの中で生きていたい、とそう願った。家族を守り、偽善や深い欲望、社会に惑わされず、ただ一つの笑顔と精神的な余裕、静かな世界を求めよう。一度きりの人生で人は大いに間違いを犯す。それは、自己の利益のために自分の心を欺くことであつたり人を虐げることであつたり――。

すべてが共存できない今、神なんてものはどこにもおらず、悲鳴こそが人の終着点だ。神という幻はもはやどこにも必要はない。だけれど、小菅は、最後まで家族を愛し、清廉に生きてみせよう、と深く深く考えた。しかし、まさかあれほど自分自身が穢れてしまおうとは、このとき、微塵も思つてはいなかった。

小菅自身、ずいぶんと時間が経ったような感覚があつただのだけれど、時計を見ると一日はまだまだ長いのだと気づかされた。テレビの中の人たちが真剣な面持ちでなにやら語っていて、注意をそちらに向けると、すぐに笑いが起こった。真面目な表情をしたり微笑んだり、とても忙しそうで、顔が痛くならないのか？ と不思議に思つたくらいだ。調子の良さそうな出演者たちに嫌気がさし、テレ

ビを消す。二階から掃除機の音が聞こえた。掃除が終われば昼食になる。いつもの休日だ。届く音は一定。すぐに忘れてしまいそうな抑揚のない音。なにを吸い込んでいるのかもわからない。まるで一箇所にとどまっているかのようだ。なぜなのだろう。いつから？ずつとだ。もうずつと同じではないか――。刹那、小菅の脳裏に不安がよぎった。まさか――。ずつと、同じだった！次第に鼓動が早くなる。呼吸が重くなる。はっと立ち上がり小菅は階段を駆けのぼった。

「麻子！」

そこには、畳の上に倒れている家内の姿があつた。狼狽し、体を揺する。

「おい、しっかりしろ」

呼吸はしておらず、意識もないようで、触ると、鼓動も脈も感じられなかった。すぐに救急車を呼ぶ。オペレーターに聞かれたことをゆつくりと落ち着いて考えながら返事をし、会話の途中に、掃除機の電源を切らなきゃうるさいままだな、ということ考えた。

電話を切り、掃除機の電源も切る。横たわる家内のそばに跪きながら、いつから心臓が止まっていたのだろう、確か、五分が心配蘇生の成否の境目だったように思う、といったことや、そうなのだとしたらもう駄目かもしれない、ということを考え、色を失っていくようにも見える顔にそつと手を伸ばした。そのとき、ふと恐怖した。もう、死んでいるんじゃないのか、心臓が止まっているのだから。これは死体じゃないのか？小菅は胸から込み上げるなにかを感じ取り、叫びたい衝動に駆られ、しかしそうなると気が狂うに違いない、とどこか冷静に判断もした。その冷静さはすぐに自失へと変わり、なにも考えることができなくなった。

サイレンが聞こえて、救命士の問いかけや、運ばれる家内、除細動機で電気ショックを与えられる姿、エコーのかかる声、視界のほとんどがぼんやりと歪んでいて、はつきりとしていたのは近所の住人らの、木に貼り付けられたかのような薄皮の表情。

小菅はなんとなく問いかけられ、そのたびに「はい」と薄弱なまま答えた。

ぐるぐると回る赤いランプの反射光が見える。サイレンが他の車を停止させる。まるで一つの権力者のようだ。救命士のヘルメットがなぜだか気になった。車内でよく頭をぶつけるのだろうか、それならもちろん必要だ。人を助けるのに自分が頭を打って大怪我をしては意味がない。でも家内はもう助からないだろう。それくらいのこと、彼らの必死な表情を見ていればわかる。

「先日ね、家内は病院にいったんですよ。詳しく聞かなかった私も悪いですがね、なんともないと医者はそのういったそうです。家内がどんな病気で今この状態になったのか、素人の私にはわかりませんが、採血や症状を聞いて少しでも判断できないものなんですかね？ 土偶に話したわけじゃないんです、医者にですよ！ もっとも家内が症状のすべてをきちんと言ったのかどうかなんてわかりませんよ。でも、そんなことを疑うよりも、やはり疑われるべきは医者のほうでしょう！ 心臓病で急死だとしても、薬だってあるじゃないですか。最初に医者がそれを処方してくれていたらきっとこんなことにはならなかったはずじゃないですか？ ねえ、そう思いませんか！」そこまで言って、ふつふつと込み上げるものを感じ、自分はこのあと、これ以上に叫ぶのだろうと思いき口をとめた。

「この状況ではなんともいえません。まだ助かる可能性はあります。どうか落ち着いてください」

三十半ばに見える、清潔な隊員が、目に力をいれて小菅を一瞬だけ見つめた。小菅は手を握ったり開いたりし、いい加減でなんの保証もない気休めがいったいなんになるのだろうと考えた。

病院に着くと家内を乗せたストレッチャーが慌しく搬入され、小菅は係りの案内に従った。ベンチに座り、塞ぎこむと、家内を診た医者のことがすぐに頭に浮かぶ。どんなやつだろう、藪医者と怒鳴りつけたい気分にもなったけれど、それは、なにもせずなにもできなかつた自分に対してのいい訳でもあり、だれかのせいにするこ

とで自分を正当化したいという心理なのかもしれないと考え、そんな自分が嫌になった。

辺りを見回すと、昼だからだろうか、少し遠くの通路には人通りも多く、院内は雑然としていることに気づいた。子供が母親の足元に不安の面持ちを浮かべながらしがみついている、かわいらしく思える。とりあえず学校に電話をし、娘に病院にくるように伝えてもらった。

数分後、医者が近づいてき、旦那だということを確認すると、「残念ですが、亡くなりました」と伝えられた。数秒の沈黙のあとに、そうですか、と答え、窓から差し込み床に落ちる陽の明かりをじっと見る。床の細いいくつもの傷が笑っているように見えた。

「じきに警察の方がきていろいろと聞かれると思います。すぐに検案書が書かれるでしょう。それでは私は失礼します」

去る白い背中を見ながら小菅は、いったい医者はなにをしたのだろう、とうの昔に心臓が止まって死んでいたのにいまさら亡くなりましたなどと、亡くなっていましたじゃないのか、運ばれてからの数分は、最善を尽くしましたといえるようにするためのたんなる間でしかないのだろう、と薄笑いを浮かべた。しかしそういった医者に対する疑問も、家内の白くなった顔を見るとすぐに悲しみに支配されたのだった。

やがてやってきた刑事にくどくどと訊かれ、妙に構えてしまった。

これから、親戚筋にも電報や電話で報告をしなければならなし、葬儀屋とも話をしてあれやこれやと忙しくなることを考えると、それだけで気が重くなる。世間がしているようにあわせると、正月や盆でも会わない親戚がやってくるのだから悲しみより気苦労のほうが絶対に多くなるのだろう、と少々うんざりした気分になり、身内だけでなんとかひっそりとやれるように話をつけようと考えた。

死因は狭心症ということだった。霊安室は重苦しい冷たい

空気が漂っていて、いかにも死人にふさわしかった。コンクリートの床もなぜか物悲しさをさそう。なんと布をとって家内の顔を見ても同じで、ようやくこの先の生活のことを考える余裕も少してきた。突然な死ではあったけれど、もしかすると最初に苦しんだときにある程度の覚悟はできていたのかもしれない。そうでなければこれほど落ち着いていられないのではないか、いや、これから娘と二人で生きなければならないと考えると、恨めしくさえ思ってしまうこともあり、近くにいた人ほど、亡くなったときに悲嘆、憎悪、絶望と様々な感情が呼び起こされるのだと気づいた。友人の死なら悲しみだけで済むのだから。

じつと、蠟燭の小さな炎を見ていると消えそうなほど大きく揺れた。娘が扉を開けたのだった。顔を見ると今にも泣きそうで、だから小菅はなにもいわずに霊安室を出た。泣き声が聞こえない喧騒を求め、人が多く行き来する入り口の外で煙草に火をつける。娘を見たせいか、手が少し震えていた。ぐっと目を閉じ、力をいれ、内からすべてを包み隠してくれといわんばかりに、深く、深く肺を煙で満たした。そしてなんどもなんども大きく息をいれた。灰色の煙のスクリーンに、せめて心の中にだけでも家内の生きている姿が映らないかと――。

陽が落ちる頃までに通夜と葬儀は義妹らと話をつけ、小数の身内だけでひっそり行う密葬にすることで落ち着いた。知らぬ親戚や近所の住人らがこないということはとても気が楽でいい。

斎場についてからも娘は目の下を腫らし、ただうつむいてときおり鼻をすすっていた。小菅はどう声をかければいいのかもわからず、変に慰めても余計に悲しませるだけだろうと思い、ただそっと一人にしておいてやったほうがいいのかもしい、と言葉を一つも与えずにいた。

せめて、あのとき、家内の生きているあのときに別れの言葉でもいえていたのならば、と考えたけれど、それはただたんに自身を

納得させるための、いわばあとづけの呪文のようなものだと思い、例えば、あのとときにああしてやればよかったという言葉と持つ効力は同じで、死者にとつてはどうでもいいことじゃないか、と思いなおした。

天国にいった、幸せそうな顔、未来があつたはず、まだ生きてかつただろう――。義妹らが涙に咽びながら口々にいった。いったい、死者でない者になにがわかるのか、そんな言葉は氣隨に満ちて無責任で、空言もいいところだ。なにも話さずじつとしている娘の方がよっぽど理解しているではないか、と小菅は内心いきり立った。「死ぬにも順番があるだろうに……。あたしが先じゃないか」と家内の母がぼつりと漏らした。

「そんなことをいつてはいけないよ」義兄がすかさず入る。そうやってお互い慰めあっているようだった。だけれど、だれも小菅には挨拶以外の言葉をあまりかけなかった。それは小菅から痛哭するようななにかを感じることができなかったからかもしれない、自身でも気づいてはいた。どうやら心を見せまいとすればするほど、冷淡で冷血だと思われるようで、しかしそれならそれでなんらかまわず、もともとひっそりと内心で家内を送るつもりだった。死者を送るのに必要なのは言葉ではなく心だと考えていたのだから。「さよなら」すらも必要じゃない。それに、死ねばそれで終わりと考えていて、しかし、なぜだか、今の心はそれに納得してくれない。胸になにかが詰まるような、やりきれない、なんともいえない感覚が絶えず小菅を包み、少しでも油断をすると目が潤むのだった。

「お父さんの背中、丸く見える……」

娘がようやく話した言葉がそれだった。娘に心のすべてを見透かされたような気がして、身体が震え、途端に涙があふれそうになった。女は余計な一言でいつも男を確かめる。だから、きつと疲れたんだと思う、と誤魔化すしかなかった。それに絶対に人前では泣きたくなかった。娘が話しかけて、ようやくほんとうに家内が死んだのだと理解できたのかもしれない、今まで現実から逃げていたとい

われればそうかもしれなかった。

しばらくして両親がやってきた。二人とも神妙で、しかし父に關しては老いをさらに感じさせられ、焼きりんごのような赤黒い、皺だらけの顔に、八十三という年齢の深さを思った。

母が親戚らと挨拶を交わしたあと、「ああ、なんという不幸なことでしょう」と小菅に嘆くように近寄った。溜息をつき、静かに頷く。疲れたろう、とだけいい座布団を渡し、娘が顔をくしゃくしゃにしながらもお茶を勧め、そのあとに小菅が道程を軽く聞いて二人を落ち着かせた。なにも、わあわあと次から次へやってくる親族たちの（といつても数人だけけど）、悲しみの連鎖の大合唱を聴きたいわけではなく、ただしめやかにその場に黙座し手を合わせていればそれでいいと考えたわけで、しかし実際はそういうわけにもいかず、破裂した水道管から水が噴きだすかのように慟哭する者が少なからずいて――、いや、その一人の存在が意外と他者の正氣を保たせていることをこの部屋で悟った。義妹の心は一向に落ち着く様子を見せず、静かになってきたかと思えば、ふとしたきっかけでまた頭を振り乱して大きく泣き出すのだった。それが長い時間続いて、むしろ義妹が不憫に思え、いったいこの集まりがなんの儀式なのかもわからなくなってしまう一瞬がある。そういったちよつとした心の変化はきつと葬儀には必要なのだろう。そうでなくては人間を疑ってしまう。悲しみだけに暮れるなんて、そんな不器用なことができるのは、殺人を偽装する芝居をうつ者だけだろう。義妹は最初、私に対しなげこんなことになったのかと問いただし、処置が遅れたのではないかと責め立ててもいた。当然といえば当然かもしれない、自身さえ医者を疑ったのだから、気の済むまでいわせてやればいいのだとそのときは静かに聞いていた。

「突然の報せで、なにを話せばいいのかもわからず失礼しました。私も母も少し落ち着きましてね、妹は未だあのとおりですが、どうです、外で少しばかり話しませんか？」と義兄の邦広さんがいった。軽く頷き、斎場の広場に出る。辺りは暗く、思わず時計を見ると八

時をさしていた。なにを話すのかと考えながら煙草をくわえ、疲労感と一緒に煙を吐き出すつもりで煙をまいた。彼は一分ほど頭を抱えたり頬をなでたり、しきりに手を動かしながらふと顔をあげてはまた視線をさげて、因循な態度のまま、突如「まあ、その……」と呟いたのだけれど、それに言葉が続かないようでもとてじれつたと思えた。こんなときにいったいなにをいうことがあるのだろうか、と小菅は疎ましささえ感じだし、火種の燃え具合をしきりに確かめてばかりいた。なにもありやしないんだ、それなのに紳士を気取って外に誘い出して、まったく浅薄で滑稽じゃないか。

「まあこんなときにあれなんですが、遺書ですね。あいつは書いていましたか？ ほら、あとあと問題になる前になる程度は事前に話しておかないともつれることになるかもしれないから」

ああなるほど、要するに金のことか、と気づき嘲笑した。

「そんなもの、書いてませんよ、だから心配は無用ですとも。保険はすべて『こちら』ですから。そんなことを聞きたかったんですか？ 大した資産もないこの家族を見ても？ あわよくば数万でも欲しかったとそういうことですよ。下賤ですね、家内と同じ家で育ったというのが不思議ですよ」

こういう人間がもっとも蔑むべき人種だと小菅は考えていて、それなりの返答をした。

「確かに聴こえは悪かったですね。その言い分はもっともです。しかしちよつとした金でももつれるものなんですよ、現に経験しました。だから輕蔑されようとも確認は怠らないようにしてるんですよ。だれかがいわなきやいけない。まあ遺書がないなら問題もないんですがね」

「そうですね、なんら問題はありませんよ。話はそれだけですか？」

「ええそうです」

小菅は苛々としたまま、踵を返した義兄を訝しげに見続けた。彼の悲しみは芝居だったのだろうか、それはきつと違うだろう。

実の妹なのだから。そしてふと彼の婦人の姿が頭に浮かんだ。よく顔を見てはいなかったけれど、鋭く細長かった目に狡猾さがあるように感じられた。彼が婦人に籠絡されていると思ってみれば不思議と納得もできそうな気がして、今はそれ以上考えることはやめ、煙草をはじいた。

斎場に戻ると「帰るぞ」と娘を立たせ、「店のことがあるんで――。明日の通夜にはもちろん戻ります。ここは設備が整ってますから寝るのにも苦労はしないでしょう。それではひとまず失敬させてもらいます」といった。

なぜか、皆一様に驚いた表情を見せ、母が「ちよつとなにをいつてるの、あなたの奥さんでしょう!」とためようとしたけれど、「べつに悪いことじゃないだろう、通夜は明日なんだから。あんたは遠いから帰れないが、近い者は帰ろうが帰るまいが自由だろう! それともなにか、打ちひしがれる亭主を演じ続けるとでもいうのか。それが喪主の務めとでもいうのか。そうすることが場にふさわしいと思っているのか。ならば、だれとはいわないが、家内の遺産の話などこんなときに出るのはおかしいと思わないのか! いいか? 私は、私は終始神妙にしていた!」というと場がどつとざわめき、瞬間に非難されるのだろうと感じた。泣き叫ぶのが正しいのか、ここは悲しみの度合いを評価する場所なのか、納得させるために儀式があるんじゃないのか? と小菅は不意に考え、投げられる言葉を意に介すことなく娘の手を引き、追いかけてこようとした母を制して場をあとにした。

「おい、タクシーを呼んでくれ」

高ぶる感情のまま夜勤の係にそういつけ、明かりの少ない通用品近くのベンチに座り「なにか飲むか?」と娘に聞く。

「いらない……」

うつむいたままの娘を見て、なにかさっきのことを不満に思っているのじゃないかと気になった。しかしこうやってついて来てく

れることを考えると、やっぱり我が娘なのだな、と実感できる。話しかける前に一服すると、気分がいくぶん平静になり、聞く覚悟もすぐにできた。

「父さんは冷たいと思うか」

「うん……」

「そうか……そうだな」

この場所には、きっと私と同じ気持ちになった人たちが今まで何百何千と腰をおろしたのだろう。部屋からはかすかな泣き声が聞こえるけれど、ここは仄暗く、芝居小屋から離れてなものにも囚われることなくひっそりと死者を悼むことができるのだから――。

そして小菅は膝に置いた手にある煙草の赤をじっと静かに見ていた。タクシーが到着したとしらせをもらい、「さあ」と娘を立たせ帰路につく。夜がすべてに落ちていた。

状況をわかつているのだろっ、運転手は行き先以外たずねてはこない。窓を流れるのは色とりどりの光の川で、会話は一つもなかった。ふと小菅の顔がガラスに映り、輪郭をとらえる前に目をそらした。運転手に一言いい、窓を開け、風を浴びる。外ばかり見ていた。なにもないのになにかがあるような気がして、そこに、すぐそこに――。

「これが、夜なのか」

「え？」

「――いや、ただの独り言だよ」

「知りたい……お父さんの気持ちを知りたい」

娘は外を見たままだった。小菅はなにもいわず、また視線を外に向けた。風がきつかった。

家に着くと娘は黙ったまま部屋に戻った。小菅はなにも考えないようにするために商品の整理をし、シャッターに張り紙をした。住人らにはすべてが終わってから挨拶するつもりだけれど、きっとこの張り紙と救急車から様々な憶測をして、家内が死んだに違いな

い、と噂をするのだろう。密葬に関して理解してくれるかはわからない、店も続けられるのかわからない。とにかく、すべてが終わって、それからの生活で判断しようと考えた。

ふと、なにも食べていなかったことに気づき、冷蔵庫を開ける。ビールをとり、店にあてをとりについた。なにも食べたい物がなくて、ビールだけを胃に流す。少しの熱さがあつたけれど気分はなにも変わらなかった。

ぼうつとして、しばらく視界への注意はないままで、それから急に思い立ったように階段を駆けのぼった。

「おい」

返事はなく、しかしそれでもよかった。

「いいか、明日は学校へいけ。休む必要はないんだからな」

そういい、すぐに戻る。煙草は吸わず、強く目を瞑った。いつもいるはずの家内はもういないのだと、居間の静寂が少し、教えてくれたような気がした。そこに娘がおりてきて、「なぜ？　なぜそんなことをいうの？」と訊いた。表情はきつく、目には哀しみがあった。

「勘違いしてるかもしれないな、いいかたも悪かったかもしれない。母さんのことがどうでもいいということじゃあないんだよ。通夜は明日なんだからな。葬儀の日には休むのは当然だし、ただ、眠ってしまふ前にいっておきたくて、それに、なによりもお前は学生なんだから——、それを忘れてもらいたくなかっただけなんだよ、テストとか出席とかそういうのは全然関係ない。今すぐわからなくても、学校に行けばきつとわかると思う。父さんもお前と同じようなものだから」

「だからお母さんのそばにいちやいけないうつていうの？」

「そうじゃない。いいか、お前は母さんが死んだからといって絵を描くことをやめるわけじゃないだろう？　なるべく必要以外、死んだ者から離れて自分の先を想うことが大切なんだよ。悲しむのは

少しで十分だ。これからどんな生活が始まるかはわからない。空虚なものは少なからずあるだろうさ――。さっきだ……さっきあいつは死んだんだ！ わかるか？ わかるか……？ さっきなんだ……」

そこまでいい、小菅は言葉を詰まらせた。嗚咽のようなものを感じ、娘に背を向けた。

「人の死の悲しみが、長い人生のたった少しのあいだだけのことだから、せめてその時間だけでも涙を流したいというのなら、明日は休んでもかまわないさ。それも一つのありがただから……」

娘は黙ったままだった。

「好きにすればいい」

静かに、なにもいわず娘は自分の部屋に戻った。なにかを食べさせてやりたいとも思っただけで、私と同じように喉を通らないだろうと考え直し、コーヒを一人で飲んだ。苦味の強さなんてどうでもよかった。

不意に呼び鈴がなって、時計を見ると十一時を回っていた。

だれだこんな時間に、と訝る。のぞき穴から見ると、古田さんの旦那だった。表の張り紙を見て、いらぬ世話を焼くことを婦人にいつけられたのかもしれない。

「なんでしょう？」

「ああ、どうも夜分にすみません。うちの家内がどうしてもというもので」とオウムのように首を動かし、頭をかいた。

なにもいわずにいると、どうやらこちらから話を切り出すのを待っているようで、なんとも苛々とさせられる。あの優秀な子をたくさん持つ家庭の長の出で立ちといえば、乱闘の直後のような乱れた白と黒の髪、夜でもわかる脂ぎった肌、力なく開いたままの口と太く赤黒い唇で、いくら糊のきいたスーツを着ていようと、なぜあれほどの子らができたのか不思議でならない。しかし、それは考えたくないことだったし、そして結局はどうでもいいことだった。

「奥さんがどうかしましたか？ なにをいわれたんです？」

「ええまあ、心配してるんですよ。なんでも、お宅の奥さんが救

急車で運ばれたそうで、それに、表の張り紙を先ほど家内が見つけたましてね。それで、余計なお世話だとは思うんですが、役員として訊いてこいってわけですよ」

「どうやら少し早く張りすぎたようですね。ご心配をおかけしてしまいました。しかし、役員は奥さんでしょうか？」

「そうなんですがね、こういう役はどうもいつからか自分がやらされるようになりまして、それで差し支えなければ容態といえますか、状況をお聞かせいただければと、まあそういうことなんですよ」

「そうですか……」

小菅はどう答えるべきか迷った。人が不幸の真っ只中にいるときに、それはもちろん彼らが知らないからだとしても、こちらからいずれ挨拶をするのに、こうやって遠慮しながらでも入り込んでくるのが気に食わなかった。それも夜半に。だから、せめてこの間抜けそうな顔が驚きに変わるのを見てやろうと思ったのだ。

「家内はね、亡くなりましたよ」

「えっ！」

瞬間に目を開き、そして小さく、嘘だろう、あなたも人が悪いというような笑いを浮かべ、小菅を凝視した。どうやら、死んだとまでは思っていないかったらしい。小菅もじつと見返していると、途端にもじもじとし、「あ、そ、それはどうもお悔やみ申し上げます」とあわてて取り繕った。なんとなく汚らしい動物に見えた。帰ったそんな素振りを見せた彼に「葬儀は密葬にしますんで、このことは内密にお願いします。後日、近所の方々にはご挨拶しますので。いいですね？」と念を押す。

「え、ええ。家内にもよくいっておきます」と額ににじんだ汗をぬぐいながら去っていった。小菅は少し楽しい気分になり、あと一人くらい来てくれないかな、とさえ考えた。居間に戻るとすぐにその考えは消えて、また静寂と鬱々とした思いに包まれたのだった。

次の日の朝、店には商品が配達されていて、やはり張り紙だけ

で通じることではないのだろうと考えただけけれど、売り上げのデータがあちらのコンピューターに届かなければ、それなりに配達される品物も減るだろうと思い、そのままにしておくことに決めた。

娘が学校を休むといったので、「父さんはやることがあるから家にひとりになるぞ」というとしばらく考えた様子を見せ、「それじゃあ学校に行くことにする」と不服そうな顔を向けた。斎場へくするための費用を渡し、見送る。

外に出ると空がすべてを青で包まんばかりの眩さを放っていて、太陽にあたると少しばかりの暑さを感じ、目を細めずにはいられなかった。

小菅には目的があつた。それは、家内に対して「大丈夫でしょう」といった医者に話を訊きにいくことで、詰問する気は、今はもうさらさらなく、ただ確認と納得がしたかつたのと、あとは、もし病院側のミスだったとしたのなら、同じことをくり返してはもらいたくないという願いがあつただけで、しかしそれも医者の態度次第だとは思つた。

歩いて病院に着くまでに一服済ませ、自動ドアをくぐる。ここ
の規模は、家内が搬送された病院と比べるとかなり小さいものの、
しかし、内科、外科はもちろん、それ以外にも充実していて、決して信用を疑うような病院ではないことは確かだった。

「あの、以前に家内を診ていただいた先生に会わせてもらえませ
か?」といい家内の診察券と保険証を渡す。

「どうされましたか?」

「まあその、家内が亡くなりましたね、それで先生にお話を聞か
せてもらいたいわけですよ。診ていただいて、翌日のできごとです
から」

「そうですね、少々お待ちください」

受付の中年女性はこういうことに慣れているのか、顔色一つ帰
ることなくカルテらしきものを探し、それから受話器をとってなに
やら話をしていた。

「少しのあいだでしたらかまわないことです。どうぞおかけになってお待ちください」

その言葉に少し違和感があったものの、腰をおろし、院内を見回した。老人が多く、彼らの表情は笑顔意外どれも同じように見え、いつもなにかに困っている風にすら思えた。

しばらくすると名前を呼ばれ、四診と書かれた部屋に通された。髪を油で頭皮に貼り付けるほどぴっちり横に流していて、その黒い舗装されたばかりの道路のような重さの髪と細く短い首とに挟まれて気難しそうな顔があった。

「どうも、お忙しいところすみません」

そう申し訳程度にいったのだけれど、実際は、こういった話をするのも医者義務だろうと考えていた。

「かまいませんよ、あまり時間はとれませんが。それで、診察後すぐにお亡くなりになられたそうで、死因はなんでしたか？」

「ええ、狭心症です。これはどうなのでしょう、診察ですぐにはわからないものですか？」

医師は、なるほど、という顔をして見せたあとすぐに唇を親指でなで、「わかりませんね」といった。

「でも、症状を訴えていたでしょう？ それでなぜ判断できないのです」

「狭心症は採血ではわかりません。心筋梗塞やまあ俗にいう心不全ですね、それらを疑ってみましたが、もうしばらく様子を見るつもりだったんですよ。まさかそれほどすぐに亡くなれるとは、残念ですが、もしなんらかの処置をしていたとしても助かる可能性は低かったでしょう。いや、もう寿命といってもいいかもしれません」

「そこまでいいきれもののですか？ 確信をもって」

「ええ、私は医者ですから。二十年間、十分に経験を つんでいるつもりです。抜かりはありませんでしたよ。それに、心筋梗塞ならあなたにもよくわかると思いますが、路上で発作に見舞われ、倒れたとしても、救急車を呼んだところでまず助かりはしませんよ。舌

下錠もありますが、診断を下されないことには……ね。まあ心停止でも偶然に高度な救命技術を持っている人が現れたのなら別ですがね。わかりますか？ 心臓の病で倒れたのなら諦めたほうがいいんです。だれも悪くないですし、だれもなにも責めやしませんよ。もちろん、医師に対しても同じです、ナンセンスですよ、まったくね」

小菅には、この医者が胡乱に思え、医療に対しての無知を悔やんだけれど、なんとなく慰め、諭されているような気もし、心がなぜか平穏になるのを感じた。きっと、私は納得したのだ、これでいいのだろう、これ以上なにもする必要はないのだ、真実こそが正義とは限らないのかもしれない、と決心し、医師の顔は見ずに「ありがとうございました」とだけ残してドアを出ようとすると医者が制した。

「あ、ちょっと待ってください。まあ念を押すわけじゃないですが、どこの医者も同じことをいうと思いますよ。もしかすると、一般論となればなるほど答えるのを面倒だと思うかもしれませんがね。いや、なに、私が嘘をいつているというわけじゃなくてですね、ただ無駄なことをする必要はない、徒労に終わるだけだろうと、まあ、忠告という用語弊があるかもしれませんが、親しみです。そう、親しみですよ。こうやってわざわざ来てくれたことに対するね。それに、今後は他にそういった人を出さないようにさらに力をいれて診させてもらいますよ。誠心誠意ね。あなたの気持ちは痛いほどわかりますから。多いんですよ、亡くなったことに対する自分の無力感をどこにぶつければいいのかわからず、医者に当り散らす人がね。まあ、あなたはとても理解のある人ですよ。どうかお気を落とさずに」

「べつにもう調べる気はありませんよ、ごたごたは勘弁ですから」「そうでしょう、そうでしょう。だれも悪くない、それが真実です」

懸念が取り除かれたのか、とても晴れた表情で小菅を見送った。小菅は、そもそも病院にいく必要があつたのだろうか、と考えるほ

どここのすべてを理解していた。その理解が、不思議と家内の死ぬ以前からあったようにさえ思えた。

家には戻らず、このまま駅前でタクシーを拾おうと思い歩いた。太陽がそろそろ青の頂点に達しそうで、汗をかくほど暑くなってきた。途中、通りにあつた冷房のきいた年季の入ってそうな洋食屋でポタージュスープを飲み、マグロのサラダを食べ、パンをかじった。いわゆるランチだ。薄いカーテンのかかった窓から外が見え、光は白い。ゆらめく黒い地面の上を歩く人は皆暑そうに顔をゆがめていた。食事を終え、アイスコーヒーを飲み煙草をくゆらせるふと、知っている顔が外を通り過ぎたように思えたけれど、だからといっていちいち確認する気はおきなかった。

勘定を済ませ、この店はいつかまた来よう、くつろげるいい店を見つけた、と小菅は店を出て看板の名前を覚えた。

緑があふれる公園の通りは、砂を踏む音が聞こえるほど静かで人々と植物の明るさに満ちていた。それは暑ささえ忘れさせてくれる。空を見ると小さな雲は照れたように他の雲の中にゆっくりと隠れた。家内の顔を見なくなり、小菅は黙ってロータリーを目指した。

斎場に着くと、昨日のことであつて、どう顔を出すべきか、と入り口で躊躇した。しかし行かないわけにはいくまい、とリノリウムの廊下を少し行つて、部屋をのぞいた。いたのは両親と義父母で、他にはおらず、四人は静かに別々に用事をしていた。用事なんてものはとくにはいはずだったのだけれど、手持ち無沙汰だったのかもしれない。母がすぐに気づき、「まあ」とわざとらしく驚いて見せた。

義父母にお辞儀をし、それから家内の顔をのぞこうと思つていたのに、なぜか気が失せた。たぶん、母らのせいだろう。

「みんなは？」

母にたずねる。

「食事よ」

「みんなで行かなかったのか」

「あたしはおにぎりです十分ですからね。まだ葬儀も済んでないんだから」

「そうか、そんなものなのか――」

それから小菅は昨日のうちに準備していた喪服に着替え、鏡を見てネクタイを整えた。ふう、と深い嘆息が出る。顔が少し痩せて見えたけれど、喪服のせいにした。

ふと義母を見、話しておいたほうがいいだろうと思い、座布団に座ると、茶を淹れて出してくれた。

「頼子のことですが……」

「思い出ですか？ そうならやめてください。あたしにはあたしらの思い出がありますから」

「……そうですか」

喪服が小菅を少し感傷的にさせたのだろうか。彼女に思い出を語りたかった、自分がどれほど家内を愛していたかを知ってもらいたかった。そうすることでなぜか許してもらえような気がしたのだ。しかし、聞きたくないという義母の言葉に助けられたような気がする。これは必要のないことなのだ。だから彼女も話さない。家内を一番愛していたのはこの人かもしれないのだ！

「余計なことでした」

「いえ、わかってもらえればいいのです」

沈んだままの表情で義母はいった。少ないまばたきは一定だった。

茶を飲み、それから煙草に火をつける。早くこの儀式のすべてが終わることを望んだ。

三時間ほどして娘が到着し、それに合わせるように面子がそろった。言葉はとくにだれとも交わさなかった。外には夜のそばりがようやくおり始めたようで、空気が澄んだようにも思える。やがて家内の唇を皆で濡らし、そのときに義妹と娘はまた泣いたけれど、

それもすぐにおさまった。しばらくして退屈しのぎに表に出ると星がちらちらといくつか輝いていて、明日も晴れなのだろうと少し安堵した。

やがて豪華な僧侶が来、ぶつぶつと呟いた。小菅は聞いたことのある言葉が耳に入るたびに意識がそこに行き、どういった意味なのかしばらく考えさせることがなかかった。娘をちらと見ると、泣いてはいなかったけれど、愁いに沈んだままの顔で、来たときと同じだった。

一通りの流れが終わり、皆で食事をした。口当たりのいいものも多く、箸は進んだ。酒が入ったからか、一部でちよつとした笑いも起こり、子供の頃にいった葬式でもこんな光景があったのを思い出した。

小菅はいつも線香を気にし、消えそうになるとなんども立てた。ようやく落ち着いて話ができるような気がして父に声をかける。

「最近、どうしてる？」

「ん？ ああ、なにもない。朝起きて、飯を食って、それから散歩してまた飯を食う。最後は寝るだけだ」

しわだらけの手を動かして話すその様は、とても耄碌しているとは思えず、母はもしかすると心配させるために嘘の手紙をよこしたのかもしれないと思えた。

「老いたと思ったが、元気なもんじゃないか、昨日にもっと話せればよかったな」

「退屈な毎日のどこにも話題なんてない。それに男は、いつ何時、どんなことが起ころうとも黙ってるもんだ」

「ああ、そういえばそうだったな（沈黙の度がすぎたのだろうか？ だから母や私は耄碌したと思ってしまったのかもしれない）。わかってるよ」

部屋を見回すと、あれほど悲しんでいた義妹ですら頬を赤らめ酒に酔っていた。義兄の嫁はとにかく気取って見えた。母も混じり、その光景はただの談笑だった。こんなものだ、こんなものなのだ、

と小菅は納得し、缶コーヒーを買つと「夜は長い」と娘に一本渡した。

娘と二人で長い夜のあいだじゅう線香を絶やさずにいたけれど、会話という会話はなかった。考え事をしたり煙草を吸ったり、茶を飲んだりしているとやがて夜が白んできた。

「朝焼けを見ないか？」と娘をさそう。

「うん……」

表に出ると、青白い空を数羽の鳥が飛ぶのが見えた。太陽は山に隠れて見えず、少しの赤だけが場所を知らせている。清澄な風が肌をなでた。娘の髪がなびく。

「これから、どうするかな」

空を見ながらだと、絶対に落ち込まない。不思議と前向きになれる。だから娘にも空を見せたかった。返事はなかったけれど、顔には微かに光が戻ったようだった。

午前中に肅然と葬儀を終え、家内の回りに花を飾った。棺が運び出され、火葬場へいく。到着すると、他にも同じような喪服の連中がいて、なんだか気恥ずかしさを感じた。最後に家内の顔を拝みやがて棺が窯にいれられ、これで家内の形もなくなるのだと思った。そう考えると、なぜか不意に涙があふれそうになり、なにも見たくなくなった。

待合で一時間と少し経つと、骨あげとなり、係がしきりにこれこれがどこの骨です、喉仏はこれですという説明をして、ここにいるほとんどは感心して聞いていた。もう、ただの物でしかないのかもしれない。

それから一緒に、少し遅い昼食をとろうということになったのだけれど、小菅は娘を連れて先に帰ることにした。両親もくるようにいつてみたけれど、向こうとの付き合いを重視するようだ。最後に義兄が、「しばらくのあいだは、ちよくちよく線香をあげにお邪

魔させてもらいますよ」といかにも無遠慮にいった。小菅の家からそれほど遠くないところに住んでいるからだろうと思いたい。それでも、「まだ先になりますか、墓でいいのでは？」と返すと、両方ですよ、と視線をはずさなかった。

今まで付き合いがまったくといいほどなかったから、彼のことをわからなかった。しかし今はかなり反発しあう性格のような気がして、それは彼も気づいているだろう。つまり、苛々させたいのかもしれない。嫌々ながらも、そうですか、いつでもどうぞ、と承諾し、一瞥すると小菅は背を向けた。両親の元へいくと、「ねえ、これからどうするんだい？　生活は大丈夫なのかい？」と心配そうに問いかけてきた。

「わからない。でもまあ、なんとかするとは思ってるよ」

「困ったらいつでも連絡するんだよ」

「そうだな、頼りにすることがあるかもしれない」

それから皆に軽く頭をさげ、骨壺を抱えながらタクシーに乗った。睡魔と揺れの心地よさがあつたので到着まで眠ろうとしたけれど、いろいろ疲れたのだろう娘が目を開じていたので、眠ることはやめて外を見続けた。鳥は身を翻し、木々は葉を躍らせている。それもすぐに視界から消え、違うものが飛び込んでくる。景色に意味は見いださず、ただの色として感じるのみだった。

娘を起こし、家の鍵を開ける。仏壇を置くスペースを考えたり、遺品の整理をしたり、心はまだ落ち着きそうにもなかった。沈鬱なままの娘を少し気遣い、上の部屋で休むようにいった。

ひとまず整理を終え、軽く胃に食べものをいれた。そういったなんでもないふとした瞬間に家内を思い出すことがたびたびあった。そんなときは微笑して、自分を勇め、娘を育てるという責務を駆りたてた。それさえあればやっていけるはずなのだから。

翌朝、目元を腫らし、しかし眠たそうな気の抜けた顔を見せた娘を少し笑いながら学校へやったあと、挨拶回りをどうすべきか考えた。どの家を挨拶の境にするかということを見ると、小菅自身あまり付き合ひもなかったものだから、どうでもいいような気さえした。ただ、畑中さんと古田さん、それに寄り合いに誘ってくれた木田原さんには挨拶しておこうと決め、陽もあがった頃にそれぞれを訪ねた。しかし、やはり古田さんがいいふらしたようで、とくに驚いた様子も見せずに「ご愁傷様です」とすまし顔でいった。おまけに、木田原さんの奥さんが寄り合いに是非としつこく誘ってきたので、よくわからないまま次回は出るということを承諾させられてしまったけれど、直前に断ればいいか、と考えた。

家に戻っても店を開けようという気がおきない。それはたんに疲れているからだろうと決め、そういえば店どころじゃない、整理をまだし終えていなかった、と電話をしたり書類を見たりし、様々な手続きをすべて終えた。人が一人死ぬということの意味を、この大変さをもって実感させようとしているのじゃないかとさえ思え、そうならば、うんざりという言葉で片付けたくなるほどだった。

昼前になぜか娘が帰ってきて、「学校はどうしたんだ」とたずねると、「テスト前だから早く終わるの」といった。そういえばそうだったと思い出し、叱ろうとした自分をほんの少し恥じた。以前にいった、「学校へいけ」という言葉の意味が伝わったのか、早くも洗濯をし、無表情ではあったけれど、昼食まで作るといった。

「いや、ありがたいが、外に食へに行かないか？ 安くていい店をついこのあいだ見つけたんだよ。もちろん、勉強はそのあとにするんだぞ」

少し娘の出鼻を挫いたかもしれないけれど、外に出て気を晴らしてやりたいと思ったのだ。娘にどこまで家事をやらせるか、それも考えなければいけないと感じ、しかし絵を疎かにさせるようなことはしたくなく、じっくり話す必要もあり、それにはやはり外での食事が一番だとも思った。

「着替えて準備ができたらいってくれ」

終始、娘の返事はなかったものの、それは声に出して返事をしていいのかどうか迷っているようでもあり、喪に服しているつもりのようにさえ受け取れた。もしくは、悲劇の少女でも演じているのだろう。もちろん、それを問い詰めたり茶化したりする気はさらさなく、快復を待つのみだった。

娘はジーンズにキャミソールというシンプルな出で立ちで現れ、髪は後ろで束ねていた。小菅自身はある程度、服装に気を使っている、「そんな格好やめてよ」などというありがちな台詞は一度もいわれたことがない。かといって、流行りやブランドなど知らず（そもそも一般的な中年に流行など無意味だとは思っただけで）、しかし一応はカジュアルで無難な格好をしていた。

外に出ると、空がのしかかってでもくるような暑さで、すぐに額に汗がにじんだ。煙草を吸うと、汗ばむ肌に煙がこびりつくような気がしてすぐに捨てた。

「あ、だめじゃない」

その娘の言葉に、小菅は、今まできちんと吸殻を始末していたのに、いつの間にか地面に捨てるようになっていたことを気づかされた。

「そうだったな、次からは気をつけるよ」

その行為は精神的な余裕の無さの現れかもしれないと思い、捨てたことを恥じ、踏みつぶした吸殻を拾い、通りで見つけたゴミ箱に捨てた。

店内に入るとすぐに、汗が日光を嫌う虫のようにさっと引き、快適な心地を味わえた。

「ふう」

座るだけでそんな息を漏らすのは歳をとった証拠だろうか。

メニューを見ずに、今日はランチセットを頼み、娘も同じようにした。若いウェイトレスはお辞儀をして、それから店の雰囲気に合わせて振る舞いを演じているようだった。

「なあ、少しは元氣出たか？　ほら、このままだとテストだって危ういんじゃないのか」

「うん……大丈夫。勉強はやってるから」

「この先、バイトはどうする。商売は続けるつもりだが、お前には家事もやってもらうつもりだし、絵だって描きたいだろう、食事についてはまあ、交代で作ろうじゃないか」

一息入れようと水を飲む。

「まだ考えられないわよ、昨日のことなのに――」

「わかってるさ、悲しませるつもりはないんだよ。泣きたければ泣けばいい。だけどね、なんともいうが、生きることが必要なんだから、嫌でも考えなきゃいけないんだ。それが母さんのためにもなるんだから」

そういえば納得してくれると思った。

「無理よ！　父さんはやっぱり母さんのことを愛してなかったんだね……だから平氣な顔をしていられるんだね。あたしはずっと見た。無表情で冷血で、お金のことばかり考えてたんじゃないの？」

「そんなわけないだろう」

「だってそうじゃない、これからのことばかり考えて、お母さんが死んだこと、飼い犬が死んだくらいにしか思っていないでしょ？」

死んで喜んでるんじゃないの？」

娘は今にも泣きそうな顔を見せ、小菅はいわれたことに対して苛々とし、ここがどのような場所であろうともかまわずに頬をぶつた。我慢はできなかった。店内が一瞬静まり返り、こちらに視線が注がれたような気がした。手のひらが熱くなる。握りしめ、息を吐く。娘の顔を見ることはできず、小菅はただグラスだけを見た。

少しの沈黙が続いて、娘はなにもいわずに店を飛び出し、小菅は独り残された。周りの客から好奇の眼差しがちらちらと送られ、気にしないように黙ったまま煙草に火をつけた。ウェイトレスが遠慮がちに食事をテーブルに置く。小菅は心を鬼にしたつもりで未来の生活を考えた、苦勞が待っていても、幸せになれるようやっていかなければと考えた、なのに、娘は悲しみの奴隷のように振舞った。父の顔さえ忘れるほど深く囚われている奴隷のように――。小菅はこのとき、しばらく家に帰らずどこかをふらつきたい気分になった。そして、いったいどれほど考え続けていたのか、気づけばいつの間にか冷たくなっていた食事をほんの少しだけとり、店を出ると、空は小菅に激憤しているかのように赤く広がっていて、瞬間に恐れを感じた。瞬間で十分だった。

「私は帰らないのだ。あいつが理解するまで私は帰らないのだ」
ぶつぶつとこぼしながらおぼつかない足とりで空の重圧から逃れようとした。心が一瞬にして弱ったような気もし、しかしそれより恐怖が熱気とともに入り込んでくるような感覚があり、息をなんどもとめた。揺れる世界を泳いでいると、「小菅さん」と声がした。その声は犬を連れている木田原さんだった。

「あ、ああどうもこんにちは」
なんとなく救われたような気と、冷静になつていく心の鼓動を感じた。

「暑いですねえ。おや、酔っ払ってるんですか？　こんな時間にまあ仕方ありませんよね、不幸があつたわけですから。酒に溺れたくなる気持ちはわかりますと」

「いえ、まあそういうわけじゃないですが」
「隠す必要なんてありませんよ、だれだって酒飲みは同じ気持ちになりますからね。恥ずかしいことじゃありませんて」

それからすぐ、「へっへ」とか「おい」とかいいたながら、暴れた犬を引いた。落ち着かせることもできず、すぐにまた口を開く。
「どうです、寄り合いもまだ先ですから、一緒に飲みませんか？

親近感が沸いちゃいましたよ。今の姿を見てね。今日は竹内さんと一緒にのむ予定がありましたね、いやはや彼はなかなか饒舌ですよ。お知り合いでしたかな？ 彼と飲めばいつも会話が弾みます。ね、たまにはすべてを忘れて飲み明かしましょうや。私くらいの歳になるとね、もうこれだけが楽しみですよ」

あまりにもなれなれしくあつたけれど、その勢いにのまれ、まあいいかもしれない、と約束を交わした。帰る気は正気を取り戻そうともなかったのだから、ちょうどいいとさえ思った。

「それじゃあお邪魔させてもらいます。いつ、どこにいけばいいんですか？」

「そうですね、七時に家に来てくださいよ。そこから一緒にしましょう」

この人は年金生活だったかな、いやまだ早いだろう、と考えながら彼ののんびりと去る姿を見送る。犬の存在は彼には足かせでしかないようにも見えた。

家に帰らないとなると、なにかで時間をつぶさなくてはいけない。小菅はひとまず小さな仏壇屋におもむき、一通り見る。どれも立派で重厚で、光沢の分だけ値が張っているようにも思えた。値札を見て悩んでいると店主が静かに話しかけてきたけれど、今すぐ買う気はまだなかったのですぐに店を出た。

あてもなくと歩いていると、娘が家にいて自分が家に帰らないということが滑稽に思え、決意した自分自身と娘の無理解に多少の苛つきを覚えた。それは暑さのせいもあったかもしれない。

途中で見つけた書店で普段読もしない文庫本をタイトルだけで決めて買い、公園で読もうと考えた。しかし、太陽は真夏日が続く八月の予行演習でもしているかのようにぎらつき、頭を熱気で押さえつける。地面がゆらめいて悶えているようにすら見えた。数分も歩くと避難したくなる。別な喫茶店を見つけ、やれやれと汗をぬぐう。十分ほどくつろいで本を読んだつもりでいると、どうやらここは冷えすぎるということに気づいた。

ハンサムであることに自身をもっているかのような、しかしふて腐れている店員を呼び、「少し冷房を弱めてくれないか」と注文すると、無理っスね、と素っ気なく返された。頭にくるよりも、なぜ無理なのかということが気になり、問う。

「暑いからっスよ」

なるほどもつともだ。しかし、私は寒いから弱めてくれといったのに、見たところ体格も似たようなものののに、長時間店内にいるのはウェイターのほうなのに、なぜ彼は暑いのだろう。小菅にはそれが気になって仕方がなく、客が多くて忙しいわけでもないのだから、きつとひねくれているのだろつと決めつけた。そしてそこでようやく頭に来、「他のお客が暑いといってるのか？　きみが暑いだけじゃないのか？」と訊いた。

「はい、俺が暑いんっスよ。だから弱めません」

「なんだその態度は、客あつての商売じゃないのか」

「そんなことは知らないっスね。それは経営者側の問題じゃないっスか。俺はバイトなんだから、時給をもらっただけっスよ」

そういつて立ち去ろうとするのを小菅は引き止め、続ける。

「きみはどうも仕事というものをわかってないな、店長を呼んで話をつける」

「あ、ああ、ちょっと待ってくださいよ。呼んだって進展しませんね。まあでも、そこまで怒るんだつたら教えてあげますよ。実はこれだつて立派な経営戦略らしいんっスよね。というのね、冷房をつけっぱなしにしてたらどうするかつてことっスよ」

「おいおい、きみのところはそういう汚い商売をしているのか」

「あ、気づいちゃいました？　そうなんっスよ、注文さえとればあとはさつさと追い出したほうが回転だつて速くなるし、お客さんがいなければいいで楽ができるし。長々と婆さん連中のように新しく注文もせずに居座られるのは迷惑なだけなんっスよねー。うるさいし。まあ俺の考えじゃなく、そうやって教えられて、俺も楽しみたいから同意してるんっスけどね。まあお客は今、他にはいません

けど」

「そうか、わかった。それじゃあその店長を呼んでくれ」

「はあ？」

それは、なにもわかっていないじゃないか、と考えているのがひしひしと伝わる表情だ。

「呼ぶんだよ。いいから呼べよ」

ウェイターはあからさまな舌打ちをし、奥へと消えた。小菅はこのような商売に対する意識が、同じ商売人として許せず、一言いいなかった。

「はい、なんででしょう」

眼鏡をかけ、口ひげを蓄えた店主はまさにマスターそのもので、型にはまりすぎているようにも思え、おかしかった。

「ちよつとね、冷房を弱めてもらえませんか？」

「あ、はい。そんなことでしたか」

そういつて見える場所でスイッチをいじっていた。どういうことだろう、冷房が弱められた。したたかなのはあのウェイターだった。まんまとやられた気になり、羞恥と屈辱が同時に押し寄せた。しかしそんな気持ちも店主の心遣いで一気に吹っ飛んだのだった。それは、なんと、「お身体が冷えませんでしたか？」とホットコーヒーをサービスしてくれたのだ。ああ、これこそが商売ではないか！と小菅はほとほと感心し、常連にすらなってしまうかもしれない、とまで考えた。しかしそれはあのウェイターがいなくなればの話で、それでも、ここでの出来事は帳消しにはなった。ウェイターは何事もなかったかのように新しく入ってきた客から注文をとっていた。

読んだ本は推理もので文章が平易だったせいもあり、二時間ほどで結末を知ることができた。エピソードには殺人にまつわるドラマが描かれていて、殺人の中にも正義があり、そのためには一步を踏み越えてもいいのではないかという気さえした。小菅は余韻に浸り深く陶醉する――。しかし、その最初の一步は法を犯す程度のものではなく、超越したなにかが必要なだろう。そうでなくては正義

が陳腐化する。だから犯人は裁かれたはずで、やはり世の中はよくできている。殺人なんて考えたこともなかったのに、本というのは面白い。例えば、どんな殺人が許される？ あのウェイターを醜悪だといって殺すことは許されるのか、人ごみの中に飛び降り自殺しようとする者を屋上で殴り殺すのは許されるのか、偽善はどうだ、駄目だ、どれも弱い。クーデターが成功すれば許されるかもしれない。それと、戦争の勝者、いや、兵士か。負ければ他国の法で裁かれるのか？ 自国だとしたら皮肉なものだ。ああどうも飛躍しているような気がする。読んだ小説はたんなる愛憎劇だったのだから。小菅は自嘲し、殺人など、法で認められてもやりたくないものだな、と考えた。

こういった読後感を味わえるのなら、また読書を再開するのもいいかもしれない、と思い、中学生時代以来だなと考えながら再度、書店に足を運び、同じ作家の本とオススメと書かれている作家の厚みのある本を購入した。左手の手さげ袋に三冊の本。陽は小菅を真正面から睨む高さにまで落ちていたけれど、しばらく歩いているとまた汗が流れて家に帰りたくなった。でも帰らない。そうやって固執している自分に嫌悪を感じ、疲労も押し寄せてきた。まるで家出少年だ、と口元が歪んだ。

人通りのない路地をいき、前から長い影が足元をなでるたびに娘の姿を思い出さされ、それが家内を思うことにつながり、人から遠ざかりたくなった。目的がなく、ただ歩いているだけで、しかし足は止まらない。意志とは無関係に流れている。風に運ばれる紙切れのように。

しばらくして通りに出ると、どこか店に入りたくなったのだけれど、きつかけがなぜかつかめなくなった。窓から中が見えるたびに躊躇する。自分がなにをしているのか理解できない。ふらふらと流されているうちに、気づけば家の近所だった。時計を見ると三十分ほどで七時になる。少し早いと思ったけれど、本を家の郵便受けに隠し、木田原さんをたずねることにした。

ベルを鳴らそうとしたちようどそのとき、木田原さんが横から走ってくるのが見え、釦から指を離した。息を切らしながら、「ああ危なかった。妻にバレたらえらいことですよ」といった。

「あ、そうなんですか、押す寸前でしたよ。いつも黙って出かけるんです?」

「ええ、しよっちゅうですよ」

「しかし、黙ったまま夜遅く帰れば詰問されませんか?」

「まあそれはいいんですよ。楽しんだあとだから。やつちまったもんは仕方がないでしょう?」

「はあ、まあそうですね」

「そういうことですよ。それに、会話だってほとんどありやしませんかね。すぐ支度するんで待っててください」

きつと、奥さんは呆れているのだろうと思った。そうでなければ、常習性を思わせる彼をなんとかしてでも引き止めるはずなのだから。

木田原さんはすぐに出てきた。いったいなんの支度があったのか不思議なくらい容貌に変化もなく、ならば金銭的なものだろうと片付けた。

「さあいきましよう、竹内さんとは店で合流しますから。ちよつと歩きますけどね、それはまあ、一応の用心で、家内に引き戻されないように遠くへいくまでです」

なるほど、と少しばかり感心した。いつも家で飲んでいた小菅には、そういう酒飲みのちよつとした知恵が楽しく思えたのだ。

二人で同じように煙草を吸いながら、黙って歩く。黄昏を墨汁で塗りつぶしたような空になった頃、ようやく涼気が舞い降りたような気がして、腕をさすった。薄く輝き出した星が綺麗だった。しばらく上を見ていたせいで気づかなかつただけれど、眼下で月が揺れている。いや、それは闇にきらめく木田原さんの頭だった。ちよつどいい具合に黒と白の雲がかかっている、でこばこの黄色い月だった。空を見れば彼の頭が視界の端で月になるとは知らなかった。虫が一匹彼の頭の上を回った。手で頭も叩くようにぺちぺちと振り

払い、それからこちらを見て笑った。小菅も同じように笑った。

案内された店は多少古ぼけたたたずまいで、常連がそこそ多い、と木田原さんはいった。入ると、四十代前半に見える楚々とした雰囲気、女将が、前に座る男の客に酒をついでいた。店は狭く、カウンター席が八つしかない。テレビに映っている野球中継を見ながら男は静かに酒をあおった。

「よう、ママ。こいつは昨日奥さんを亡くしてね。よくしてやってくれよ。そうそう、竹内もあとからくる」

こいつといわれたことを女将に会釈してから気づいた。しかし、酒飲みの付き合いとはそういうものなのかもしれないと思い、忘れることにした。しかしそれもあとになって、彼がわざと、女将の前だから居丈高に振舞っているのだとわかった。きつと気に入っているのだろう。

竹内さんがくるまで瓶ビールで軽く一杯やり、鳥を食べた。席四つ隣の男はその間も喋らず、酒がなくなれば黙ってコップを女将に差し出した。

「実はね、私は二度目の結婚でして、ずいぶん昔に別れたんですよ。私が悪いんですがね、逃げられたとわかって探し疲れて、それからしばらくは酒に溺れる日々が続いたんです。逃げられた原因もまあ酒なんですがね、ははは」

「それは知りませんでした」

「知らない人のほうが多いでしょうなあ。こうやって自分のことをさらけ出すのはね、あなたのことを知りたいと思ったからですよ。奥さんに先立たれても顔色一つ変わっていない。おや失礼。もちろん、それは私の判断ですがね、いったいこの先どうやって生きるのか、興味があるんです」

「顔色ですか。ただ、それどころじゃないっていったらどうです。冷血ですか？　今まであった生活ががらりと変わるわけです。木田原さんは酒に溺れたのでしょうか、私には娘がいて、あいつに絵の勉強をさせてやりたい。だから立ち止まれないんですよ。立ち止ま

れば私と娘は酒ではなく涙に溺れて死ぬでしょう」

「ほう、涙にですか。しかし複雑なところですね。すでに小菅さん、あなたが奥さんを亡くされたという挨拶をしていない家々の奥さん連中の中から、礼儀知らずだとか変わり者だとか陰口を叩く人らが出てくるですよ。死んだとか、結婚だとか、そういう話題はすぐに近所中に回るものです」

「そうですね、それは驚きですね。しかし、もともと私はほとんど付き合いもなかったわけですから、どうでもいいことですよ。なにも近所の陰口を叩く人らが客のすべてではないんですからね」

「駄目だ駄目だ、それじゃあ駄目です。すでに私は聞いてしまいました。それどころじゃないという言葉。もちろん、しらふのときには口を閉ざしてだれにもいいやしませんよ。でもね、酒が入ると自信はありません。家内とは会話しませんが、きつと寄り合いでいいふらしてしまうでしょう。そうなれば、男連中がそれぞれの妻にいい、そこからまたよからぬ噂がたちますよ。そうなれば、冷血どころじゃない。あの人は妻を殺した、なんてことにだってなり得ますとも」

「それは……いくらなんでも大袈裟じゃないですか？」

小菅は小さく笑った。

「いいえ、女とはそういうものです。どこかおかしい、違うとわかっていても、そういう噂を楽しむ生き物です」

「それじゃあ、そうやって心配してくれるのだしたら、木田原さんがいわなければいい話じゃないですか。私はもしそんなことが吹聴されれば、一番楽しんでるのは木田原さんと思ってしまいますよ。そうなれば、私はあなたを殴ることになるかもしれません」

木田原さんの目をじっと見つめていった。

「おお、怖い。しかしもつともですね。そのとおりです。わかりました、私が気をつけますとも。そしてこの話はなかったことにしましょう。さあ、ママ、こいつについてやってくれ」

小菅は、余計なことを語らないように、あまり酒を頭にめぐらせ

るわけにはいかない、とグラスを傾けながらも気を張った。

「まあね、嘘でもいいから表に張り紙をして、しばらく喪に服しているふりでもしたほうがいいかもしれません。それだけできつと世間は納得しますよ」

「休むという張り紙はしたんですが、そんなものですかね」

「ほう、そうですね、ではさらに念を押すといい。やつらは単細胞ですからな。それに、張り紙をすれば、もし私が口を滑らしたとしても、妻殺しに関してはきつと、私が嘘をいつているということになるでしょう。演じることはなんにせよ必要ですよ、私は下手糞ですけどね」

「そうですね、そうします」

「そうそう、ママも実は亭主を亡くされていてね、四年前だったかな？　そのときすでに私は常連でね、気丈に振る舞って仕事を続けていた姿を今でも覚えていますよ。いやあ色っぽかったね。守つてやりたいと思わせてくれましたよ」

奥の客に酒を注ぐ女将を見ながらいう。

「気丈……ですか。今の私も、いわばそうですね。まったく同じですとも。そうやって自分に酔うつもりはありませんが、娘は理解してくれない。冷たい、とそういうんです」

「子供はずうつといませんがね、そういうものかもしれません。あとくに娘さんにとつては母ですから。愛した人の死を、なぜ父さんはなんとも思っていないの？　とかそんなことを考えてるんじゃないですかね。ありきたりな想像ですがね」

「いえ、案外そのとおりかもしれませんよ。もし私が娘の立場だったら、話すことがなければ、どこか、ほんのちよつとした仕草にでも悲しみのサインを見つけようと思いますね。でも、あいつには確信持てるものを見つけられなかったのでしょう。それが、つまりはあいつの中で父は冷血で冷淡だと決めつけることになったのかもしれない」

「なるほど、面白いですな。ならばちよつと見せてやれば済むこと

なのでしょう。演じればいいんですよ」

グラスを一気にあけて気持ち良さそうに息を吐いた。

「ところで小菅さん。人は死んだらどうなると思います？」

「どうなるものにも、死ねば終わりでしょう。地獄や天国なんてあるとは思えませんよ」

「寂しいですなあ。もつとこう、夢のある話をしましうや。ある人はいつてましたよ、死こそは魂の解放だと」

両手を広げてさも楽しげにいった。

「解放ですか。その人は憧れてるだけなんじゃないですかね？ 解放の意味が幸福と同じものをいつているのなら、自殺でもすればいいと思います」

「おお怖い！」

少し酔ってきているのだろう、大きく開かれた眼は血走っていた。

「木田原さん自身はどうなんです、なんとお考えで？」

「私はねえ、小さい頃にそれを考えたことがありますね、半ばパニックに陥ったんですよ。恐怖でね。考えたのが布団の中で、すぐに飛び起きて親父のところへ飛んでったんです。すると鉄拳をもらいましてね、眼が覚めたんですよ。そのときに、ああこういうことは考えてはいけないのだ、だから親父は殴ったのだと気づきましたよ。のちのち、殴った理由が、なんとなく鬱陶しかったからと知ったときはショックでしたが。でもね、今は恐怖に負けずに考えることもできますよ。私の答えは一つです。やはり解放という言葉信じてますねえ。だって、そうじゃなきゃつまらんですよ。べつに死にたいとも思いませんがその先にはなにかあつて欲しいと思いませんか？ そうじゃないと人はなんのために生きているのかってことです」

「まったく同じじゃないですか。私もね、人は死ねばそれで終わりののに、なぜ生きてるのだろうってね」

「ニヒルですなあ。それこそ死ねばいいという言葉が当てはまりますよ。まあここであなたはなんのために生きているのか、と訊くの

は簡単ですからやめておきますがね。そんなのはなぜ一人一人生まれてきたのかを訊くと同じようなものですから」

「はは。これからはまあ、娘と小さな幸せを探して生きるのみです」
「私は極楽でも探しましょうかねえ、ははは」

ちようどそこに入ってきた長身のスーツ姿の客がどうやら竹内さんらしく、白い頭をふわりと七三に分け、表情は威厳を含んでいて、この店には不釣合いに思えた。

「近所に住んでいるのに初対面同士とは驚きですな」と木田原さんがいった。「こいつはね、一見紳士だが、仕事は詐欺師でねえ。いつも女を騙して金をまき上げて、今までいったいどれほどの女が泣いたことが」

「はっ、騙されるほうが悪いのさ。といっても正確には詐欺師ではないけどね。それに、ターゲットは虚飾と虚栄心のまじった汚らしい女ばかりさ。だからママみたいな女性は狙わないよ」と女将のほうに微笑んだ。

「あら、そうやって女性を落としていくのでしょうか？」と彼女はしなやかに流した。

「あはは、そのとおりだ！」と豪快に木田原さんが笑う。竹内さんは詰まらなそうに頬をゆがめ、焼酎を頼んだ。

「それはそうと竹内よ、こいつは先日奥さんを亡くされてね、なにか元気づけてやってくれないか」

また彼はいいふらす。こうやってだれかれかまわず人の不幸をネタに酒を飲むデリカシーのない人だったのかと思わずにはいられなかった。しかし考えるに、そもそも木田原さんは悲しみを忘れるために誘ってくれたはずで、そうなのだからやはり皆がその悲しみを知らずにいるのはよくないのだろう。議題がなければ目的の討論ができないのだから。

「そうですね、それは残念ですね。しかしまあ、どれほど悲しんだところで、人は無情ですよ。いずれ忘れます」

「ええ、おっしゃる通りです。しかし、あまりにも早く忘れようと

すると、どうやら非難すらされるようです」

「そうでしょうね。自然に、自分に忠実であるべきですよ。無理しないことです。放っておいてもいずれ忘れるんだから。きつと、どう非難されてもあなたの奥さんですから世間以上に早く忘れるなんてことはないですよ。だから、どちらにせよ気にしないことです」

「ええ」

「それに、忘れたいのなら、この話はしないことです。そちらの事情はわかりませんが、もっと違う話をしませんか？　例えばほら、株はどうです？　されますか？」

「いえ……」

「株なんて私だってやらないね。たとえ買っても置いてるだけだな。そんな難しい話じゃなくて、いつもあんたいってるじゃないか、人間がどうのだから、下賤な女を地獄に落としてやったとか」

「おいおい、イメージが悪くなるじゃないか、初対面なのに。しかし、地獄に落ちるべき人間という点でなら話はできそうですが、いかがです？」

「なんだか過激ですね」

グラスを握る小菅たちに挟まれた木田原さんはいろいろと女将に注文をしていた。

「そうですね、表現の問題でしょうか」

「私は地獄なんて信じてませんから」

「おや、それじゃあ話ができません。いい大人が、そんなところを突っ込んでくるとは思いもしませんでしたよ、はは」

「ええ、ですからやめましょうよ」

「ふう。腰砕けですね」

「すみません」

「まあいいですとも」手のひらを向けていった。「ならばこういうのはどうです？」声を細めていう。「その男が、なにを生業にしているか当たるといえるのは？　つまりゲームですよ」

「答えはどうやって確かめるんです？」

「あの飲みかたからして、常連でしょう」

「ああ、よく見るとも」木田原さんが口を挟む。

「つまり、女将が知っている」

なるほど、と小菅たちは納得した。そこでそれぞれ推理をはじめ、横目でちらちらと彼のなりを確認し、小菅は大工と決めた。顔が黒く、容貌魁偉でもあったからだ。

木田原さんはトラックの運転手といい、竹内さんはプロレスラーといった。

「それはなんでも確立が低いだろう」と木田原さんが笑う。小菅も同じ考えだった。

「確率論なんてつまりは曖昧さ。重要なのは結果なんだから」

「ふん、強気だな」

そこで木田原さんが女将に聞いた。「えっ？」と彼女は小菅たちがそんなゲームをしてたことが意外だったようで、しかし、答えを教えてくれた。

「あのお客さん、いつも黙ったままなのよ。返事をするにはあるんだけど」とそこまで小声でいったとき、その客がこちらを振り返った。確かに、三人の客と女将が小声でひそひそと話していれば怪しげだし、気になるだろう。女将は姿勢を正し、なんだか気まずい空気になった。会話がとまる。テレビのコマーシャルの音だけがあつた。まったく浅はかじゃないか、人のことを話の種にするなんてと小菅は自己嫌悪し左腕の肘を突いて手のひらで横顔を隠し、嘆息した。途端に客が立ち上がり、絡まれるのかと思っただけで、何事もなく勘定を済ませて出ていった。小菅は心底ほっとしていた。

私も私だが、あの人もあの人だ、と小菅は竹内さんの軽薄さと人間性を軽んじた。それもすべて、このすべては酒のせいなのだろう、ということにした。

それから店の空気も元に戻り、たあいな会話が続いた。討論もなく、酒も進み、いつしか気を張ることも忘れていた。たまに笑いが起こり、木田原さんがとくに女将を美人だといって褒めた。あと

から客も入って来、店内はいつそうにぎやかさを増した。確かに竹内さんは饒舌だったけれど、言葉の端々に気取りがあつて、いけ好かない中年だった。木田原さんがいなければ酒もまずくなつただろう。そういった点でいえば、木田原さんはまさに酒飲み男の典型のよう、がさつで利己主義で世間ずれしていない部分もあるけれど、子どものように素直なのだと理解した。

竹内さんがすべて勘定をしてくれ、小菅は素直に甘えた。近所なのだから一緒に帰るのが自然だったのだろうけれど、小菅は寄るところがある、といって二人と別れた。寄るところがあるのではなくて、今、帰るところがないだけなのだけれど。

さてと、どこへいくかな。小菅はそう呟き静かな路地を歩いた。街頭だけが灯つていて、塀のせいで家々の明かりは路上に届かず、猫が走り去るのを見た途端に心細くなつた。時間を確認するとまだ九時すぎだ。少しいくと理解した。後ろから足音が聞こえ、だれかつけてきているということ。振り返ると、二十メートルほど離れた場所にシルエツトがあつた。小菅はあの店の男に違いないと決めつけ、なんとなく暴れたい気分もあつた自分に気づいた。面白い――。ゆつくりと、静かで暗い場所を探して歩く。酔いはすぐに飛んだ。確実に男はつけてきていた。住宅街を離れ、林道の手前で立ち止まる。月明かりがかすかに落ちるも、そばにくるまで男の表情はわからなかつた。

「なあ、あんた。店でなにをひそひそ話してたんだ？」

彫りの深い顔の男はじつと睨み続けた。沈んだ目に光が漂っている。歳は同じくらいだろうけれど、体格では明らかに相手が勝っていた。

「なんのことです？」

小菅は嬉しさで頬を緩ませる。

「おいおい、とぼけるなよ。俺のことをいつてたろう。あからさまなんだよ。喧嘩売ってんのか？」

「なるほど、それで一人になった私のほうをつけてきたというわけ

ですか」

「何人いようが関係ねえよ」

「で、どうしたいんです。喧嘩ですか？ 金ですか？ それともただ、話をしたいだけですか？」

「ふん。こうするんだよ！」

男は腕を振り上げ小菅に殴りかかった。拳は左頬をとらえ、頭を揺らす。一撃は強烈だった。しかし痛みはなく、頭の中では「この程度なのか？」と冷静に考えていた。さらに男はもう一発放つ。やはり痛みはなかったけれど、それは小菅を地面に跪かせる衝撃があった。最後に正拳突きが鼻をとらえ、倒れるのと同時に血の温かさを味わった。

「今度あの店でお前の仲間を見つけたら、そいつらも同じようにしてやると伝えておけ！」

口も切れたように倒れたまま唾を吐く。生ぬるい感触が喉を伝う。上半身を起こし、手で血を拭き取り、なんども唾を吐いた。それからもう一度、土に寝転がり空を見た。気分はなぜか晴れていて、次第に笑いが込み上げた。それは大きく、あたりに響き、やまなかった。雲から顔を出した金色の月が、光をにじませ怪しげだった。

身体が揺すられ、目を覚ますとまわりは明るかった。

「おい、あんた大丈夫か」

農夫の格好をした老人が心配そうに顔をのぞいている。

「え、ああ、すみません。どうやら眠ってしまったようです」

「血だらけの顔して、わしゃ死んでるかと思ったよ。顔だって腫れてるぞ」

「大丈夫です、ちょっと転んで……。いま何時ですか？」

「六時前だわ」

よろよろと立ち上がり、礼をして歩く。いまさらに痛みを感じ、体は重く、とくに肩が激しかった。どれほど顔に血がついているかわからなかったけれど、すれ違う人の反応でなんとなくわかる。鼻から下はすべて赤いのだろう。土の味もあつた。

そういえばあの男は昨日確か、仲間にも伝えておけ、といったような気がする。小菅は、みんな殴られればいいと思った。

家に帰り、鏡で顔を見る。汚れきつた顔が戦士のように勇ましく見え、自分を褒めたくなった。顔を洗い、居間にいくと娘がいた。

「なんだ、もう起きてたのか」

「どこに行ってたの？」

ゆっくりと口を開いた。

「どこでもいいだろう」

「なによそれ。心配したのに……」

「いちいちいわなきゃいけないのか？ お前には関係ないことだ」

「お母さんが死んで、それから、それからお父さんまで……」

そこまでいって喉を詰まらせ、一筋の涙を見せた。

「関係ないな。親のすることにはいちいち口を出すな。いいか？ いつまでもめそめそしていると、父さんも我慢の限界にくる。父さんを怒らせるなよ。これからはお前と二人で暮らしていかなきゃあな

らないんだからな」

娘の表情は今までに見たことのないものだった。

「情けない顔だな。そうやっていつまで悲嘆に暮れる娘を演じるつもりだ？ お前は家のことをやれ。今すぐにでもだ！ それから、学校へはいかせてやるが、家のことを疎かにはさせないからな。絵もそうだ。少しでも家のことを怠けてみる、お前をここの奴隷にしてやる！」

「なにを……いつてるの？ それは、血？ 血がついてる。なにかあったの？ 喧嘩したのね？ ねえ。なんだか、いつものお父さんじゃない！」

「さあね。お前の馬鹿さ加減にうんざりしているのかもな」

それからすぐに、娘は自分の荷物を目の前でわざと見せつけるようにまとめだした。

「なにをしてる？」

「ここを出ていくの。お父さんはお父さんじゃなくなったから――」

「はっ、いったいどこにいく場所があるんだ。だれがお前の面倒を見てくれるんだ。友達か？ 毎朝くるあの同級生か？ それとも親戚か？ なんていつて世話になるつもりなんだ」

娘の手が止まる。

「よく考えろ……。行き場所なんてどこにもないんだよ。お前はここの娘だ。ここにしかいられない。結婚するなら話は別だがな」

「じゃあ、結婚する。体でも売って、男を見つけて、養ってもらわ！」

瞬間に、手が出ていた。考えるよりも早く娘の頬をぶった。

沈黙のあと、娘は堪えきれなかったのか、泣き沈んだ。いつてはいけない言葉だと、本人も気づいているのだろう。

そのところについて怒りはあった。しかし小菅は、本気で娘を犠牲にしようと考えていた。自分の幸せを考え、平穏に暮らすことを考えると、娘という犠牲が必要だったのだ。たとえ、人になんといわれようと、娘を自分だけのために使い、安息を得ようと思っていた。

世の中のすべて、歴史のすべてが犠牲の上に成り立っているのだから、だれもが人を利用し、人を蹴落とし、上を目指すのだから——。いったいこれのどこに博愛があるのだ。この世は憎悪でできているではないか。だから、だからだれにもなにもいわせない、と決意していた。たとえその犠牲が我が子であろうとも——。しかし、できなかった。娘の泣き崩れる姿を見て、自分は娘を愛しているのだと理解した。昔と変わりなく、いや、より深く愛しているのだと。

二人で一から生活を築きなおそうと考えた。なにも自分の幸せだけを考える必要はなかった。なぜ過ちを犯してしまったのだろう。これからは二人で静かに生活し、細々と生きていこうと考えた。

娘に手を差し出す。しかし娘は払いのけ、家を飛び出した。小菅は追わなかった。きつと帰ってくる。なぜなら、自分も同じようなことをしたばかりなのだから。

「さてと、なんにしても店を開けないわけにはいかないな」と呟き、シャツターを開けようとしたけれど、喪に服していることを演じるべきだといった木田原さんの言葉を思い出し、張り紙をしながら店の整理だけ済ませた。今はもう捨てられた商品のおかげで、棚の一割はがらだった。

家内が死んでから、娘がいなくなる時間に、小菅はふと孤独を感じることもあるのに気づいた。それは、おぼろで、ほんとうに孤独感なのかはいまいち理解に及ばなかったのだけれど、一人のときに限ってやってくる感情で、だからきつとそうなのだろうと思っていた。テレビを見ても、昼間から酒を飲んでも消えない寂しさで、やがて気が変になりそうな感覚も頭におりてき、外に出なければひどくなるばかりだと考えた。

きつと病気になってしまふ。ほんの数日でこうも精神がまいってしまふものなのか、と小菅は不思議な気がした。

朝の涼しいうちに公園で読書をしようとポストから本をとると、すぐそばに例の少年が娘を待っているのか、座りこんでいるのを見

た。

「おい、こんなところでまた待っているのか？」

「あ、はい」

正直なやつだな、と微笑み、それから考えた。家内のことを知らないのであったらば、娘にあれこれ訊かれるのも娘にとって酷だろうから、いつそ私がいおうと決めた。

「張り紙は見たかな？」

「あ、見たけど意味がわからなかったです」

彼は立ち上がり、ちゃんと背を伸ばした。

「そうか。まあきみは若いし、事情を知っている人にしか通じないかもな。ああ、そんなに警戒しなくていいとも。いつておかなきゃならないことがあってね、どうだ、娘は学校で落ち込んでいなかったかな？ いや、その前に名前を聞いておこう、いまさらだがこれは礼儀だな。で、なんていうのかな？」

「えと、山下です」

「そうか、山下君か。で、娘の態度だが、おかしいところはなかったか？」

「なにかあったんですか？」

「いや、ちよつとね。先に質問に答えてくれないかな。話はそれからしようじゃないか」

彼は確かに怪しげな視線を送ってきた。

「まあ、ちよつと物静かになったような気がします。下ばかり見て話しかけ辛いんです」

「そうか、ありがとう。実はね、まあきみはそれほど気を使わなくていいんだが、家内がね病気で他界したんだよ。だからそれを知っていてもらいたかったんだ」

「え、あ……」

少し取り乱した彼を制し、「いいんだ、なにもいわなくていい。黙って聞いてくれ。それでだ、娘を悲しませるような問いかけはないでもらいたいんだ。わかるね？」

「は、はい、わかります」

「よし、店も数日は開けないから、これからはぐっすり眠るといい」
「はあ、それじゃあ」

彼は不思議そうな顔を浮かべたまま去ろうとした。

「あ、そうそう、もしなにかあれば娘を元気付けてやってくれよ」
そういうと彼はさも嬉しそうに辞儀をして走っていった。

朝の一瞬の穏やかさを感じながら公園を目指し、コンビニエンスストアでパンとミルクとを購入してベンチで朝食もとろうと考えた。殴ったり殴られたり、それに協力を仰いだり醜い考えを持ったりしたけれど、今の気分は健やかだった。これは晴天と風のおかげかもしれない。いや、違う。娘を打ち、娘と娘に対する心を理解したからに違いない。今はとても澄んだ心なのだ、そう、この光の中を樂しげに走る風のように――、と小菅は納得した。小鳥も草木も雲の欠片でさえもすべてが愛しく思える。すべてを包みたかったし、すべてに包まれたかった。

公園の入り口からすでに木々が歓迎してくれているように思えた。日差しと影の調和がとれている場所を求め歩く。ベンチは四列ほど通りに沿って備え付けられていて、それがところどころにある。木漏れ日が少し注ぐベンチには、老人が杖を片手に持ちながら疲れたような表情をして座っていた。それは、陽に照らされてはいるけれど、深い皺のせいで陰って見えるからかもしれない。

一つあいだを開けて座り、袋から取り出す。ジョギングしている中年女性や木にとまる鳥を見ながらパンを食べた。一切れ小さく干切って放り投げると、鳩がぴょんぴょん近づいてつつく。どうなのだろう、とことんまで太らせれば重さで空を飛べなくなるのかね、とふと思った。

ミルクが心なしかぬるくなっているように感じ、夏も唸りをあげはじめた。涼しいのはほんのちよつとの時間だけだったけれど小菅には十分で、汗が噴き出す前に帰宅して母に電話をした。それは仏壇や初七日やその後の行事についての意見をうかがうためで、そん

なことしか話さなかったからか、それとも葬儀中の小菅を冷淡な人非人だとも思ったのか、母はもう手紙も出さないとわざわざ伝えた。承諾するとなにやら少し喚いたけれど、すぐに平静になり、小菅に親戚のいけ好かないあの男ほうがよっぽど「まし」だといって電話を切った。父が理解してくれているのだから、母になんといわれようとも心強く、なにも変わるつもりはなかった。しかし、母の言葉は頭に残り、一日のやる気を失わせた。

居間で横になり、昼のニュース番組を見る。不幸なニュースと歓喜のニュースでころつと表情が変わるキャスターを見てみると、カメレオンのような顔が羨ましくなった。私もそうすれば安心できるのだろう。小菅はそう考え、ゆっくりとまどろんだ。

眼が覚めたのは娘が帰ってきたからで、どうやらちゃんと学校には行っていたらしい。そしてすぐに言葉を交わすことなく道具をもつて絵の勉強にいった。

まわりはオレンジに染まり眠たい頭には火事にすら見える。仕事や家内の不幸で、久しく注視していなかった居間の姿だった。窓から外をのぞくと、夕焼けの空に鳥は一羽だった。ぐるぐるとどこへいけばいいのか迷っているようですらあり、じっと見ていると途端に心がしめつけられるように目頭が熱くなった。この狭い部屋とあの広い空の違いはあれど、結局は、結局はあの鳥と一緒になのかもしれないというような気がして、しかし、こうもちよつとしたことで気分が変わることになんだか苛立ちさえ覚え、明日は表で娘の帰りを待とう、そう心に決めた。

夜、娘が絵の勉強から戻るのを待ちながら煙草を吸っていると、呼び鈴を鳴らす音があった。出ると木田原さんが顔を腫らしていて、「昨日の店で飲んだ帰りに、男に殴られた」と伝えにきた。どうやら犯人は小菅を殴った男らしく、だから警察にいくよりもここにきたというのだった。

「あんたもやられたらしいな」

「ええ。それで、なにか？」

「仕返ししたくないか？」

「それはとくに考えていませんでしたね」というと、「きっと竹内もやられる。ひどく根に持つ男だよ、こつちのことを常連だと知ってるから毎日見張ってるんだ。だから、かましてやろうじゃないかなあ！」とひどく泣きそうな顔でいった。

「こんなところでみつともないですから、中で話しましょう。どうぞ入ってくださいよ」

そう勧める。

「ああ」

居間に座らせ、とりあえず煙草をどうぞといつて落ち着かせた。

「警察にいくよりも仕返ししたいのですか？」

「そうだと」

「まあいいかもしれませんが。もともとはあちらから仕掛けてきたわけですから、しかし当然ながらやりすぎは禁物ですよ。事件は勘弁したいですからね」

「そりゃ私も同じだと」

「で、いつやりますか？」

「今からいこうじゃないか」

いつの間にか彼が友人同士のような口のききかたをしていることに気づいた。親しみを持った証拠かもしれないと考えると、目の前で鼻息荒く踊る子豚を見ているようで妙な愛着が沸いた。

「……居場所なんてわからないでしょう？ 木田原さんを殴ったのだから、もう帰ってるかも」

「あいつの狙いはあと一人、竹内だよ。だから電話して店にいてもらう。そこに現れたヤツをぶちのめすんだ」

「男がくるという保証は？」

「ないさ。でもな、ヤツは執念深い。二日連続で見張ってるんだからな。もしかしたら抜け抜けと飲んでるかもしれない」

「わかりました。ならやりましょう。武器は持ってませんよね？」

「持たない。竹内もいるしな。三人でかかれば十分だろう」

腫れて眠そうに見える顔を不敵に緩ませた。きつと彼はとことんまでやる気なのだろうと思え、とめるのが自分の役目かもしれないと考えた。

竹内さんに電話してから店まで向かうあいだじゅう、木田原さんは強気な発言を繰り返し、右の拳をなんども左手で受け止める仕草をした。それは冒険前に虚勢を張る子どものようにも見え、こういった態度をとる者の大抵は土壇場で逃げ出すのかもしれない、とも考えた。

店の明かりが見えるとまずは辺りをうかがい、男が潜んでいないか調べる。夜の風が不思議と冷たく感じた。四方にはそれらしき人物はおらず、店内を遠目に確認すると、竹内さんがスタンバイしているのが、風で揺れる暖簾の隙間からなんとか確認できた。客は彼一人だ。小菅たちは男がやってくれば隠れるであろう場所をさらに後方から監視した。住宅に囲まれた曲がり角で、人に見られれば不審に思われるのは確実だったけれど、小菅たちは毅然と一点だけを視ていた。煙草を吸い、よそ見を重ねるうちに集中は途切れ、足は楽を求めた。三十分は喉がタールで粘つくほどに長かった。

店内をのぞくように通り過ぎ、そうして小菅たちの視界の前方で竹内を待ち伏せたのはあの男だった。

「きたぞ」

小菅はぼうつと空を見ていたけれど、瞬間的に警戒を強めた。

「まさか……。あの男はよほどに執念深いんですね」

「そうじゃなきゃ私もここまで殴られたりはしないはずだろう」

「それじゃあ竹内さんを移動させますか」

「そうだな」

木田原さんが携帯電話で連絡をとり、いつも通り帰るよう指示した。

「動いたな。これでヤツが竹内を路地裏に連れ込んでくれたら、そ

の瞬間にうしろからまずは一発くれてやる」

「慎重にやりましょう」

少し離れてあとをつけていると、まったく男から警戒心は感じられなかった。強さに自信があるのか追うことに没入しているのかはわからなかったけれど、小菅たちにとっては好都合だった。

やがて竹内さんの肩を叩き、足をとめさせ、しばらくすると二人でまた歩き出した。手はずどおり竹内さんは素直に人気のない場所へ向かってくれるようだ。住宅街から離れ、公民館の脇で足をとめた。二人はなにやら話している。

「よし、いくぞ」

そういつて木田原さんは一気に男を目指して駆けだした。足音が響き、すぐにもバレそうだったものの、小菅もとにかくあとに続いた。

「うおおお」

突進の雄たけびをあげながら向かうものだから、十メートル手前で男にすでに振り返られ、かわされそうになった。しかし竹内さんがすぐに男をうしろから羽交い絞めにしたおかげで、木田原さんの体重の乗った第一撃が見事に顔面に命中した。石と石がぶつかり合うような鈍い音が響く。

「あつ」と男は呻き、すぐに二発目も命中した。小菅は冷静なまま事がエスカレートしないように見守った。

そこからは一方的だった。音と呻きがおこるたびに光のない空間に黒い血が影となつて飛散する。五発、六発……。男の顔はだれよりも黒くなった。

「どうだ……調子に乗るからこうなる。いいか二度と面を見せるなよ！」

息を切らしながら木田原さんがいう。竹内さんが男の足をすくい、地面にうつ伏させた。その横腹を竹内さんが、つま先で内臓を刺すかのようにして鋭く蹴りをいれた。

「がつ」

この蹴りが一番効いたような反応を見せる。下手をすれば内臓が破裂するだろう。

「もう十分じゃないですかね？」

小菅は倒れている男を見てそう判断した。

「だな」

最後に顔面を蹴って木田原さんがいった。

「じゃあさっさとずらかろうぜ」

唾を吐いた彼の行動はまったく予想どおりで、実際はすべてつまらないものだわかった。

去り際、月明かりの下で力なく倒れている男の目が不思議な輝きを放ち、突如嫌な予感がし、いう。

「ちよつとまってください」

「どうした？」

「この男、なにかたくらんでる目をしてます。殺さないとあとで厄介になる」

瞬間、小菅はあまりにも平然と「殺す」という言葉を放ったことに気づいた。私はなにをいつているんだ？ 小菅は考えに恐怖した。

「あ……いえ、このままじゃきつと終わらないと思っただけです。今の言葉は忘れてください」

木田原さんの顔には少しの衝撃のようなものがあつたけれど、竹内さんはどうやら小菅と同意見のようだった。

「あまりにも短絡的すぎるが、こいつがもし、こいつ自身の全人生をかけて復讐に徹するとなった場合、私たちは抜き差しならない窮境に立たされることにはなるだろうな」

竹内さんは冷静に判断した。

「しかしまあ、どうだろう。恐怖さえ与えれば……二度とはむかうことができないような凍りつく恐怖を与えれば、無事に済むだろう。もしくは人格破壊だな」

竹内という人は私よりよっぽど冷酷で残忍だと小菅は思った。

「よし、自信の安全と安心のためにやろうじゃないか。で、どうす

るんだよ」

木田原さんが強気にいう。会話をすべて聴いた男の目には、もはや輝きは失せていた。

「身分証はあるか？」

押さえつけられた男のポケットを小菅がまさぐると、財布の中に免許証があつた。

「ち、なんでこんなやつがゴールド免許なんだよ」

見るなり木田原さんがそういったけれど、どうでもいいことだろう、と竹内さんが冷たく返した。暗い中、木田原さんが街頭の明かりでなんとか住所と名前を携帯電話にメモした。

「さて、横田とやら。これから警告までにあんたの指を折らせてもらう。まあ全部折るような真似はしないけどな。小指を一本だ」

竹内さんは今も冷静だった。まるで、こういった場面をなんども体験しているような玄人にすら思えた。堅気ではない、それだけは確信した。

太く短い小指を、地面からつくしでも抜くかのように軽くつまんだ。

「あ……や、やめてくれ！」

「お？　ようやく喋ったな。しかし駄目だ。こつちも二人殴られるんだからな、けじめと警告さ。覚悟していたんだろう？　人を殴っておいて自分だけ無事で済むとでも思っていたのか？」

「た、たのむ」そういった瞬間、木の細い枝が折れるような小さく軽い音がした。

男は声にならない声で呻いた。顔に力が入り目を見開いている。それもすぐに終わり、痛みをこらえるようにして歯を食いしばっていたけれどゆるい口元からはよだれがほんの少し光っていた。

「痛いかな？　当然だな。次からはあの店でお前を見かけるたびに一本づついただくからな。わかったら消えろ」

口で呼吸をしながら男はゆっくりと立ち上がり、右の小指をかばうように左手で覆った。

「いてえ……比べもんにならねえよ。二度とあの店にくるなだと？
それは俺の台詞だ。たかが小指一本で俺がひるむとも思ったのか？
これがお前のいう恐怖か？ おい、ボケが、覚えてろ。一生眠れねえ夜を過ごさせてやるよ」

男はそういつて走り去ろうとした。刹那、竹内さんが地面にあった大きな石で頭を殴った。男は勢いづいたまま、電池が切れた口ポットのようにな地に倒れた。

「おい……今のは強烈すぎじゃないか？ 死ぬぞ」

「死んでないのか？ あの状況で逃げられたらこいつは用心深く私たちに復讐しただろう。そうなると思ってる見込みはない。死んでないのなら殺すまでだ」

竹内さんはそういつて倒れている男を見おろし、一步にじり寄った。ひどく冷静で表情の一つ変わってはいない。

「いや、ちよつと待ってください。殺したら犯罪者ですよ？ 死体はどうするんです。隠してもきつと見つかる。短絡的過ぎませんか」

「なんだ？ さっきと意見がまるつきり違うじゃないか」

「ええ、さっきはどうかしてたんですよ。とにかく殺すのはよくない。もう十分懲らしめたじゃないですか。少なくとも、殴られた私はそう思いますし、木田原さんも同じでしょう」

「そうさ。もう十分だ。殺すなんてお前どうかしてるぞ……」

「そうか、そうかな。ならいいだろうやめておこう。まあ実際、恐怖はこれでいつそう増しただろうしな」

石を男のそばに放り捨て、小菅たちは辺りをうかがいながら場をあとにした。

それぞれ近所で別れたあと、明かりの消えている我が家へと戻った。小菅はさっきの喧嘩をあっという間のできごとだったように思っていたけれど、実際は家を出てから三時間も経っていたということに部屋の時計を見て気づいた。娘はまだいない。靴もなかった。

十二時を回ったころ、玄関のドアの開く音がした。廊下に出てじつと娘を見る。今の小菅は怒りと安堵とが入り混じった表情に違い

ない。娘はうつむいたまま一言謝った。小菅はなにもいわず、顔を背けた。二階へあがる娘の足音が小さく小菅の胸を遠慮がちにノックしているかのように感じた。

急な報せだった。木田原さんが朝早く、肩をびつしよりと雨に濡らした姿で駆け込んで来、「横田が、あいつが死んだ」と狼狽しながら小菅の顔をじつと不安そうに見つめた。

「え、嘘でしょう？ ニュースは見ていましたがそんなこと一つもいってやしませんでしたよ」

「散歩がてらに近くを通ったら現場検証してたんだよ！ やばいぞ、どうするんだ。私たちや人殺しになっちまった」

「まさか、そんな馬鹿な」

「冗談をこんな朝早くからいいにくるやつがいるか！」

目を強く見開いた木田原さんの尋常ではない憤然ぶりを見ていると、次第に実感として捉えられるようになった。

「そんな……あれは……喧嘩なのに……いや、私も木田原さんも殺してなんていません。殺したのは竹内さん……そう、はは、竹内さんじゃないですか」

「なにいつてるんだ、あんた！ 共犯さ。みんな捕まっちゃう」

腕を強く握られ、不安がそこを通して感染するかのように小菅の体内を支配した。頭を抱え、顔を両手で覆う。そんな中でも木田原さんを見、取り乱すのは見苦しいことだと認識し、なるべく冷静を装った。

「竹内さんに連絡は？」

「電話したが、でなかったよ」

「そうですか。で、木田原さん、あなたはどうしたいのですか？ 自首？ それとも隠し通しますか？」

「わからないんだよ……こんなことは初めてで、どうすりゃいいんだ。だからあんたのところにたよりあえずきた、なあ、どうするべきなんだ？」

いちいちつかんでくる腕をゆっくりとおろし、答える。

「今、私はようやく幸せへの扉を見つけたように思っています。家内が亡くなって、これから娘と二人で歩いていく道が扉の向こうにあると思うんです。自首すれば娘はこの先どうすればいいのです。独りで生きる？ それとも親戚に預ける？ 娘は強いからこの二つの不幸な出来事を乗り越えられるかもしれません。きつと乗り越えるでしょう。そう信じています。ですが、父が犯罪者という負い目は一生消えない。それはあいつのこれからの飛躍すら妨げかねません。そして私は、ようやく見えた幸せを手放したくはない。捕まったところで大したニュースにならないかもしれない。だから捕まってもいいという訳ではなく、だからこそ、マスコミが見放すからこそ黙っておくべきです。幸い、ここは都会に近く、犯罪数も多い。マスコミも他の凶悪犯罪を連日取り上げているところですし、証拠がなければすぐ捜査は打ち切られますよ。あの女将に余計なことは話していいですよ？」

「ああ」

「よかったそれで安心できますね、とりあえず落ち着いてください。殺したのは竹内さんです。だから木田原さんが罪の意識を感じる必要も脅える必要ありませんよ。ただそのお喋りな口を閉ざしておだけでいいんです」

その口調は立場の逆転を意味した。

「もうすぐ娘も起きてくるのでとりあえずお帰りください。大丈夫ですよ、目撃者もいなければ証拠もない。付着物をDNA鑑定されたところで、私たちにつながるもとの線だつて見つけれられないはずです。だれも警察の世話になつていないでしょう？」

そうして木田原さんを見送った。なんどもなんども不安な面持ちで崖にでも向かつて歩いていくかのように振り返るものだから、小菅は追いかける念を押した。

「いいですか、堂々としていくことです。挙動不審がなによりもいけない。ニュースがやっていればすすんで見るんです。動じない精神を作らなければ、近所の住人が不審に思いますよ。それに、もし

かしたら一番近くにいたあなたの奥さんが詰問しだすかもしれません」

「そ、そんな！」

「だから堂々としていなくちゃいけないですよ。さあ、胸を張って。なにも悪くない、あれは単なる事故ですから」

肩を一度叩き、姿勢を正してやった。

「もしまた不安に駆られるようなことがあったらいつでも来てください。あなたのためにも、三人のためにも、いいですか？ 先走ってはいけません」

「ああ、そうだな……ちょっと冷静になるよ。だが怖い。またくるかもしれん」

「いつでもどうぞ」

うつむき加減のままの木田原さんが角を曲がるまで見届け、大きく息を吐いた。居間に戻り、落ちるように座りこむ。両手を懺悔するように口元で組み、様々な想念が生まれるたびに顔のあちこちをその手で触れた。

「災難だ。そして私の人生がきつとここで決まるに違いない……」
そう小さく呟く。

骨壺をあけ、小さな骨を取り出して小さなお守りの袋を探し中身を入れかえた。残りは筆筭にしまい、その他、ありとあらゆる家内に関係したものを一式押し込めた。筆筭の中で崩れた音がし、暗闇を怖がっているのかとも思ったけれど、いったい遺影や骨壺のどこに家内の精神が宿るのかもわからずぼうつておいた。「喪に服す」。その期間は重要ではなく、必要なのは精神で、だから骨を握りしめ常に肌身離さずもつと決めた。たとえ砂のように小さくとも、見るたびになんらかの決意ができればいいと。

「なぜ押入れなんかにしまうの？」

娘だった。ずいぶん前から起きていたのかもしれない。表情からはつきりとした意志を感じる。最初の言葉で木田原さんのことは知られていないと考え、答えた。

「それどころじゃないからかな……。いや、正直なところ私にもどうすべきかわからない。これからは私とお前の二人の生活だ。いきなり前を見るといふのは難しいかもしれないけれど、忘れるというわけじゃない。儀礼的なものが必要だといふのなら、あのときは買えなかったが、すぐに仏壇だつて買おう。墓地もこっちの家族のほうに入るようにすぐに手続きするとも。ただ私に余裕がなかっただけさ。だから誤解しないで欲しい。それと、これを……」

娘の小さな手を取り、もう一つ作っていたお守りを握らせた。

「母さんの骨だ。母さんはいつもお前の心とともにある。これから二人で協力して生活しよう、店も明日から開ける。また忙しい日々が始まるから覚悟してほしい——」

娘はなにもいわなかった。うつむいたまますぐに二階へ上がり、それから二十分ほどして学校へ向かったようだった。ふと見ると、玄関に置手紙があり、「昨日はあんなこと言つてごめんなさい」とだけ書かれていた。きっと理解してくれたのだと小菅は思った。わざわざこんなものを用意して、素直でないのはだれに似たのだろう。紙を、お守りを入れている胸ポケットにそっとしまふ。ぐっと目を閉じ、「さて！」と頬を叩いた。

幸福を求める前に、四方を囲む壁のようにして迫る懸念を取り除く必要が小菅にはある。とにかく今は、昨日のあの現場を確かめなければ、と足早に雨の中へ出かけた。

木田原さんのいったとおりだった。遠目でもわかる警察の制服と数人のギャラリー。あいだにはそれを分けるためのテープが張られている。マスコミらしき人間はいない。小菅はただの通行人を装い、少し離れて傘から数度だけ視線をやり、怪しまれないようその場を後にした。

不安はどこからやってくるのだろう。恐怖は、恐れとなる要素の根本を知ること克服できると考えている。恐怖には因果関係がある。不安はどうだ、試験に受かったかという不安、病気になるかも

しれないという不安、明日地球が滅びるかもしれないという不安、心配。突飛だ。けれど、不安というのはあんがい明確な根拠のないものなのかもしれない。杞憂に終わることも多いような気もする。だから今、私が感じている、雨音のようにおぼろでつかみきれない不安もまた杞憂に終わってくれることを望もう、そして警察が本腰をいれないことも。小菅はそう考えた。それ以外にできることなどなになに一つなかった。そのとき、ふと一つの疑念が脳裏をよぎった。

指紋だ。小菅自身も財布を触り、免許証にも触れた。指紋はきつと残っている。けれど、小菅に前科はなく、それゆえ指紋鑑定で一致する人物も出ないだろう。問題はあとの二人だ。彼らがもし前科者なら、すぐにも刑事がやってくるだろう。今、唯一の懸念はそれだけだ。これは不安？ いや、逮捕されるかもしれないという不安を超えた恐怖だ。未来が閉ざされるといふ恐怖だ。そして、彼らが前科者かどうか、それさえ判明すれば恐怖はガラスのように簡単に砕け、安心できる。

小菅は二人の過去を明らかにするため、木田原さんの元へ向かった。焦りが速度を速める。雨音に苛つきを感じる。雨滴は、地面に映る黒い空を目指して水溜りに落ちる。空には容易に戻れないのに！

木田原さんを訪ねると、彼はまだ脅えた顔をしていた。ご飯粒が口元に二つもついていたらけれど、確実に表情は固まっていた。

「訊きたいことがあります。木田原さんと竹内さんに前科はありませんよね？」

ゆっくりと、目をじっと力を込めて見る。嘘をつかれても、その仕草を逃すわけには絶対にいかなかった。

「……ああ、私は大丈夫だが……、竹内は、あいつは……」

目をそらす。竹内さんに前科があると確信した。

「なんです！ 隠したところでどうにもならないことですよ。もし前科があつて指紋がとられているなら、すぐにでも任意同行を求められ、事情聴取される。そうなれば、その先はどうなるかわかるで

しょう！」

「ああ、ああ！ あるとも、あいつにはあるんだ！ 本質は詐欺師だからな。二度ほど捕まってる」

小菅は嘆息を漏らした。この先に光がなくなったような気がした。「今すぐ竹内さんに連絡をとってください。彼に伝えなければ口裏だつて合わせられない」

「とつてるとも。とつているが全然連絡がつかないんだ。なあ、どうなるんだよ。みんな捕まるのか？ 牢屋にぶち込まれるのか？」
声は小さかったけれど、今にも泣きそうな面持ちで両肩をつかんだ。

「食事をとつてる場合じゃないんですよ。今すぐ、彼の職場なり、家なりに向かわなければなりません。早く見つけないとすべて終わってしまいます。さあ、早く案内してください！ 時間はありません」

「ああ、家ならわかる。だが職場は知らん。あいつは裏社会の住人だからな。といっても完全なワルでもないんだが」

「そんなことはどうでもいい。さつさと家に向かいましょう」

走った。一刻を争う事態に思え、とにかく走った。途中で傘が邪魔になり、少しくらいならいいと濡れるのもいとわず捨てた。傘もささず走ってだれかに怪しまれるよりも、今は竹内さんと逢うことのほうが重要だった。

「そ、そこを右だ……。表札がある」

息を小菅以上に切らし、最後の曲がり角を指示した。彼を濡らしているのは汗なのか雨なのか、実際どちらでもいいのだけれど、いちいちこうやって大事なときにも疑問をわかせるのだから、瘦せたほうがいいと忠告したくなる。

「嫁がいるからよ、あいつが家にいなくても居場所くらい知ってるだろう。一度も顔を合わせたことはないんだがな」

少し遅れた木田原さんがいう。

呼び鈴を鳴らすと受話器での応答なくすぐに奥のドアが開いた。

詐欺師の家族にしては無用心だ。そうして上半身だけのぞかせたのはおそらく夫人なのだろう。整えられた肩まである黒髪と化粧の施された顔は、外出の準備をしていたのでなければ常に女を捨ててない証拠だと思える。しかし、歓迎の様子は当然なく、小菅たちに送る訝しげな眼差しのおかげで、雨の日にはどんなことがあっても傘が必要なだと気づかされた。

「なんででしょう？」

「あ、私たちはご主人の友人で、ちょっと急用があつて取り次いでもらいたいのですが」

「木田原といえわかりますかね奥さん」

「あら、あなたが木田原さんですか。よくお話はうかがっております。主人ですが、先ほど出社いたしました」

「そうですか、ちよつと職場の住所を教えてもらえませんかね？あいつに急ぎの用事があるんですが携帯電話もつながらないんですよ」

「あら？ つながると思いますけど。地下鉄に乗っているときだったのかもしれませんが。今かけなおされてはどうですか？」

「え、あ、そうですか。地下鉄ならつながらないかもしれませんないわれて木田原さんがかけなおしてみるとつながった。なんて浅はかなんだ、と小菅は少々呆れ顔を浮かべずにはいられなかったけれど、夫人に会釈をして話をだれにも聞かれない場所へ移動しようと木田原さんの袖を二度引っ張った。そのときに傘を貸してくれ、なんてできた嫁なのだろうと感心した。

会話は木田原さんの声が一方的に聞こえるだけで要領はつかめない。内容を推測すると話に通じているように思え、最初は聞き耳だけを立てていたけれど、木田原さんがやがて目を丸く広げ電話を押し付けてきた。

「なんです？」

「いいから話してくれ」

嘆息しながら電話を受け取る。

「もしもし、かわりました……」

「ああ、どうやら大変なことになったみたいだね。しかし大丈夫だ。あのとき私はあの男の物には触れていない。恥ずかしながら指紋はとられているが、現場からはなに一つ出てこないだろう。安心したかな？」

「ええ」

「まだ不安がありそうだな。あそこに目撃者はおらず、女将も知らない。どこかに滴り落ちていたとしても、その血だけでは私たちのことまでわからないさ。今日は幸運という雨が降っているからね。とりあえず今からそっちに向かおう。実は電話だけでは私も少し心もとないんだよ、二人の表情がわからないから。とりあえず近くの喫茶店ででも休んでいてくれないか。一時間ほどでいくよ。近くにいたらまた電話する」

ほんの少しだけれど安心できた。竹内さんは指紋が付着しそうなものには触れていないのだから、問題はないのだ。それでも、竹内さんがいったように、やはりお互い顔を合わせて安堵というか確信というか、そういった感情を得る必要があるような気がした。

木田原さんはようやく落ち着いたので、煙草の煙を大きく吐き、小菅を心底ほつとしたような眼で見つめた。それを見ると同じように煙草が吸いたくなり、最初の煙を小さく吐いた。

「よかった。それでもう私たちは大丈夫なんだよな？ 安心して眠れるんだよな？」

「ええ、そうです。捕まる理由は見つかりませんね。財布も盗っていないんだから、ただのリンチか私怨だと思ってくれることでしょう。交友関係をあたれば私たちにはたどり着きませんよ」

「はあ、ほんとうに冷や冷やもんだった。犯罪者なんて真つ平ごめんだからな」

「私たちは殺人幫助になるのかもしれませんが、大したことじゃないですよ。だからあまり考えないことです。弱い人間ほど罪の意識に苛まれ自白してしまうのですから」

「それはべつに弱い人間じゃないだろう？」

木田原さんを安心させるために口からでまかせをいっただけなのに彼はわざわざそこを突っ込んできた。

喫茶店に入り、席に着く。古びた感じのするソファとテーブル。それにシャンデリアのように、しかし色感なんて考えていない赤、青、緑がちやまぜになつてただ派手なだけできしょく悪い天井照明。店員の中年女性もセンスを無視したラメ入りの服装だった。驚いている小菅たちに、「こっちは長年好きでこうしてやってるんだ、悪いかな！」という眼差しをなによりも先に送ってきた。そんな態度だからか、小菅たちの他に客はいなかった。

席に着くなり注文を訊くものだから、とりあえずアイスコーヒーを二つ注文し会話を続けた。

「さっきの罪の意識ですが、訂正しますよ。弱いというのは間違いでしたね。じゃあ罪の意識ってなんでしょね」

「なんだか難しいことを聞くなあ。でもまあ、法律あつてのものなんじゃないか？ 今はそれ以上考える気にはならんね。だってそうだろう、今は歓喜を叫ぶときなんだからな！」

「ああそれもそうですね、くだらないことでした。でも正直いうとですね、私は木田原さんが罪の意識を感じて自首するかもしれないって考えてしまったんです。失礼な話ですけどね。でもまあ大丈夫そうだからそれでいいんですけども」

「ふん！ 捕まらないって決まったんだからな、ビクビク脅える必要もなくなつたって訳だ！」

途端に豪気ささえ見せるようになった。

感情をすぐに顔に出してなんて単純な人なのだろう、しかしこのわかりやすさは付き合う上でかなり便利かもしれない、と考え、運ばれてきたアイスコーヒーにミルクをいれる。黒だつて白を足せばいつかは真っ白になるかもしれないなんてことを思いながら飲んだ。安心すると腹が減るといのはほんとうのことらしい。ふと朝からなにも食べていないことに気づき、聞くと「モーニングは終わっ

たよ」と横柄な返事があつた。

「木田原さん、なにか食べますか？」

「そうだな、トーストでいいぞ」

スポーツ新聞を読みながら答えた。ずいぶんと狎れた口調だ。口についていたごはん粒はいつの間になくなっていたけれど、とにかくよく食う人だということを確実に理解した。カロリー摂取と消費のバランスの悪さは彼の体型を見ればわかる。しかしそれ以上べつにどうということもなく小菅はトーストを二つ注文した。

煙草を吸っていると、ほうこりやすごいな、と木田原さんが感嘆をくり返した。まるで気にしてもらいたがっているんじゃないかと思えるくらいわざとらしくたので「どうしたんですか？」と氣を使う。

「いや、大したことじゃない」

「ああそうですか……」

彼との付き合いが浅いのだから仕方のないことだ、彼はこういう口癖があるのだ、といい聞かせ、煙草に集中した。煙を、自然を装ってちよつと吹きかけるのは性格が悪いことだろうか。なにか釈然としない氣持ちを解消したいと考えながら、煙草ばかりふかした。

トーストをかじってしばらく、ようやく木田原さんの電話が鳴った。応答をくり返すうちに彼の表情が曇ってゆく。やがて携帯電話をポケットにしまうと訥々と話した。

「もしかすると……やばいかもしれんそうだ。その、いるんだつてよ、あいつの家の前に……。刑事らしき二人組が」

「まさか……」

予想もしていなかった。竹内さんは確信をもって一つの証拠もないといっていたのだから。それがなぜ……。小菅の頭は疑念で満たされた。

「偶然つてことはないですよ？ 刑事に見えただけとか」

「あいつが直接確かめるわけにもいかんだろう」

「てつきり大丈夫だと安心しきっていました。警察の科学捜査力を

悔っていたと考えていいのかもしれませんが、単純な事象か」

「なににせよバイってことには変わりがないな……。どうすりゃいいんだまったく」

顔からは余裕が消え、代わりにトーストのカスがついていた。

「竹内さん、くるんですよね？」

黙って頷く。

「じゃあここにいてください。私が近所の様子を見てきましょう。

眼光鋭い男がいたらわざと竹内さんの呼び鈴を鳴らしますよ。いや、鳴らした振りかな。そうして落胆とともに、きた道を戻ればなにか話しかけてくるかもしれない。容易に接触をはからないかもしれないませんが、試す価値はあると思います」

「そうか、気をつけてな……」

店を出ると足早に向かう。焦燥と不安……：またしても不安だ！

いや、これは恐怖かもしれない。小菅は苛々とする気持ちを抑えなるべく平静を装いながら煙草をまたくわえた。

竹内さんの家に向かう途中になぜか彼と会うことはなかった。それぞれ逆の目的地へ向かっているのに、複雑な地理でもないのに、なぜ見かけなかったのだろう。住宅の界限には刑事らしき男もいなかった。それでも呼び鈴を鳴らす演技をし、後をつけてくるものがないか幾度も足をとめ、目を閉じ、黒白の世界に対し最大の集中力ですべての事柄に気を配った。地面や傘を打つ雨滴の数さえ数えられるかと思うほどに――。しかし、追尾者はなかった。

結局、先に喫茶店に戻ったのは小菅のほうだ。木田原さんは頭を抱え、テーブルの上で塞がっている。ドアを開けるなり鈴の音でぐさま振り返ったけれど、やはりその瞬間の表情は哀願するようなものだった。

「なんだ、あんたか……」

「連絡ありましたか？」

「ない。尾行をまいてるんじゃないか？ 慣れてるしな。別件なら

いいが……」

店内にはサラリーマンと老人の客が増えていた。

「すでに竹内さんが目をつけられているのだから、いえ、その方向で考えることにして私たちだけでも助かる方法を考えなければいけない」

「どうするんだ？」

「だからそれを考えるんです」

「はあ、と木田原さんが嘆息する。そしてなに一つ考えるそぶりを見せることもなく、無理だよ、といった。ただ一つ、それしか答えがない簡単な数式でも解いたかのように。」

「あなたは考えなくていいですよ。期待はしてません。ただ黙ってくれてさえいればそれでいいんです。そして私のいうことを忠実に守ってくればね。あなたはすぐ顔に出る。ほら、今だって私の言葉に機嫌をそこねたでしょう？ バレるんですよ。だから常に鏡をもっていてください、ポケットに入る手鏡くらいの大きさのやつをね。これはべつに見なくていいんです。普段と違うことをすれば怪しまれますからね。ポケットに手を突っ込んだときに鏡に触れるでしょう、そのときに気を引き締めて表情を正すようにするんです、頻繁にですよ。そうすれば、外見から怪しまれることは少なくなるでしょう」

「なるほど、確かにそうかもしれん。嫁にもよく顔に出るといわれているからなあ」

「ほら今も。あなたの場合はもう、無表情でもいいくらいですよ。それくらいやらないと効果も期待できそうにないですから」

「そういつてすぐにでも鏡を買うことを勧めた。」

「さて、とりあえずはそんなところです。竹内さんに連絡してもらえませんか。私が話します」

「ああ、これを押せばつながる」

木田原さんは携帯電話を差し出した。

「こういうときは携帯って便利だと思いますね。しかしまあ持つ気

はさらさらありませんが」

何回コールしたかわからなくなった頃に竹内さんが出た。

「もしもし、どうした？」

「『どうした』はこちらの台詞ですよ竹内さん。小菅です。大丈夫なんですか？」

「ああきみか、大丈夫じゃないな。まだつけられている。次の角で勝負に出るよ」

「刑事ですか？」

「心当たりがありすぎてわからん」

「警察じゃないことを祈ってますよ。あなたのためにも」

「……なるほどね」

意味深長な返事だった。いや、意味深長なのは小菅のほうかもしれない。

「それじゃあ、とりあえずまだ待ってますので」

「ああ、わかった」

携帯電話を返してコーヒーのおかわりを注文する。木田原さんがなにかいったけれど、店員の大声でかき消された。

「そんなサービスはやってないよ。それに、あんた一度出ていったじゃないか。戻ってきてお変わりを注文なんて虫が良すぎなんだよ」

「あ、そういえばそうでしたね。失礼しました。じゃあコーヒーを一杯淹れてください」

「はいよ」

木田原さんはちゃんといいつけを守っている。口に力をいれて閉ざし、目に力をいれている姿はまるで幼稚園児のお遊戯だ。心の中で思わず一笑してしまった。

運ばれてきたコーヒーを飲み、他の客を視界の端にいれる。頭からもくもくと煙が出て、煙草だとわかるのだけれど、ヒートして故障したロボットのように見えた。

「木田原さん、もし、もしですよ？ 捕まらないための抵抗ができるならやりますか？」

「なにかいい方法でも思いついたのか？」

「まあそんなところですが、まだ詳細はいえませんが。大きな危険が伴う行為ですから」

「ほう。抵抗か……、もし私でもできることならやるかもな」

「そうですね。心構えはあるということですね。それでけっこうです」

「なんだ、なにをやる気なんだ？」

「まだ決めたわけじゃないですよ。それに今さっき、いえないといったでしょう。いずれわかりますよ」

小菅はつい不敵な笑みを浮かべたけれど、青写真すらない危険な計画しか選択の余地がなくなったとしても、いざ実行に移すというのはとてつもない覚悟がいるとはわかっていた。

人は何のために生きる——。私は幸福を求める。罪とはなんだ。

罪単体ならば罪にあらず。私は今、罪人ではない。裁かれてこそその罪、罪人だ。そうだ！ 私は裁かれない道を選ぼう！ ささやかな幸せを脅かすものこそが悪ではないか。罪ではなく悪こそ裁かれるべきだ。私はすでに死んだ男の今後あるかもしれない幸せを奪った。三人でだ。しかしそれは、元を正せばあの男が私たちを脅迫したことへの当然の報いだ。私たちの平穏をおびやかそうとしたのだから——。それこそ悪。法など気休めだ。法のような生ぬるいものでは禍根を残す。法はもはや形骸。悪は徹底的に断罪されるべきなのだ。それこそが真の平和。戦争は極点。平穏を求め、結果、殺害に加担したとなるのなら、私は徹底的に安息を求めよう。自国の平和を求めるために人を殺すのは罪ではなく、自分個人の安心を得るために殺すとなぜ罪として裁かれるのだ。平和に生活を送る過程で起こった個人の戦争ではないか。私は強盗殺人をしたのではない、誘拐殺人をしたのではない。ただ平穏を求めただけだ！ 戦勝国が発展を見せるのに、私や竹内さんのような勝者がなぜ公僕と法に脅え、牢獄で改悛の生活をしなければいけないのだ。私は断じて

認めない、殺人は悪いことだと盲目的に教え込み、強盗に殺されれば運が悪かったといって慰めるだけの風潮を。外国ではテリトリーに踏みいると射殺される。これこそ当然の権利ではないか。対話では解決しない。侵入者の包丁を奪う正当防衛ではなく、武器を手にした断罪が必要なのだ。

小菅は、はつと自分の目つきが鋭くなっているのに気づいた。木田原さんが畏怖を思わせるような眼差しを送っていたからだ。

「なにか、やっぱり私らは窮地に立たされてるってことか？ ひどく恐ろしく感じる表情だったぞ……。その、大丈夫か？」

「え、ええ、大丈夫です。ちょっと考えごとをしてまして……。まあさっきの罪の意識に関係したようなことをですよ」

「そうかそうか、私はよくわからんからそうというのは竹内とやってくれ」

「いえ、それをいうと警戒……。あ、なんでもありません。とりあえず竹内さんとその話をするつもりはないので」

「まあなんでもいいさ。捕まらなければね」

「ええ、きつと大丈夫ですよ」

じつと木田原さんの眼を見ていう。

「そうか……。それにしてもあいつは遅いな。いつまで待たせる気なんだ」

「今は重要なところですからね、警察かそれ以外かきつと見極めようとしているでしょう。しかしすごいですよ。私は尾行されたことがないのでどういう心境になるのかわかりませんが、逆に待ち伏せするようなことをいつていましたよ。相手はさぞ驚くでしょうねえ」

「まあ、あいつは詐欺師だからな。人を欺くことにはたけているさ」
水をくいと飲む。

「そうそう、あの人の奥さんは旦那が詐欺師だということを知らるんですか？」

「ああ、不思議とね。真面目な嫁だとは聞いているが、なんで上手

くいつてるんだろつなあ」

「ということは良心の呵責もないということでしょうね。どうやればそうなるのか知りたくなりますよ」

「ん？ そうだな、それをすれば私も苦しまずに今後の生活を送れそうだよ。笑い話にもできるかもなあ」

「木田原さん、笑い話にするのは絶対によしてくださいよ」

「ああ、わかってるって」

そういつて一息ついたときに、ようやく竹内さんが現れた。堂々としていてなにか収穫でもあったのだろうか、口元も緩んでいた。

「待たせたな」

遅いんだよ、と木田原さん。

「どうだったんですか？ やはり刑事でしたか？」

「ああ、どうやらそうらしい。探偵にはない空気があった。若いくせにね」

「ちよつと重要な質問があるのですが――」

レモンティーを注文し、黙って頷いた。

「どのくらい竹内さんに進行中の犯罪があるのかということですよ。もしかするとその刑事は別件の捜査かもしれないじゃないですか。

そうなると私の考える計画を実行する必要があります。どうなんです？ 他に心当たりはありますか？」

「ん、どうだろうな、数自体は少ないが。それに前にもなんとかしよつ引かれてるし、今まで見てきた刑事のタイプから考えると……、しかし捜査一課も二課もたいして質は変わらないかもしれないな。

張り込みまでして逮捕に踏み切らないところを見ると、もしかしたら別件かもしれない。たんに証拠不十分なだけかもしれないが、そこんとは警察じゃないからな、絶対にこうだとはいいきれないね」

「ということは最悪の場合を考えていたほうがいいということですね。つかぬことを訊きますが、もしあなたが逮捕された場合、私たちのことはどうすると考えているのです？ もちろん、いわないといつても、それはこの場だけのこともかもしれませんが、それでも基

本の姿勢を教えて欲しいのですよ。刑事の詰問には慣れていても、ふとしたはずみで吐くことだってあり得ますよね？」

「なぜそんなことを訊く？」

「あなたの言葉が必要だからです」

「なにに」

「計画にです」

「わからないといったらどうなる」

「どちらにせよ殺人課の刑事ということなら実行しますが、実のところ、『いう』『いわない』というのは私の覚悟の形が変わるだけのことです」

「なるほどね」

「どちらですか？」

「いわなくても、私が逮捕されれば交友範囲も洗われるだろう。足跡を調べて現場からは複数犯だと見ているだろうしね。時期はズレるだろうが、しかしもしかすると同時期に逮捕ということもあり得る」

「それだと、なおさら危機です」

「かもしれないな」

「これからどうされるのですか？」

「仕事もできそうにないし、家に帰るさ。そして様子を見守る」

「それが一番よさそうですね」

「そうとも」

レモンを浮かせたティーカップを傾ける。

「ただ、逮捕されるときは逃げるだけ逃げて連絡をいれるだけの時間を稼ぐ。なんとしても連絡は木田原、お前にいれる。そこからは二人の好きにするといい」

「ありがとうございます。ただ――」

「ああ、履歴は消すし、使用していたことも感づかれないようにする。しかし、調べればわかることだから、腹はくくっていたほうがよさそうだな」

「そのようですね」とくに私は――。小菅は思った。

「さて、それじゃあ失礼するよ」

そして小菅たちの代金まで置いてさつさとドアから出ていった。

見ると、地面には光が注いでいる。雨はあがったようだった。

「なあ、捕まる可能性が高いってことだよな？」

「わかりませんよそんなこと」

「自首したほうが罪が軽くなるんだろう？」

「すでに事件になってますしね、大した変わりはないんじゃないですか？ 捕まらないかもしれないのに無理に出頭する必要なんてないですよ」

その声が少し大きかったせいで、中年の店員が訝しげな眼差しを送ってきた。

「私たちも出たほうがよさそうですね、長居してこんな話ばかりしていると怪しまれてずつと聞かれるかもしれません」

それから小菅たちは途中まで一緒に歩いた。傘を地面にこつこつと軽く杖代わりにでもするかのようにあてながら小石をはじく。話すことはなにもなかった。別れの挨拶だけをして足をとめると嘆息した。

「家内が死んで、すぐまた問題発生だ。いったい安息はどこにあるんだ」

空を仰ぐ。雨を降りつくした雲も安息を求めてどこかへ向かっているような気がした。

小菅は少し離れた場所にあるホームセンターへタクシーで向かった。計画に必要な道具をそろえるためだ。

もう、竹内さんがなんの容疑で刑事に尾行されているのかということは実際私にはどうでもよかった。とにかく、彼が一番の不安材料なのだ。不安は消し去らなければいけない。彼が私に対して宣戦布告した訳ではないけれど、しかし、彼を放置することは確実に安息へととはつながらず、現状維持では危機感に苛まれ、やがては牢獄

にいくことになるかもしれないのだから、やはり、幸福を求めるために犠牲は必要だった。いや、彼は私を巻き込んだ悪だ。断罪の対象なのだ。これは利己的な欲求のための犠牲では断じてない――。

彼は浅はかだったのだ。確かに私は殺害の提案はした。しかし、それは平穩のためだといつても、計画的になされなければいけないことだ。あれは単なる喧嘩だったはずだ。結果的に死んでしまったという偶然などあつてはいけないのだ。今夜行うことは、すべて彼の短慮が生んだ当然の結末。私はすでに覚悟した。これからの幸福に満ちるであろう生活のために。

タクシーから降りるときに、小菅はわざと傘を車内に残した。竹内さんの婦人から借りたものだけれど、あの男性用の傘を使う者はもうすぐいなくなるのだから、べつに大した行為でもないような気がしたのだった。

殺人事件があつた場合、テレビのニュースではときおり、ホームセンターで凶器を購入したという報道がされる。凶器が証拠として残れば、犯人の行動範囲をある程度推測可能ということだ。凶器は現場に残さないし、店員に怪しまれる購入の仕方――、つまり包丁一本だけで買うというような真似もするつもりはなかった。といつても、小菅の考えていた凶器は包丁ではない。それは刺せば血が噴き出るし、血が出ないようにするには差し込んだまま証拠として残さなければいけないからだ。ロープで窒息させる時間に暴れられるわけにもいかない。それを考えると一撃で絶命せしめる威力のある鈍器が望ましかった。

小菅は大小様々のハンマーを手にとり左手に軽く叩きつける。ぺちぺちと軽い音がする。小さいものでは、簡単に人を殺せそうになった。竹内さんの家には夫人がいるのだ。襲撃の際に叫ばれるわけにはいかない。夫人まで殺害するつもりはなかった。ふと、通り魔を装うのもいいかもしれないと考えたけれど、彼が何者かに張り込まれている今、外で殺すのはさらに危険が付きまとうことだと考え、部屋で殺すと決めた。もちろん、侵入の際にだれにも発見され

ないようにする。とにかく、猶予はない。今晚やらなければいけないのだ。小菅は焦燥に駆られながらも、冷静に一つ一つ品物を見て回った。

軍手、音の出なさそうなスニーカー。地下足袋は怪しまれる。それと頑丈なロープに打面が拳ほどある全体的に丸みを帯びたハンマー。重量は約二キログラム。初めてのことでけれど、これなら十分な殺傷力があると考えた。最悪の場合は小型ナイフで刺す。ロープは、竹内さんは詐欺師なのだから、と勝手に家屋には警備システムがあると前提しての、二階から侵入するための道具だ。小菅はこれで抜かりはないと考えた。確か、二階の窓は雨が降っていたときでも開いていた。冷房はしていないのだから、夜は忍び込みやすいはずなのだ。

小菅の殺害手順はこうだ。深夜二時頃にまず、張り込みに注意しながら人目を確実に避けてベランダ側に侵入する。警備システムがなく、一階が開いていればそこから家屋へと入り、開いていなければロープを使用する。部屋に侵入後は風邪用のマスク、帽子を装着し、竹内さんを見つけ、タオルで口を塞ぐと同時に頭部をハンマーで破壊。抵抗されれば数度殴りつけ、腕をとられた場合は反対側でナイフを使う。その際の返り血は少量だろう。絶命確認後、速やかにロープを回収して一階から脱出。これでなにも問題はないだろう。あとは自然を装って帰るだけだ。

帰りのタクシーで簡単に手順を決め、帰宅後は入念にイメージでくり返し、さらに計画にミスがないかも確認した。問題はすべての窓が閉じられている場合だった。開けるのには割らなければならず、焼き割りでも小さな音が出る。それに、焼き割りだとバーナーがいるし、そんな道具までそろえるとなると、なにかと足がつく確率が高くなる。殺人事件になるのだから――。開いてない場合は一日の猶予だ。尾行があり、逮捕が迫っているかもしれない現状では本来

与えてはいけない猶予だけれど、竹内さんを欺いて窓を開けさせておく必要がある。なんとしても窓を割るような目立つ行為は慎まなければいけなかった。

玄関から音がする。娘が帰ってきたのだろう。小菅は煙草を吸い続け、娘が居間に入ってきてても声をかけずに目を閉じたまま深く煙を吐いた。ただいま、と言あつたけれど、ああ、という返事以外なにも話すことができなかった。計画を練って、実行する時間が近づくに連れ緊張が増す。ときには恐怖が押し寄せ、くだらない思っても罪の意識の波もくる。そのたびに幸福を思い、決意をさらに強いものへと変えた。

ふと、目の前を歩いた娘がハンマーや軍手に興味をいだいたようだった。その視線に気づいた瞬間、しまったという気分になる。しかしあからさまにハンマーを隠すわけにもいかなかった。

「ねえ……」

当然ともいえる質問が始まる。この返答を間違えると怪しまれるだろう。

「それどうしたの？ なにか作るの？」

「ん、ああこれか。簡単に神棚でも作ろうかと思ってね」

「ふうん、金づちだけで？ ずいぶん大きいけど」

「ああ、だから作れないということに気づいたんだ。適当な材料もなかったんだよ。馬鹿な父さんだ」

「そうね、てつきり護身用かと思っちゃった」

なぜそんな言葉が出るのだろう。あくまでも、あくまでも呼吸を乱さず冷静に返事をする。

「はは、お前は野蛮なんだよ。いったい父さんがだれに襲われるというんだ、恨みを買うようなことなんてないのに」

「殴られてた……」

「え？」

「顔腫らして眠ってた……。喧嘩したんでしょ？」

まったく、なんという娘だろう。まるで母親のようになんでも小

菅の行動を見抜いているような気がする。

「それはまあ酒の勢いさ。だれでもいいから喧嘩したくなっただけで、相手はどこのだれかもわからないよ。それに、顔を見たんだろう？ 恨みを買うような結果に終わったと思うか？ 完全に打ちのめされたんだからな。はは」

「じゃあ復讐するんだ」

「おい、いい加減にしないか、だれも殴ったりするわけないだろう！」

とうとう感情的に叫んでしまった。今の娘は必要以上に鋭すぎる。怒鳴ったことで確信したかもしれないけれど、まさか殺人を企てるとまではさすがに思わないだろう。

「いいか、酒の勢いで喧嘩はした。だが、もうスッキリしたんだよ。勝ち負け関係なくね。このハンマーは母さんの骨を砕きたかっただけなんだ。海にでも撒こうと思ったんだよ。それをいうとお前は怒るだろう？ なんでそんなことするの、って。だから嘘をついたことは謝ろう。そして砕くこともしないさ。ちょっと魔がさした、それだけだ」

いい加減ですぐにバレるような、そして人格を疑われかねないような嘘だ。

「なによそれ、砕くだなんて！」

「しないっていったらう！ 忘れろ。それにもうすぐ夕食だ、買い物はいいのか？ 明日から店も開けるんだ。今日はなにもいわないが、テスト期間で学校も早く終わるんだったな。明日は寄り道せずもう少し早く帰ってきなさい。それから、絵は続けるといい」

しばらくの沈黙のあと、娘は買い物へ行ってくるといって静かに家を出た。嘘をつくのは難しい、小菅はそう思い、道具をまとめて隠した。

今夜決行なのだ。怪しまれるような不備があつてはいけない。改めて部屋を見回す。安心を確認し、一本、煙をくゆらせた。今日という日がすべての境界になるのだ。力をいれて壁を見つめる。煙は

ただ上に向かうだけだった。

6

夜、娘が二階へいくと、小菅は静かに赤と灰がかった小さな火を見つめる。遠くの車の音が聴こえるまでに闇はすべての自然を眠らせた。

静寂と小菅の心がシンクロしているように思う。それは呼吸さえさせないほどの冷静さだった。血流さえ、体温さえなくすほどの冷静さだ。今の私は人であって人でない。幸福を求めるためには人であってはいけなときがある。それが今だ。人として幸福を求めるのに、人であってはいけない——、おかしい話だ、と小菅は自嘲した。しかし、まともな精神ではこの先にある幸福を得られないのだから、それは仕方ないことなのかもしれないなかった。

自己暗示をかける。盲目的に信じ込ませる。余計な理屈は除外する。ただ安息のある幸福のために——。

空には星が整列して光っていた。黒い壁に針を刺したような小さな穴がたくさん開いているみたいだと思った。風が腕をつかむ。早く殺ろうと誘うかのように。

丸い月を見た途端、胸に時限爆弾が設置されているような心地になった。爆発するのは失敗したときだろう。小菅は歩きながら深呼吸を繰り返して、冷静になろうと努めた。道具はすべて小さなバツクパックにいれて肩にかけている。だれが見ても凶器が入っているなんてことは思わないはずで、しかしだれともすれ違うことなく竹内さんの家に到着した。

明かりはすべて消えている。近くを歩いて回ってみても、張り込みらしき者はいなかった。よし——、小菅は心の中で呟く。

薄い手袋を装着し、門扉をそっと開ける。よく手入れしているのだろうか、音はなかった。

ひとたび入れば、外からは不審者がいるということがわからない構造になっていた。軽く触れた塀は冷たく、ざらつきが指に不快感を与えた。歩きたびに砂利の音はあった。一、二、三。ゆっくりとつま先からおろし踵をつける。一番近くにあった出窓を確認すると鍵は閉まっていた。他の窓はすべて雨戸で閉ざされている。それを開ければ、こちらに注意が向くほどの音が出るだろう。二階をうかがうと、やはり開いていた。部屋に風を取り込んでいるのだろう。今夜の冷気は少し心地いい。小菅はロープを取り出し、二度ほど引っ張って強度の確認をする。実際侵入を試みると、ロープは姿勢の安定を保つ程度で、竹内さんの家に忍び込むのにそれほど重要でないことがわかった。塀に足をかけて簡単に登ることができたのだ。ベランダに上り身をかがめ、周囲をうかがう。なんの気配もない本当に静かな夜だった。

私はこれから人を殺す――。ためらいを捨て、覚悟をより強固なものとして窓をそつと開けた。また、音はなかった。

靴を脱ぎ、鞆にいれて慎重に数歩進める。箆笥や収納ボックスの置かれている部屋で、眠っているものはいない。闇に目を慣らしてから鞆を開く。マスクをし、タオルを腕にまき、ハンマーを取り出し少し開いていたドアを完全にゆっくりと開けた。握りしめたゴムのグリップは安堵の柔らかさだった。

暗い廊下に出、二つのドアを確認後、耳を澄ます。テレビやラジオがついている様子はなく、聞こえるのは小菅の生ぬるい息遣いだけだった。ドアだけではどちらが竹内さんの部屋かはわからず、かといって、夫婦が別々に寝ているという確証もない。彼らには子があつて、その子の部屋という可能性もあった。それを考えたところで、とにかく開けなければなにも進まないのだ、とハンマーを左手に持ち変え手前のドアノブに手を伸ばした。そつと回すと、ほんの少しだけ金属的な音がした。ゆっくり開けると冷房が静かに唸っていることに気づいた。部屋は子供部屋という造りではなかった。奥には一人、ベッドに寝ている人間がいる。竹内さんか夫人のどちら

かだ、と小菅はベッドの大きさから確信し、枕元へ歩み寄る。窓明かりで他より明るく見えたのは、腹まで薄い布団をかけて静かに寝息を立てている竹内さんだった。これで余計な犠牲をはらわずに済む、と安心しながらもタイミングをうかがう。震えはない。幸福を思う心がすべてに優ったのだろう。一瞬だ、一瞬で仕留める！　そう強く念じ、竹内さんの胸元が沈んだ刹那、左手のタオルで口元を塞ぎ、右手で一撃。うっ、という声の呻きと、土鍋を割ったような手ごたえがあった。液体が光をかすかに反射させ流れている。穴の開いた鍋から汁や具が漏れているように思えた。返り血を浴びることはなく、しばらく様子を見守る。ただ血だけがあふれ、他の体液らしきものも混じって見えた。身体は微動だにしない。死んでいてくれ、と小菅は念じた。これ以上余計なことはしたくない、死んでくれてさえいいのだ。小菅はその場で血の流れをじっと見ていた。何分かはわからなかったけれど長かったはずだ。ベッドのほとんどが赤黒く染まるほどそこにいたのだから。

よし、よし！　あわてて飛び出したい気持ちを抑え、さらに慎重に気配をうかがった。だれも、だれもだ！　だれも起きてはこない！　道具を鞆に急いでしまい、ベランダに出る。屋内から一階にいることはリスクが高いと判断した。辺りは静まったままだ。足が震えているせいか、おりののに手間取ったけれど、すべては完璧だった。走って帰りたい衝動を抑え、意識して一步一步地面を力を入れて踏みつけるように歩く。この夜、家までの道にだれとも出会うことがなかった。小菅は、まるで天が味方してくれたみたいだと思わずにいらなかった。

シャワーはやめ、すぐに風呂を沸かし、高揚を抑えられないまま入浴する。湯船に潜り、そこでようやく叫んだ。解き放たれた腐った魂のような泡をもてあそんだ。新しい酸素を取り入れると顔を平手でなんども叩き、やがて心底安堵した。

「これで、ようやく安らかな生活に戻る。これで――」

ここ数日、煩悶とさせられることばかりだった。家内が死に、喧嘩に巻き込まれ、殺人事件になり、そして自分自身が殺人者ともなった。それらすべてをもう、リセットできる。この湯が洗い流してくれる。これからは新しい生活のみを考えればいいのだ。

浴槽から出、湯をなんども頭からかぶった。力強く浴びるたびに、心に残った穢れのカスも落ちていくような気がした。

居間で一人、祝杯をあげる。いつもと変わらない冷たいビールだけれど、ことさら美味かった。

白い泡は雲で下の黄色は黄昏だ。私はすべてを飲み干し黎明を迎える。私は私自身の戦争に勝利した！あとは少しのあいだけだ。少しか捜査の進展に不安をいだけばいい。それは逮捕にはつながらない、今まで踏み殺した蟻の仲間が復讐しにきたらどうするか、と考えるのと同じようなくくだらない不安だ。

明日、朝にでも婦人は死体を見つけるだろう。もしかすると、この街で立て続けに二件の殺人事件が起きたということで、ニュースで大きく取り上げられるかもしれない。そしてマスコミは二つの事件の関連性を追及するだろう。しかし、状況が明らかに違う二つの事件なのだからきっと、案ずることもないのだと思う。最初の事件に関連しての仲間割れだと思っただろうか。

そのとき、次第に不安が押し寄せてきた。

そうだ、明らかに竹内さんのみを狙った犯行だとわかるではないか。部屋も荒らさずなにも物色せず、これでは怨恨や人間関係上の凶行と思われても仕方がない。そうするとどうだ、私に捜査は及ぶだろうか、彼の生業は詐欺師だと聞いた。ならば恨みも多く買っているだろう。それでも私に対してある程度の尋問はあるかもしれない。それを乗り越えるのは簡単だ。捜査はきつと私だけではない。木田原さんへもその手は伸びるだろう。彼は……。

小菅はゆつくりと顔をあげた。

彼もまた、不安要素の一つだ。私の進むべき道を塞ぐしおれた独活になるだろう。殺さねばならない。しかし、これ以上死者を出せ

ば私への疑いも増えるかもしれない。ここはしばらく静観すべきなのか。明日、仕事の合間に少し話をしなければいけない、小菅は考えた。そして彼に明らかな動揺があれば、殺害もいとわないと。

小菅は布団の中で眠れないでいた。ときおり、布団の柔らかな重さが胸を押し潰しているような錯覚に陥り、なんども身体を起こし、頭を痛くなるほどかいた。暗闇に竹内さんの顔が浮かんでいるような気がして恐怖を感じ、目を閉じても闇に取り込まれるような感覚がある。

この状態が続けば気が狂うかもしれない、小菅は腕に爪を立て、皮膚をえぐる痛みでなんとか気を紛らわす。仕事など始められる心境ではなかった。娘にはあいつたけれど、憂いや懸念が次々に沸き出す現状ではやはり無理だ。仕入れの都合がどうのといった誤魔化そうと考えた。

上半身を起こしたまま窓を見つめて半時ほど、外が淡く姿を変え始めた。煙草に手を伸ばし、火をつける。燃える赤に焦点を合わせた。竹内さんの家に火をつけようとも一瞬思ったけれど、焦燥に駆られての行為になればなるほどどこかに穴が開くはずだと考え、なにもせずじつと待つのだとなんともいい聞かせた。

「この時間は試練の時だ。将棋で相手の手を待たずに自分の駒を連続で動かす者はいない。私は安穩への一手を指したのだ」

新聞配達らしきバイクが表を走り、近所の犬が吠えた。新聞をとりに表へ出る。青白い世界を流れる澄んだ空気。なんとも味わっている自分だけの朝という感覚、それをこの先も失う気はなかった。

テレビをつけ新聞を冷静に読めるよう軽く訓練していると、やがて娘の目覚まし時計が鳴り、おりてきた。

「おはよう、仕入れの都合でね、仕事はまだ先になりそうだからまだ寝ていてもいいぞ」

「そうなの？ どうしようかな、起きちゃったし」

「好きにしたらいいさ」

「お父さんは今日出かけるの？」

娘の顔を少し見る。

「今日もお昼前には戻るんだけど、必要ならお弁当作っちゃおうかなって。だって、テストも今日で終わりだし、これからはお母さんいないんだし、この前はなんとかできたけど、今までのお手伝いじやなくてあたしがずっと全部作らなくちゃいけないでしょ？　だから練習にもなると思ったの」

「ああそうか、じゃあ作ってたほうがいいかもな」

「そうするね。うんとおいしいの作るよ！」

笑顔でいう。小菅は少し笑い、この生活だ、この生活を続けるのだ、と目を閉じて運命と自分の心のなにかに哀願した。

「ここに置いとくからね」と弁当をテーブルに置いたらしかった。

ああ、と素っ気ない返事をしながらも昼が少し待ち遠しく、そして、娘と一緒に食べたいものだ、と思った。

娘が学校へ行きしばらくすると、木田原さんに会いに外へ出た。

通りの人の目がすべて自分に向いているような気がし、返り血でもついているのかと不安になった。

もしかすると実はみんな殺人事件の犯人だということを知っていて、私だけが捕まらない気ではないかというような錯覚さえ生まれる。なぜか、いつものように堂々と道を歩けなかった。人目を退け細い道ばかり歩く。

これでは駄目だ、私は、私は間違っていない！　そうやって奮起し、あえて人通りの多い場所を経由した。目をいっぱいに見開き歯を噛み締め、視線が交わった者に対してはいちいち「どうだ！」と怒鳴りつけたくさえた。

ああ私は狂ってしまったのか、とふと冷静になる。早く木田原さんに会わなくては。そう至り、走った。今の心を静めるにはそれしかなかった。走ったときの街の景色は、絵の具を何色も垂れ流しただけのオブジェだった。

木田原さんの家はいつもと変わらずひっそりとしていて、ベルを鳴らし名乗ると家着のまますぐに出てきた。

「な、なにかあったのか？」

「ここではなんですから、どこか別の場所で」

「ああ、すぐに着替えてくる、ちよつと待っていてくれ」

煙草を吸おうとポケットに手をいれたとき、ふと遠くにスーツ姿の男が二人、視界に入った。動かず、こちらをうかがっているようにも見える。まさか……。嫌な予感がしつつも、平静を装い一本くわえる。

朝早くに男が二人落ちあいどこかへいこうとする――、これだけで十分怪しまれる要素はあるようにも思えた。遠くに見える二人がもし刑事だとするのなら、ここから私たちがどう動こうか、ある程度の疑念はもともっているのだろうから、やるべきことはその疑念に確信を与えないことだった。

「待たせたな」

木田原さんが出てくるとすぐ、「見ないでください、右遠くに刑事らしき二人組みがいます」としらせた。彼は一瞬動きをとめ、焦りをにじませたけれど、すぐに小菅が一步後ろをついてくるように促し、不審な動きをしないように忠告した。

「なあ、なにかあったのか？」

不安そうな声色だ。

「広場がいい、公園かどこか、人が一定の距離近づかないような場所が」

「おい、一体どうしたんだ」

「黙ってついて来てください、とにかく今は後ろを撒かないと」

「バレたのか……？」

それには答えず黙々と前だけを見て歩いた。曲がれる場所があればとにかく曲がり、二十分程度木田原さんの不安そうな小言を聞きながらとにかく歩いて回った。

「撒いたところで変わりなんてないのかもしれませんが、このまま

もう少し歩きます。そしていいですか、今からいうことに対して歩調を変えることは許しません。きっと驚くでしょう、しかし、そのままついて歩いてください、いいですね」

「あ、ああ。いったいなんなんだ、なにがあったんだよ」

一呼吸おいてじつと前を見ている。

「私は、竹内さんを殺しました」

一歩後ろを歩く木田原さんの表情はわからない。少しの沈黙が続き、「う、嘘だろ？」とあつた。笑っているのだろうか。

「嘘かどうか、今までの状況を考えればわかると思います。とにかく、私たちにとって彼は危険な存在になったんです。というより、彼が生きていると私たちも捕まる。だから殺しました。しかし、私は少し浅はかでした。殺したのは彼一人なのです。家も荒らさず夫人は無事、これだと怨恨の線がかなり高くなるでしょう。きっと私たちも捜査の対象になる。さっきの二人は多分刑事だと思えますよ。さて、これからの行動を公園で話します。今はこの事実を受け入れて打ち克つ精神を作ってください」

「そんな、まさか……」

「黙って歩くんです」

「あんた、一体なにやったかわかっているのか」

「すでに喧嘩で人を殺しました。共犯として私たちが捕まるのを防ぐためです。あなたは捕まりたいのですか？ それに、今回も前回も、あなたは直接関与していないのですから、とにかく落ち着いてください」

「ああくそ……。知らん、私は知らんぞ……」

「そうです、それでいいんです。そのまま知らないといい聞かせるのが一番だ」

それからしばらく黙って歩いた。まだ昼前にもなっていないというのに太陽は、なにか一言でも話させようと力強く私たちをじりじりと焼いているようだった。

公園に入り、遊歩道を歩く。

「このまま歩きましょうか。座らないほうがいいかもしれない」

回りには犬にボールをくわえさせて喜ぶカップルや、カメラを胸にぶら下げ帽子で顔をあおぐ老人や、掃除係りの中年女性がいた。

私が求めているのは好きに写真を撮れるような平穏だ。木田原さんを殺害したことできつと近づけただろう。困難は人によってもたらされる。子にパズルを与える親のような表情でだ。私はこれからくる困難のすべてを克服してやる。私自身の理想のために。

「木田原さん、一ついっておきます。これは命令でも脅迫でもなんでもありません。切望です。だから勘違いしないでください。もし、もし罪の意識に耐えられなくなったときは絶対に私を訪ねてください。できればだれにも見られない深夜がいい。勝手に警察に出頭なとすれば、いいですか、そこで得られるのは一時の安息です。吐露したという安堵です。それを味わったあと、そこから始まるのは犯罪者としての生活です。刑事はあなたに甘い言葉をかけるでしょう。すべて喋れば罪は軽くしてやるとね。しかしそれは刑事の常套手段です。犯罪者というレッテルがはがれるわけではありません。犯罪者になるかもしれないという恐怖はあるでしょう、しかし、私が万事うまくやります。あなたを犯罪者にさせはしませんよ。だから、いいですね、絶対に私を訪ねてください。勝手な行動はすべてをつぶします。刑事がたずねてきて少しの演技もできないというのなら、風邪を引くことをお勧めしますよ。ほんとうの病人になるんです。髪を乱し、床に伏せて風呂にも入らず、返答のたびに咳き込めば、刑事も微妙な顔色をうかがうことなんてできませんよ。まあ、欺く自信がない場合の、あくまで怪しまれないようにする最終手段ですが覚えておいてください。いいですね、勝手な行動は慎んでください。私たちの未来のためにも」

小菅は、もし木田原さんが私を訪ねることになった場合、躊躇することなく殺さなければならないと考えていた。それが最良の手段だと思った。

「ああ……、わかった……。ところであいつの近所の様子は今どう

なってるんだ？ 大変な騒ぎじゃないのか？」

「きつとそうでしょうね。それはそうと、煙草吸わないんですか？
忘れたのなら一本どうです」

そういつて差し出す。

「ああ、もううよ」

火をつけながら、木田原さんの目の奥を見つめた。動揺しているのか、光がちらちらと泳いでいる。

「私を信用してください。それに、いまさらあとには引けないんですよ」

この台詞、世界中でいったいどれだけの人間が口にしたのかと考えると、小菅は不意に微笑してしまった。

「もちろんだとも、もうあんたしかいないんだ、頼れるのは。一人だと喋っていたかもしれない。私だってわかっているさ、犯罪者になるのは真つ平ご免だ。でもな、なんだか事が勝手に運ばれてるような気がしてな、私はいつたいなんなのだろうって思ったんだよ。なあ！ あんたは私のことも思ってくれてるんだよな！」

「ええ、もちろんです。だから気を静めて、ほら。苛つく気持ちはよくわかりますよ、こんな状況ですから。でも大丈夫です、任せてください。私だって同じ気持ちなのですから」

背中を軽く叩き、落ち着かせる。彼が愚鈍で心底助かった、小菅はそうほくそえんだ。

「ところで、そういえば木田原さんはなにか仕事されてるのですか？ 今の今まで聞く機会にも恵まれずにこうやって一緒に歩いてはいますが、もしさしさわりがなければ教えてもらえませんか」

「ああ、仕事は辞めたよ。あと三年で定年だったんだがな、まあいろいろあるんだ。今は退職金で生活しているし、これで年金まで持つはずだから安心していい」

「そうですか、それはよかった。私はまだまだやることが多くて大変ですよ」

木田原さんを一瞥し、ふうと煙を吐く。

「まあこんなところですかね、とりあえずは。念のため携帯の番号を教えてもらえませんか？ 私もこれから携帯ってやつを初めて持とうと思いましてね、あつたほうが二人のためにもなる」

「そ、そうだな、なにかメモでもあれば……」

「大丈夫です、覚えますよ。仕事柄なのかよくわかりませんが番号を覚えるのは得意なんです」

そういつて番号を聞き、それからその場で回りを見、尾行がないことを確認すると「この際、風邪でも引いてみたらどうです」と笑い、別れた。

短くなつた煙草を捨てようと灰皿を探し、ベンチの横に添えられてあつた吸殻入れに落とす。空き缶が吸殻入れの上に乗せられていたので、ついでに灰皿の隣に設置されてあつたごみ箱に落とした。軽い音が一つ。それは竹内さんの頭部を殴つたものとはずいぶんかけ離れたものだった。

公園を出、駅の近くにある携帯電話ショップで話を聞くと、化粧の濃い女性店員が世間知らずの田舎者ともいいたげな表情で身分証がいるといった。面倒に思いながらも一度帰宅すると、娘が出迎えてくれた。

「どこいつてたの？」

「ちよつと携帯電話を持とうと思ってね、でも身分証がいるんだな。どうだ、お前も欲しがってたろう、これからは二人で生活する訳だし、あつたほうが便利かもしれないからな。なんだったら一緒に買いに行かないか？」

「え、ほんと！　じゃあすぐ用意するね、ありがとう！」

そういうなり、階段を軽やかにのぼって行つた。

「そうだー！　お弁当作つたやつ食べちゃってね、あたしはもう食べたからっ」

大きな声が届いた。小菅は思う。これだ、こういつたなんでもない会話にある充実と幸福、それが私の望みなのだ。平穩という直線を少し揺らす安らかな波、ほんのちよつとでいい、恵みの雫が静か

な水面に落ちた音、それがあれば満足なのだ。これ以上望まない。今、私はこの幸福を確実のものにするための戦争をしているのだ。完全な勝利はきつとすぐそこにあるだろう。

ちやぶ台に置いた弁当のフタを開ける。玉子焼きやコロッケ、梅干しとどこにでもあるような色彩だ。味だつて他と大差ないだろう。下手をすれば家内が作っていたものより落ちていることだつてあるかもしれない。目玉商品にならなくても、家族の作った料理を、たとえ冷めていたとしても食べられればそれでよかった。

一つ一つ口にいれる。箸を進めるうちに夕飯が楽しみになった。おりてきた娘が感想を聞いた気に冷たい麦茶をそつと出す。

「ありがとう、おいしいじゃないかこの弁当は。これならこの先の商売も安泰だな」

「ほんと？ うれしいつ。ちゃんと頑張るからね」

そつというつと、いつのまにか居間の角においてあつた遺影の前に、家内のご飯を出した。初めてのことだ。畳に置いたままの遺影を前に、じつと目を閉じ両手を合わせている。箸を置いて小菅もそつと隣に行き、正座して同じように拝んだ。深く家内を想い、まぶたの奥でようやく覚悟が決まつたような気がして目を開けた。

「早く……仏壇も買わないといけないな。今日ついでに買おうか。そのほうが母さんも安心できるだろう」

娘が少し顔を見てうつむいた。

「ありがとう……」

「……まあなんだ、今までのことは忘れてくれ。これからは新しくやり直さないといけないんだから」

「わかつてる。でもありがとう」

「ああ、ああ、それ以上なにもいうな。さあ、わかつたらさつと片付けて買い物に行こうか」

「うん……。あのね、お母さんのこと、簡単に忘れるなんてできないんだからね」

「え？ なにをいつてゐるんだ、父さんだつて同じだよ。何年経とう

が忘れやしないさ」

「絶対だよ」

深い嘆息のあとに「ああ」と返事をした。忘れるものか。

先に外に出ると、青い空に浮かんだ白い魂のような太陽が、朝よりも強い光を差し向けてきた。懺悔でもしろといわんばかりの熱気のせいで自身が人を殺したということを思いだす。額の流れ出した汗を手でぬぐい、幸福はすぐそこにあるのだ、太陽の熱はいつもとなに一つ変わらないのだ、と思うことにした。

ふと遠くに少年の姿を見た。娘に惚れているであろう例の少年だ。名前はすっかり忘れてしまった。お気に入りの鞆をさげてドアの鍵を閉める娘にいう。

「ほら、なんていったっけな、毎朝くるあの少年」

「山下君？」

「ああ、そうだったっけ？ その彼が向こうにいるが」

首を少し動かして示した。

「え？ なんだろう。ちょっと待っててね、話してくるから」

そういつて駆け足で彼の元へ向かった。彼の表情が緩んだのがわかる。以前、娘を頼む、というようなことをいった気もするけれど、まだまだ早いな、と思いなおした。

数分経つても戻ってくる気配はなく、手持ちぶさたでまた空を見る。煙草でも吸って空に雲を足してやりたくなるほどの青さだ。一本じゃ足りないか、と少し笑う。その時、後ろから名前を呼ばれた。振り向くと三人の男がいかめしい表情をしていた。刑事だと思った。そのうちの一人が、話を聞きたいので署まで同行してほしいといってきた。その言葉を放った刑事の目をじっと見る。死人のような目だと思われたかもしれない。読みかけの本を持って来ればよかったと思った。首を向けると娘はまだ少年と話していたけれど、少年が穏やかではないと気づいたようで娘にしらせてくれた。小菅は娘をしばらく見つめてから刑事にゆっくり頷いた。無言の自白だった。

娘はこの先どうやって生活するだろうか、絵はやめてしまわないだろうか。家内の兄弟は嫌なやつだけれど、やはり親戚しかないのだと思った。

これから私は、きっと刑務所で暮らすことになる。罪を犯した者が、その罪を刑に服して償う場所だ。そこに幸福はあるのだろうか。たとえ罪苦が待っていようと、私は幸福を探すだろう。もはや安堵も不安も必要ない。ただ自分の在る場所で幸せを探そう。平穩が壁の中にもあるのなら、人を殺さずとも私が向かうべき場所はそこだったのかもしれない。だれもが行くべき場所なのだ。いや、どこだろうと、個人の戦争の敗者、勝者だろうと変わりはない。全ての人は生まれたときから囚われているのだ。家内はあの世で笑っているだろう。今まで必死だった自分が滑稽に思えて仕方がない。

車内で刑事がだれに向けるでもなくいった、「馬鹿なことをしたもんだ」という言葉がずっと頭に響いていた。

>了<

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2870x/>

囚

2011年12月20日15時48分発行